

京都大学大学院文学研究科・文学部

教員の研究活動状況（2010～2014年）

平成27（2015）年1月

教員の研究活動状況（2010～2014年）

[文献文化学専攻]

木田 章義（国語学国文学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 上代特殊仮名遣のエ列乙類・イ列乙類の問題 『国語国文』80-1、2011年 pp35-49
2. 「形容詞の活用が揃うまで」 『訓点語と訓点資料』127輯、2011年、pp65-79
3. 「日本語とウイグル語の名詞化語尾について」2012年、『アルタイ語比較研究』中央民族大学出版社
4. 「上代特殊仮名遣と母音調和」2012年11月、『国語国文』81-11、pp36-56
5. 「音韻史」 『国語史を学ぶ人のために』世界思想社、2013年、pp99-140
6. 「文体史」 『国語史を学ぶ人のために』世界思想社、2013年、pp215-260
7. 「日本語の証拠性表現について」2013年、中央民族大学出版社
8. 「狸親父の一言——古事記はよめるか」2014年、『国語国文』83-9、pp3-42

II. 自己評価

幅広く、一つ一つの分野が丁寧に考察されているので、論文には優れたものが多いようである。もともと文科系の研究は、じっくりと調査し、分析するので、1、2年に1本くらいのペースで新しい発想の論文を発表して行ければ上出来である。そのペースが守られているようである。一つ一つの論文の内容は、時間が経っても、訂正する必要がない程度の完成度であるから、本人も十分納得しているであろう。これからは最終的なまとめを行うものと思われるが、それはそのまま日本語の音韻史、文法史になるだろう。

大谷 雅夫（国語学国文学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『看聞日記紙背和漢聯句譯注』臨川書店 2011年、249頁（共著）
2. 『万葉集（一）』、岩波書店 2013年、531頁（共著）
3. 『万葉集（二）』、岩波書店 2013年、481頁（共著）
4. 『万葉集（三）』、岩波書店 2013年、489頁（共著）
5. 『万葉集（四）』、岩波書店 2014年、463頁（共著）

【論文】

1. 「『源氏物語』と漢文学」（『源氏物語と東アジア』新典社） 2010年、31p-59p
2. 「死をいたむことば—大伴君熊凝、吉備津采女の場合—」（『萬葉集研究』第三十二集、塙書房） 2011年、107p-161p
3. 「近世日本の『論語』」（『江戸の漢文脈』竹林舎） 2012年4月、11p-38p
4. 「雅と俗のあいだ」（『日本思想史講座3—近世』ペリかん社） 2012年12月、145p-148p
5. 「名歌を読み直す—「いはそそく」補説」「文学」14-3 2013年、39p—42p
6. 「春の悲しみ—国文学における—」「東方学」百二十八輯 2014年、1p-20p
7. 「芭蕉・素堂両吟和漢俳諧歌仙「破風口に」注解（一）」「ビブリア」142号、2014年10月3p-16p

II. 自己評価

この期間は『万葉集』の注釈にほとんど全力を傾注してきた感がある。しかし、その合間に科学研究費による和漢聯句の共同研究を進めることができ、また源氏物語と漢文学との関わりに関する比較文学論、および近世儒学にかかわる論文も公刊できた。今後も万葉集、和漢聯句、比較文学研究、日本近世儒学の研究を並行して進めていきたい。

大槻 信（国語学国文学専修准教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「願海書志」、『訓点語と訓点資料』第127輯（築島裕博士追悼号）、2011年、44-64
2. 「勸修寺藏金剛頂大教王経頼尊永承点（第二）积文稿」、『勸修寺論輯』8号、2012年、左1-21
3. 「2010年・2011年における日本語学会の展望 研究資料（史的研究）」、『日本語の研究』第8巻3号、2012年、9-13
4. 「『新撰字鏡』序文と『法琳別伝』」（小林雄一・森下真衣と共著）、『国語国文』第82巻第1号、2013年、34-48
5. 「語彙史」、『国語史を学ぶ人のために』木田章義編、世界思想社、2013年、71-98
6. 「古辞書與和訓——新撰字鏡〈臨時雜要字〉——」、『敦煌学・日本学 続編—石塚晴通教授古稀紀念論文集—』、上海辞書出版社、2013年、270-290
7. 「絶品絵——慧友筆高山寺重宝目録——」、『平成二十五年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集(高山寺典籍文書綜合調査団)』、2014年、58-63
8. 『日本語大事典』項目執筆、朝倉書店、2014年、11項目

II. 自己評価

この期間には、訓点資料を中心とした原本の実地調査と記述的研究、ならびに平安期の古辞書の研究を行った。それらの研究に基づく論文を発表したほか、二年間を総括する展望論文を執筆した。また、研究者・一般双方に向けたシンポジウム「日本語の起源と古代日本語」を企画し開

催したほか、『国語史を学ぶ人のために』のような一般向けの教科書執筆も行ったことは、研究と公表の両面をみたしたものとして評価できる。また、原本調査には大学院生を伴うなど若手育成にも力を注いでいる。今後は、古辞書関係の論文を集成し公刊する予定がある。基礎的研究を継続すると同時に、若手育成と一般への発信をいっそう心掛けたい。

金光 桂子（国語学国文学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『看聞日記紙背和漢聯句譯注』（共著）、臨川書店、2011年、249頁

【論文】

1. 「『我身にたどる姫君』の女帝と「天」・「唐」」『日本語日本文学』（輔仁大学日本語文学系）、第41輯、2014年、23-35頁
2. 「中世王朝物語『あきぎり』引歌小考—室町物語『しぐれ』との関係におよぶ—」『国語国文』第83巻第7号、2014年、22-36頁

II. 自己評価

『我身にたどる姫君』に登場する「女帝」の人物像を、先行物語の女性像と比較しつつ考察した。その結果、平安後期以降の物語作者たちが異国に託していた理想が、物語史上稀有な存在である「女帝」の誕生につながっていることを明らかにし、従来から続けてきた「女帝」に関する分析を発展させることができた。

また、中世王朝物語から室町物語への継承と変容に関する研究に取りかかった。その成果として、いずれも〈しのびね〉型の話型に属する『あきぎり』と『しぐれ』の関係について、『しぐれ』の新出写本を基に新たな見解を提示した。今後は他の〈しのびね〉型の作品をも視野に入れつつ、このテーマでの研究を推進してゆく予定である。

平田 昌司（中国語学中国文学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「“水”の字音から」、『日本中国語学会第60回全国大会予稿集』、2010年、62-65.
2. 「回望中原夕靄時—失陥汴洛後的「雅音」想像」、『中國文學學報』第2期（北京大學中文系、香港中文大學中文系）、2011年、165-175.
3. 「慧琳「次辯文字功德及出生次第」について」、『日本中国語学会第62回大会予稿集』、2012年、328-332.
4. 「杜甫「秋興八首」「詠懷古跡五首」「諸將五首」の韻律」、『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』（東京：好文出版）、2013年、113-122.
5. 「制御された逸脱—杜甫七言拗律論」、『中国文学報』第83冊、2012年〔実際の刊行は2013

年] , 18-34.

6. 「「仁義礼智」を捨てよう」, 小南一郎編『学問のかたち』(東京:汲古書院), 2014年, 307-338.

II. 自己評価

①清代小説『醒世姻縁伝』を文法・文体・文学的に分析した学会等発表3回、②中国近世における音韻規範意識についての論文1篇、③杜甫の律詩の韻律法についての論文2篇、④20世紀中国学術史についての論文1篇、⑤上古・中古中国語の再建に関して疑問を提示した論文2篇、学会発表1回、⑥近代中国文学史についての学会発表1回などが今期の研究業績である。企画の分担者として新規に課題を与えられて白紙から取り組んだ場合もあり、必ずしも効率的に研究をすすめられたわけではない。

今後は、北京大学出版社から刊行予定の『文化制度与汉语史(文化制度と中国語史)』のとりまとめに時間を割ける余裕があればよいと期待している。

木津 祐子 (中国語学中国文学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. (共著) 岩田礼編『漢語方言解釈地図・続集』(好文出版), 2012年2月, 169頁
2. (単著) 『京都大学文学研究科蔵 琉球写本『人中畫』四巻付『百姓』』(臨川書店), 2013年4月, 800頁
3. (共著) 中村春作編『訓読から見直す東アジア』(東京大学出版会), 2014年7月, 318頁

【論文】

1. (共著) 『山西鎮辺垣布陣図』(仮称)に関する地理学、文献学、絵画論的調査—予備的考察—, 『京都大學文學部研究紀要』49号, 2010年3月, 1-53 (53)
2. 通事の「官話」受容—もう一つの「訓読」—, 中村春作等編『続・訓読論—東アジア漢文世界の形成』(勉誠出版), 2010年11月, 260-291 (30)
3. (共著) 「国立故宮博物院蔵『山西辺垣図』および『山西三関辺垣図』と京都大学蔵『山西鎮辺垣布陣図』との比較, 『京都大學文學部研究紀要』50号, 2011年3月, 1-29 (29)
4. 琉球本『人中畫』の成立—併せてそれが留める原刊本の姿について—, 『中國文學報』第81冊, 2011年6月, 36-57 (22)
5. 『朱子語類』“有”構文における「存在」義, 『東京大学中国語中国文学紀要』14, 2011年11月, 63-88 (26)
6. 「官話」の現地化—長崎通事書の二重他動詞「把」と琉球通事書の処置文—, 『京都大學文學部研究紀要』51, 2012年3月, 129-147 (19)
7. (共著) 国立故宮博物院ならびに京都大学所蔵の「山西辺垣図群」の描図パターンの比較と分類, 『京都大學文學部研究紀要』51, 2012年3月, 1-32 (32)
8. 『廣應官話』と乾隆年間の琉球通事, 『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』, 好文出版, 2013年3月, 175-186 (12)

9. “有”構文の初出導入機能から見た『山海経』各経の内部差異, 『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』(白帝社), 2013年5月, 276-296 (21)
10. 琉球稿本『官音簡要揀選六條』について, 『高田時教授退職記念東方學研究論集』(臨川書店), 2014年6月, 105-118 (14)
11. 不定指称としての“一箇”成立前史——『朱子語類』の場合——, 『中国語学』291, 2014年10月, 46-63 (18)

II. 自己評価

2010年から現在に到る研究は、A:先期に引き続いての長崎及び琉球で編まれた官話学習書の整理と研究(著書2・3/論文2・4・6・8・10)、B:現代中国語の「存在文」「不定指称」の成立史研究(5・9・11)、C:本学図書館所蔵中国地区の共同調査(1・3・7)である。Aの研究はこの期間に科研補助金(基盤C)を獲得し、資料整理と分析を行ってきた成果で、著書2はその重要な成果の一つである。また研究Bは、現代中国語・古代中国語文法学者との共同研究であり、現在の本人の研究にとって重要な位置を占めている。特に論文11は、現代中国語の不定指称として最も一般的な「一箇+人」形式が、南宋の『朱子語類』においては全く異なる機能を有していたことを指摘し得た初めての論文として注目された。今後は「一箇」の成立史をさらに掘り下げる方向で研究を深めていきたいと考えている。

緑川 英樹 (中国語学中国文学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『看聞日記紙背 和漢聯句訳注』(共著) 京都大学国文学研究室・中国文学研究室 編 臨川書店 2011年2月 総249頁
2. 『詩僧皎然集注』(共著) 乾源俊 主編 汲古書院 2014年3月 総350頁

【論文】

1. 「雨の情景——陳与義の詠雨詩と杜甫——」 『中国文学報』第83冊 京都大学中国文学会 2012年10月 pp.175-199
2. 『莫砺鋒詩話』 「中秋」「除夜」(共訳) 『颯風』第50号 2012年1月 pp.39-56
3. 『莫砺鋒詩話』 「黄昏」「月」(共訳) 『颯風』第51号 2012年12月 pp.35-64
4. 『莫砺鋒詩話』 「雨」「雪」(共訳) 『颯風』第52号 2014年2月 pp.55-85

II. 自己評価

本期間は主として六朝および唐宋文学研究に従事してきたが、訳注・目録などの基礎作業が多く、論文の生産性の低さは否めない(古典学における訳注の重要性は贅言を要しないが)。今後は宋代文学を中心に、もう少し系統的、計画的な論文発表を心がけたい。2012年に刊行した「雨の情景——陳与義の詠雨詩と杜甫——」は、紙幅の制約がある記念号に掲載したため、論述不足の憾みがのこる。現在、その続篇を準備しているところである。また、この数年来、わたしが主催してきた研究会の成果として『韓愈詩訳注』第一冊の上梓が間近であり、引き続き第二冊以降

の刊行にとりくんでゆく予定。

宇佐美 文理（中国哲学史専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『中国絵画入門』（岩波新書）（岩波書店・2014・203p）
2. 『芸術理論古典文献アンソロジー東洋編』（青木孝夫氏と共編・藝術学舎・2014・428p）
3. 『『朱子語類』訳注・巻十四』（中純夫編・汲古書院・2013・274p）
4. 『岩波 世界人名大辞典』（岩波書店辞典編集部編・岩波書店・2013・3610p）

【論文】

1. 「六朝時代における「信仰」の素描」（『三教交渉論叢續編』（京都大学人文科学研究所）・2011・1-25）
2. 「術数類小考」（『陰陽五行のサイエンス 思想編』（京都大学人文科学研究所）・2011・100-110）
3. 「模倣の価値」（『中国思想史研究』第31号・2011・33-64）
（中文版『模倣的価値』（方旭東校訳・『哲学と宗教』第六輯・2013・31-46））
4. 「国立故宫博物院ならびに京都大学所蔵の「山西辺垣図群」の描図パターンの比較と分類」（『京都大学文学部研究紀要』第五十一号・田中和子、木津祐子との共著・2012・1-29）
5. 「「形」と気象」（『哲学研究』593号・2012・33-53）
6. 「小學と書」（『中国思想史研究』第34号・2013・85-105）
7. 「「形」についての再考」（『中国思想史研究』第35号・2014・32-47）

II. 自己評価

論文はコンスタントに書いており、充実した研究活動を続けていると評価できる。そのなかで、岩波新書『中国絵画入門』を上梓したことは特記すべきで、これまでに存在しなかった、学術書レベルの中国絵画入門書を世に問えたことは高く評価できる。今後はさらに中国哲学史上における藝術の持つ意味をより明らかにするために、特に文学（とりわけ杜甫）に視点をむけて研究を進めていく予定である。

赤松 明彦（インド古典学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. “Anumāna in Bhartṛhari’s *Vākyapadīya*.” *Logic in Earliest Classical India*, edited by Brendan Gillon, 2010.2, 183-190.
2. 「インド哲学における自我の探求と仏教の無我論」、上田閑照・氣多雅子編『仏教とは何か—宗教哲学からの問いかけ』、2010年5月、pp. 178-194.

3. 「パースペクティヴィズムにおける空華」『インド論理学研究』1、2010年9月、pp.41-58.
4. 「礼的秩序と法的秩序の相克—古代インド世界の視点から—」、富谷至編『東アジアにおける儀礼と刑罰』、2011年3月、pp.229-240.
5. 「ヒンドゥー教と大乘仏教」、桂紹隆・斎藤明・下田正弘・末木文美士編『シリーズ大乘仏教2 大乘仏教の誕生』（春秋社、東京）、2011年12月、pp.205-229.
6. “Capital Punishment in Ancient India: An Analysis of Punishments in Sanskrit Texts.” *Capital Punishment in East Asia*, edited by Itaru Tomiya. 2012.2, pp. 437-460.
7. 「1820年代のヘーゲルとインド哲学」、神山伸弘編『ヘーゲルとオリエント：ヘーゲル世界史哲学にオリエント世界像を結ばせた文化接触資料とその世界像の反歴史性』（平成21～23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 / 研究代表者 神山伸弘)、2012.3、pp. 161-218.
8. “Early Advaita and Mahayana Buddhism: The Formation of Illusionism and Its Development.” *Acta Asiatica*, 108, 2015.3, pp.1-12.

II. 自己評価

2010年10月1日より2014年9月30日までの間、京都大学理事・副学長であったので研究活動を離れており、この間に新たな研究プロジェクトは実施していない。ここに示した業績はいずれも従来の研究成果の一部を発表したものである。従来の研究を主題別に分けると、1) 言語哲学研究、2) 哲学的一元論研究、3) 論理学研究、4) 刑罰史研究、である。論文1は、言語哲学研究の成果で、2003年にヘルシンキで開催された第12回国際サンスクリット学会で発表した論考であり、特に選ばれて論文とされた。論文の2、5、8は、仏教を含むインド哲学史における一元論の展開をテーマとするもので、絶対的な神や真理をめぐるインド的観念の歴史を古代から中世までを対象にして考察しようとしている。論文3は、インド論理学研究の一環としてジャイナ教の論理を扱ったものである。論文の4と6は、「儀礼と刑罰」をテーマとする国際共同研究において古代インドを担当した時の成果である。今後は、研究主題の1)、2)、3)に重点を置くこととする。

横地 優子（インド古典学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. (単著) Yokochi, Yuko. *The Skandapurāna Volume III, Adhyāyas 34.1-61, 53-69. The Vindhyaśinī Cycle. Critical edition with an Introduction and Annotated English Synopsis. Groningen Oriental Studies, Supplement. Groningen: Egbert Forsten & Leiden: Brill. 2013. x + 401 pp.*
2. (共著) Bakker, Hans T., Peter C. Bisschop and Yuko Yokochi, in cooperation with Nina Murnig and Judit Törzök. *The Skandapurāna Volume IIB, Adhyāyas 30--52. The Vāhana and Naraka Cycles. Critical Edition with an Introduction and Annotated English Synopsis. Groningen Oriental Studies, Supplement. Leiden: Brill. 2014. xii + 372 pp.*
3. (一部協力) Bakker, Hans T. *The World of the Skandapurāna. Northern India in the Sixth and*

Seventh Centuries. Groningen Oriental Studies, Supplement. Brill, Leiden, 2014. [Chapter 'Goddess from the East' (pp. 241-261) の執筆協力、および Appendix: The Kotīvarsa Māhātmya of the Skandapurāna, edited by Yuko Yokochi (pp. 263-269) の提供]

【論文】

1. 横地優子 「処女戦士が最高神となる時」『アジア女神大全』（青土社 2011 年 3 月）, 345-363 頁.
2. Yokochi, Yuko. “Triumph of Buddhism or Śaivism?: A study in the ninth century Kashmirian poem Kapphinābhyudaya,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 60.3 (2012 年 3 月) , pp. 1153-60.
3. Yokochi, Yuko. “The development of Śaivism in Kotīvarsa, North Bengal, with Special Reference to the Kotīvarsa-Māhātmya in the Skandapurāna,” *Indo-Iranian Journal* 56. 3-4, 2013, pp.295-324.

II. 自己評価

スカンダプラーナの校訂研究プロジェクトに関しては、2013-14 年に単著（第 3 巻）、共著（第 2B 巻）、論文 3 および Bakker の著書中の Kotīvarsa-Māhātmya としてこの 10 年弱の研究成果をようやく公刊できたのは大きな成果である。これらは横地の科研費（基盤研究（C））のほかに、オランダ学術機構の Bakker を主幹とするスカンダプラーナ・プロジェクト研究費(2008-2012 年, NWO3063-050)の研究支援を受けている。The World of the Skandapurāna も Bakker の単著ではあるが、このプロジェクトの総括として共同研究の成果である。Bakker の引退にともない、今年からはライデン大学の Bisschop 教授と横地が核となり、ライデン大学と京都大学の連携を強化しながら第 4 巻以降の校訂研究を中心としてプロジェクトを進めていく方針である。一方、国際学会等で発表しつつも論文にまとめきれていない材料や博士論文のうち著書 1 に含めなかった部分の単行本化を持ち越しており、それらの刊行が至急の要である。

ACHARYA Diwakar Nath（インド古典学専修准教授）

I 研究業績

[著書]

1. Early Tantric Vaiṣṇavism: Three Newly Discovered Works of the Pañcarātra. The *Svāyambhuvapañcarātra*, *Devāmṛtapanñcarātra* and *Aṣṭādaśavidhāna*. Critically edited from their 11th- and 12th-century Nepalese palm-leaf manuscripts with an Introduction and Notes. Collection Indologie 129, Early Tantra Series 2. Pondicherry: Institut Français de Pondichéry/École française d'Extrême-Orient, 2015 (in press).
2. Detailed dictionary entries in *Tāntrikābhidhānakośa III. A Dictionary of Technical Terms from Hindu Tantric Literature*. ed. D. Goodall and M. Rastelli. Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, 839. Beiträge zur Kultur- und Geistesgeschichte Asiens 76. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2013.

【論文】

1. An Investigation into the Background of the Śaiva Siddhānta Concept of Innate Impurity (mala), in *Journal of Indian Philosophy* 42 (2014), 1: pp.9- 25.
2. How to behave like a Bull? New Insight into the Origin and Religious Practices of Pāsupatas, in *Indo-*

Iranian Journal 56 (2013), 2: pp. 101–131.

3. Nēti nēti. Meaning and Function of an Enigmatic Phrase in the Gārgya-Ajātaśatru dialogue of Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad II.2 and II.3, in *Indo-Iranian Journal* 56 (2013), 1: 3–39.
4. Pāśupatas, in *Brill's Encyclopedia of Hinduism*, Volume III, 2011, 458–466.
5. The Pātravidhi: A Lakulīśa Pāśupata Manual on Purification and Use of the Initiate's Vessel, in: C. Watanabe, M. Desmarais & Y. Honda, eds., *Śaṃskṛtasādhitā: Studies in Honour of Professor Ashok N. Akhujkar*, New Delhi: D.K. Printworld, 2011, 1–28.
6. The Anteṣṭividhi: A Manual on the Last Rite of the Lakulīśa Pāśupatas, in *Journal Asiatique* 298.1 (2010), pp. 133–156.
7. More Evidence for Mahāyāna Buddhism and Sukhāvātī cult in India in the middle period: Early fifth to late sixth century Nepalese inscriptions, in *Journal of International Association of Buddhist Studies* 31.1–2 2008 (2010), pp.23–75.

II. 自己評価

In this period of five years I made tremendous progress in my research. I critically edited and translated two ancient texts of Pāśupatism (a lost school of Hinduism) in two papers. I also edited three ancient texts of Tantric Vaiṣṇavism with a detailed introduction with financial support from JSPS. It is appearing as a book (as No. 129) in Collection Indologie and is ready for release in January. I also published three research papers in the 'Indo-Iranian Journal' and the 'Journal of Indian Philosophy' solving tedious problems and aspects of interpretation of some Vedic texts. I also published analyzed the fifth and sixth century Buddhist inscription from Nepal and provided clear evidence for the Amitābha cult in India in the middle period, which was published as a paper in JIABS. In this period, the peers recognized my contribution to the field of my research, and I was requested to be a member of the editorial board of Collection Indologie published by Institut Français de Pondichéry and École française d'Extrême-Orient. Likewise, I accepted to become the editor-in-chief of 'Journal of Indian Philosophy' published by Springer, which is one of the best international peer-reviewed journals in the field of my research. I was also invited to Groningen, Leiden, and Yale Universities to give lectures. Thus, I am fully satisfied with my progress. I am now editing a Tantra text on Sun-worship from a Nepalese manuscript dated in 949 AD with JSPS support. I am also continuing my critical reading of Vedic texts.

宮崎 泉 (仏教学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. (共著) 『シリーズ大乘仏教 第6巻 空と中観』, 春秋社, 2012年, 「アティシヤの中観思想」, pp. 137–167.

【論文】

1. 「インド大乘仏教における解脱の思想と慈悲」, 『日本の哲学』12, 2011年, pp. 39–53.

2. 「『三昧王経』第32章における saṃjñā の位置について」、『印度学仏教学研究』63、(掲載予定)。

II. 自己評価

引き続き、11世紀のインド大乘仏教を起点に、インド仏教、チベット仏教の研究を進めているが、この研究期間は主にインド仏教研究に重点を置き、時代を遡る形でインド大乘仏教の展開についての研究を進めた。この間に論文となった数は少ないが、これは今後の研究のための新たな視座を獲得するために時間を費やしたことによる。全体としては、これまでの研究に一定の結論を与えた上で、今後全く新しい視点からの研究を進めていくための出発点となる研究をまとめることが出来たと考えている。これまでの研究を引き継ぐものには共著1と論文1があり、今後の新たな視点からの研究に繋がるものに論文2がある。論文2は直接には仏教の基本的な術語である「五蘊」の一である「想」(saṃjñā)の研究であるが、これを今後の研究のもう一つの起点としてインド大乘仏教とそのチベットへの伝播についての研究をさらに進めていく計画である。

高橋 宏幸 (西洋古典学講座教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『ウェレイユス・パテルクルス ローマ世界の歴史』、京都大学学術出版会、2012年、249ページ (西田卓生と共訳)

【論文】

1. 「『アエネーイス』結末場面における「好機」」、『フィロロギカー古典文献学のために』、Vol.6、2011年、pp.13-33.
2. 「『アエネーイス』における「葬礼」」、『フィロロギカー古典文献学のために』、Vol.8、2013年、pp.1-24.
3. 「馬を馴らす」、『文学』15-1、2014年、pp. 51-62.
4. 「Reconsidering the Final Scene of the *Aeneid*」、*Japan Studies in Classical Antiquity*, Vol.2, 2014, 103-121.

II. 自己評価

評価できる点は3つ。第1は、これまで積み重ねてきたウェルギリウス『アエネーイス』に関する研究について一定のまとまりをつけられたこと(主要な成果は[論文]の項に挙げた3論文と現在準備中の論文1編)。第2は、カエサル関連著作の邦訳、とくに、作者不詳『アレクサンドリア戦記』『アフリカ戦記』『ヒスパーニア戦記』という未邦訳作品について訳業完成の見通しが立てられたこと。第3は、羅和辞典の項目執筆および編集に携わり、2、3年後の刊行に向けて寄与できたこと。今後の展望としては、これまでもそうであったように、これからも現代に通底する古典の伝統、とくにラテン文学の表現について考究を深めたい。

マルティン・チェシュコ (西洋古典学講座准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『古典ギリシア語文典』 (共著)、白水社、2015

【論文】

1. “Techniques of foreshadowing and character presentation in Menander's *Aspis* in the light of Greek dramatic tradition” 西洋古典論集 XXII (中務哲郎教授 退職記念号) (京都大学西洋古典研究会 2010) 163-215
2. “Menander’s self-advertisement or life in and out of the canon”, *JASCA (Japan Studies in Classical Antiquity)* 1 (2011), 111-136
3. 女たちとギリシャ喜劇の一貫性 (Dangerous Women and Unity in Greek Comedy) 『西洋古典学研究』 LXIII (2015)

II. 自己評価

I devoted most of my time to a systematic treatment of Attic Greek grammar intended for students (co-written with Koji Hirayama). It will be published next year (2015) and I am pleased with the methodology behind it – it is modern, easy to use, systematic and user-friendly. This project is nearing its end and I can finally return to more serious philological work – I am preparing a commentary on the comic poet Philemon.

佐藤 昭裕 (スラブ語学スラブ文学専修教授)

I. 研究業績

【論文】

1. 「スズダリ年代記訳注」3 (共著) 『古代ロシア研究』22 (2010) 13-27
2. 「簡述編集版『ザドンシチナ』—テキスト・訳・訳注・索引—」 (共著) 『古代ロシア研究』22 (2010) 97-189
3. 「古ロシア語と古教会スラブ語における指示代名詞 *сь, онъ, ть* について」 『京都大学文学部研究紀要』50 (2011) 81-131
4. 「古教会スラブ語四福音書における指示代名詞 *сь, онъ, ть* の主語としての使用」 『古代ロシア研究』23 (2014) 41-92
5. 「スズダリ年代記訳注」4 (共著) 『古代ロシア研究』23 (2014) 9-26

II. 自己評価

中世スラブ語を対象に、言語研究と文献学の2つの分野で研究を進めている。第1の分野では古教会スラブ語が中世ロシア語に与えた影響についてテキスト言語学的観点から考察している。

具体的には指示代名詞の使用を扱う。古教会スラブ語については、ギリシア語聖書の対応する形式からの翻訳パターンを分析し、共観福音書と「ヨハネによる福音書」の間でパターンが異なることを明らかにした。これは重要な観察であるが、その要因についてはなお検討を要する。さらに古ロシア語では、最も「中立的」な中称の指示代名詞 **ты** の実際の使用の範囲が予想よりも小さいことが分かった。この点についてもなお検討したい。第2の分野ではロシア年代記の翻訳・訳注作成の共同プロジェクトに中心的メンバーの一人として参加し、またスラブ研究室でも中世ロシアの文学作品の翻訳と訳注作成の共同作業を行うなど、成果をあげている。

松村 朋彦（ドイツ語学ドイツ文学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. (編著) 『動物とドイツ文学』、日本独文学会研究叢書 87、2012年、66頁。

【論文】

1. 「近代ドイツ文学と視覚の変容——ゲーテ、リヒテンベルク、ホフマン」、『希土』第35号、2010年、26-48頁。
2. 「非音楽的な音楽家——「貧しい辻音楽師」とその兄弟たち」、京都府立大学ドイツ文学会『AZUR』第3号、2011年、1-20頁。
3. 「味覚・愛・言葉——近代ドイツ文学と「食」のモチーフ」、『希土』第36号、2011年、51-64頁。
4. 「猿が言葉を話すとき——ホフマン、ハウフ、カフカ」、松村朋彦編『動物とドイツ文学』（日本独文学会研究叢書 87）、2012年、3-17頁。
5. 「人形から人造人間へ——近代ドイツ文学と人工の身体」、青地伯水編『啓蒙と反動』（春風社）、2013年、75-104頁。
6. 「五感の統合と協働——近代ドイツ文学と共感覚」、『希土』第38号、2013年、2-29頁。
7. 「ロマン主義はファウストを変形する——シャミッソーとE.T.A.ホフマン」、『希土』第39号、2014年、111-127頁。

II. 自己評価

この数年間、次の二つのテーマにそくして研究をおこなってきた。(1) 五感で読むドイツ文学：活字文化が視覚の優位をもたらしたというマクルーハンのテーゼに抗して、文学は五感のすべてに働きかけ、五感を統合するメディアであるという観点から、ドイツ文学を読みなおす。

(2) 人間主義を超えて：「人間」と「人間ならざるもの」とのあいだの境界が流動化しつつある現代の状況をふまえて、「人間」の周縁やその外部に位置するものの視点から、ドイツ文学を捉えなおす。(1)については論文1、2、3、6が、(2)については編著1、論文4、5が、その成果である。どちらのテーマについてもまだ多くの課題が残されているが、(1)のテーマにかんしては、1～2篇の論文を新たに書き足して、近い将来書物の形にまとめる予定である。

川島 隆（ドイツ語学ドイツ文学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『シンプル・ドイツ語—空欄補充式—』（共著）、郁文堂、2012年4月、79頁
2. 『NHK テレビテキスト 100分 de 名著：カフカ「変身」—確かな場所など、どこにもない—』（単著）、NHK出版、2012年4月、100頁
3. ペーター・ビュトナー『ハイジの原点—アルプスの少女アデライーデー』（訳）、郁文堂、2013年3月、128頁
4. 『図説 アルプスの少女ハイジ—『ハイジ』でよみとく 19世紀スイス—』（共著）、河出書房新社、2013年9月、127頁
5. ジュビレ・クレーマー『メディア、使者、伝達作用—メディア性の「形而上学」の試み』（共訳）、晃洋書房、2014年5月、300+17頁

【論文】

1. 「カフカ『失踪者』における「劇場」と映画的なもの」、『カフカと劇場』（須藤勲・佐々木茂人編）、2010年10月、pp. 16-27
2. 「旧社会主義圏に広がる市民アクセス—統一ドイツ—」、『ネット時代のパブリック・アクセス』（金山勉・津田正夫編）、世界思想社、2011年4月、pp. 100-114
3. 「グリルパルツァー『リブツァ』における性と政治—ボヘミアのリブシェ伝説の変遷との関連で—」、『Azur』4号、2012年2月、pp. 1-16
4. 「カフカの見たベルリン「ユダヤ民族ホーム」—ユダヤ人の身体表象と社会事業の接点—」、『コンフリクトの人文科学（大阪大学 GCOE プログラム）』4号、2012年3月、pp. 331-347
5. 「オットー・ヴァイニンガーとカール・クラウス—女性嫌悪から男性ジェンダーの再構築へ—」『思想』1058号、2012年6月、pp. 134-151
6. 「ヨハンナ・シュピーリの『ジーナ』—女性の大学教育と職業をめぐる葛藤—」、『希土』37号、2012年7月、pp. 38-57
7. 「人間のような犬と、犬のような人間—エーブナー=エッセンバッハからカフカまで—」『動物とドイツ文学』（松村朋彦編）、2012年10月、pp. 39-54
8. “Zwischen Richard Wagner und dem jiddischen Theater: Volk, Sprache und Kunst in den Erzählungen Franz Kafkas.” *Neue Beiträge zur Germanistik*, No. 145, 2012, pp. 155-171
9. 「ダーウィニズムの裏側—ヘッケルの進化論から見たカフカ『あるアカデミーへの報告』—」、『啓蒙と反動』（青地伯水編）、春風社、2013年4月、pp. 199-232
10. 「ゲーテを読むカフカ—「大文学」と「小文学」のはざままで—」、『モルフォロギア』35号、2013年10月、pp. 38-53
11. 「マウトナーのナショナリズム思想の展開—言語批判と「母語」礼賛のはざままで—」『プラハとダブリン：20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス—フリッツ・マウトナーとその射程—』（城真一編）、2013年10月、pp. 38-53
12. 「マウトナーの二つのボヘミア小説—同化ユダヤ人の「母語」と民族アイデンティティをめぐる—」、『ナマール』18号、2013年11月、pp. 51-61
13. 「世界の「転機」としてのカタストロフィ（特集まえがき）」、『ドイツ文学』148号、2014

年3月、pp. 1-7

14. 「ルポルタージュが伝える東日本大震災—ドイツにおける「フクシマ」表象の一断面—」、『ドイツ文学』148号、2014年3月、pp. 105-119

II. 自己評価

当該期間の前半においては、2010年3月の著書『カフカの〈中国〉と同時代言説』（彩流社）の延長線上でカフカ文学に取り組み、さらにボヘミア（現在のチェコ）のドイツ語文学全般へ視野を広げ、言語とナショナリズムの問題を研究した。その成果を順次、各種学会誌に発表するかたわら、NHKの教養番組「100分de名著」に出演するなど、一般に向けて最新の研究成果を仲介する活動に努めた。期間の後半においては、シュペーリ文学に関する一般向け解説書を刊行するとともに、同じく訳書を刊行した。もう一つの研究分野であるメディア論に関しては、理論的著作の翻訳を行ったが、ドイツのマスメディアによる東日本大震災の表象をめぐる研究成果の公表が量的に不十分であったと考えている。

若島 正（英語学英米文学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. ウラジーミル・ナボコフ『ローラのオリジナル』単著（翻訳）、作品社、2011年、238頁
2. ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフ全短篇』共著（翻訳）、作品社、2011年、880頁
3. 『書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ』共編著、研究社、2011年、364頁
4. 『乱視読者のSF講義』単著、国書刊行会、2011年、307+i iii 頁
5. ジョン・アップダイク『アップダイクと私』共著（翻訳）、河出書房新社、2013年、290頁
6. フレッド・ウェイツキン『ボビー・フィッシャーを探して』単著（翻訳）、みすず書房、2014年、354+i iii 頁

【論文】

1. 「『ロリータ』と英国大衆小説—グリーン=ゴードン論争の背景をめぐって」単著、若島正・沼野充義（編）『書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ』、2011年、研究社、65-81
2. 「ナボコフと哲学、そして読者」単著、戸田山和久・美濃正・出口康夫（編）『これが哲学だ!』、2012年、大隅書店、170-178
3. 「ナボコフの自伝『記憶よ、語れ』を読む」単著、『マーク・トウェイン—研究と批評』、2012年、第11号、24-30
4. 「目の中の痛み—ナボコフの『プニン』を読む」単著、藤平育子（監修）『抵抗することば—暴力と文学的想像力』、2014年、南雲堂、155-172

II. 自己評価

ウラジーミル・ナボコフ研究の分野では、2009年に刊行された未完長篇『ローラのオリジナル』の翻訳を上梓することができた。また、この作品をめぐって、各国語の翻訳者によるディスカッションに加わり、その成果が Yuri Levin 編の論集 *Shades of Laura: Vladimir Nabokov's Last*

Novel The Original of Laura に円卓会議“Translating Laura”として収録された。また、2010年3月に京都で開催した国際学会の報告集を、英語版の *Proceedings* に引き続いて、独自編集した日本語版を『書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ』として出版することができた。

今後の展望としては、進行中の翻訳数点を2015年に刊行するとともに、近年目立った成果が出てきている、ナボコフ作品のまったく新しい観点からの読み直しも試みる予定をしている。

佐々木 徹 (英語学英米文学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 共著 *Charles Dickens in Context*, Ed. Sally Ledger and Holly Furneaux (Cambridge University Press), 2011年、405頁
2. 翻訳チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』上・下 (河出文庫)、2011年、415、411頁
3. 共著 *Dickens in Japan: Bicentenary Essays* (大阪教育図書) 2013年、229頁

【論文】

1. 「推理小説の伝統とフォークナー」、『フォークナー』第13号、2011年4月、pp. 22-45.
2. 「オースティンとディケンズ」、『ジェイン・オースティン研究』第5号、2011年6月、pp. 1-20.
3. “Translating *Great Expectations* into Japanese”, *The Dickensian* Vol. 107 Part 3, 2011年12月、pp. 197-201.
4. 「読書の記憶——『プラエテリタ』の結末と『ダロウェイ夫人』」、『Web 英語青年』、2012年5月、pp. 12-29、2012年6月、pp. 21-32.
5. 「『遺産』の文言を吟味する」、『Web 英語青年』、2012年9月、pp. 6-19、2012年10月、pp. 2-17.
6. 「ディケンズと靴墨」、『Web 英語青年』、2012年11月、pp. 2-13、2012年12月、pp. 2-19.

II. 自己評価

長年の研究テーマとしてきた英国作家チャールズ・ディケンズが2012年に生誕200年を迎えた。これを機としてケンブリッジ大学から出版された論集への参加、日本で出版された英語論文集の編集、ディケンズの生地ポーツマスで行われた国際学会での講演、ディケンズ専門誌における朗読評等を通じて研究成果を国際的に発信することができた。また、国内においても学術誌における論文発表はもとより、『大いなる遺産』の翻訳をはじめ、日刊新聞や演劇パンフレット等を通じて研究成果を広い場において発信することができた。近い将来、これらをまとめた本格的なディケンズ研究を上梓したい。

家入 葉子 (英語学英米文学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. *Middle and Modern English Corpus Linguistics: A Multi-dimensional Approach*. Amsterdam: John Benjamins. 2012 年. 287 頁. (Manfred Markus, Yoko Iyeiri, Reinhard Heuberger, & Emil Chamson 共編著)
2. 『ことばとこころの探求』開拓社. 2012 年. 406 頁. (大橋浩・他編、“*To Convince Someone To Do Something* in Present-Day American English”, pp. 363-376 を執筆)
3. *Chaucer’s Language: Cognitive Perspectives*. Suita: Osaka Books. 2013 年. 151 頁. (Yoshiyuki Nakao & Yoko Iyeiri 共編著)
4. *Approaching Language Variation through Corpora*. Bern: Peter Lang. 2013 年. 421 頁. (Shunji Yamazaki & Robert Sigley 共編、“The Verb *pray* in Chaucer and Caxton”, pp. 289-306 を執筆)
5. *Fifteenth-Century English: From Grammar to Text*. Suita: Osaka Books. 2013 年. 157 頁. (Akinobu Tani & Hisao Osaki 共編、“Scribal Behaviours in the Middle English Translation of the *Meditationes Vitae Christi* in MS Pepys 2125”, pp. 141-154 を執筆)
6. *Phases of the History of English: Selection of Papers Read at SHELL 2012*. Frankfurt am Main: Peter Lang. 2013 年. 384 頁. (Michio Hosaka, Michiko Ogura, Hironori Suzuki, & Akinobu Tani 共編、“The Pronoun *it* and the Dating of Middle English Texts”, pp. 339-350 を執筆)
7. *Meaning in the History of English: Words and Texts in Context*. Amsterdam: John Benjamins. 2013 年. 348 頁. (Andreas H. Jucker, Daniela Landert, Annina Seiler, & Nicole Studer-Joho 共編、“The Positioning of Adverbial Clauses in the Paston Letters”, pp. 211-229 を執筆)
8. *Studies in Middle and Modern English: Historical Change*. Suita: Osaka Books. 2014 年. 156 頁. (Iyeiri, Yoko & Jennifer Smith 共編著)

【論文】

1. “Principal Component Analysis of Turn-initial Words in Spoken Interactions”. *Literary and Linguistic Computing* 26 (2011): 139-152. (Yoko Iyeiri, Michiko Yaguchi, & Yasumasa Baba 共著)
2. “Textual Transmission and Language Change in the Fifteenth Century: John Trevisa’s Middle English Translation of Higden’s *Polychronicon*”. *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University* 51 (2012): 107-128.
3. 「Doubt にかかわる構文の歴史的変化について (2)——Early Modern English Prose Selections の分析から」『九大英文学』 54 (2012): 119-134.
4. “Additional Eighteenth-Century Materials on Middle English in the Hunterian Collection of the Glasgow University Library”. *Notes and Queries* 59(3) (2012): 332-335. (Yoko Iyeiri, Jennifer Smith, & Jonathan Hope 共著)

II. 自己評価

2010 年度から 2014 年度の研究は、中英語のテキストに関するもの、近現代英語のコーパス言語学に関するもの、に大きく分類することができる。中英語研究では、2010 年度以降は、特に写本の伝播を視野に入れながら、研究を進めてきたことが特徴的である。その結果、Pepys 2125

写本の調査では、15 世紀英語の方言研究に寄与する成果が得られつつある。近現代英語については、コーパスの構築とその利用に焦点を当てて研究を進めてきた。Early English Books Online 等のデータベースをコーパスとして利用する方法を、さまざまなパイロット研究を通して確立しつつあり、初期近代英語に特徴的なくつかの現象（たとえば *always* の-s の有無にかかわる歴史的揺れ）について、顕著な成果を上げつつあるといえる。

2015年度以降は、中英語研究、近現代英語研究の両面において、以上のような研究の方向を維持しながら、さらに研究の進展をはかる。Pepys 2125写本については、現在、校訂版作成の途上にあり、近く、その出版をめざしている。近現代英語についても、コーパス構築の多様化をはかりながら、文体の違い等も含めた言語の細部に注意を払い、統語や語形成等を中心に、英語史的な視点から研究を進めていく予定である。

廣田 篤彦（英語学英米文学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. （共著）*Shakespeare et la mémoire*, ed. Christophe Hausermann, Société Shakespeare Française, 2013, 253 頁
2. （共著）*Renaissance Shakespeare: Shakespeare Renaissances*, ed. Martin Procházka, Andreas Höfele, Michael Dobson, and Hanna Scolnicov, University of Delaware Press, 2014, 456 頁

【論文】

1. “The Kingdoms of Lear and Tate and Shakespeare: A Restoration Reconfiguration of Archipelagic Kingdoms”, *Early Modern Literary Studies*, Special Issue 21, 2013, online journal (purl.org/emis)
2. 「フランスかぶれの宮廷人と宗教改革——『ヘンリー八世』における服装の風刺とイングランド人アイデンティティ——」、*Shakespeare News* 53.1, 2013, 31-41 頁

II. 自己評価

本期間においては、シェイクスピア演劇を中心とした初期近代英文学における諸問題を主として以下の二つの側面から考察した。

1) イングランド人アイデンティティが抱える脆弱性。具体的には、前期間に始めた、服装を通じて表象されるアイデンティティの不安定性についての研究を継続する一方、特に神話の文学的伝統とこの問題との関係についての研究を開始した。特に論文 2 においてこれら二つを統合した論考を発表すると共に、IRCL (Paul-Valérie 大学)の研究チームが行っている共同研究への参加を求められた。この研究に関しては、今後、更なる考察を行うと共に、共同研究を進めることになっている。

2) シェイクスピア演劇における国際関係の表象。特に勢力均衡思想の描かれ方について、研究成果を複数の国際学会において発表する機会を得、シェイクスピア研究において世界で最も大規模な学会である World Shakespeare Congress において口頭発表した内容を、著書 2 において刊行することを得た。

森 慎一郎 (英語学英米文学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. ジョナサン・フランゼン『フリーダム』（翻訳）、早川書房、2012年、766頁。
2. ジョン・アップダイク『アップダイクと私——アップダイク・エッセイ傑作選』（共訳）、河出書房新社、2013年、290頁（うちおよそ半分を担当）。
3. F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』（翻訳・改訳版）、作品社、2014年、596頁。

【論文】

1. 「フォークナーの時間の線——『死の床に横たわりて』妄読」、『れにくさ』第5-3号、2014年、229-242頁。

II. 自己評価

フィッツジェラルド研究の分野においては、代表的な長篇小説について、学会発表や講演のかたちで研究成果の紹介・発表を進めることができた。中でも、『夜はやさし』の翻訳を近年の研究成果も踏まえて改訂し、そこにこの小説の執筆背景をめぐる100頁を超える編訳書簡選（「小説『夜はやさし』の舞台裏——作者とその周辺の人々の書簡より」）を付すことができたのは、この分野における代表的業績として評価できると思う。なお、未完の遺作『ラスト・タイクーン』についても、作者の遺稿を念入りに検討しつつ翻訳刊行に向けた作業を進めている。

これに加えて、同時代作家ウィリアム・フォークナーの小説をめぐる論考を学会発表ならびに論文の形で公表できた。また、フィッツジェラルドと同じくアメリカ風俗作家の伝統に連なるジョン・アップダイクやジョナサン・フランゼンの著作の翻訳を上梓できたことも、今後の研究領域の拡張に繋がる成果と言ってよいと思う。

田口 紀子 (フランス語学フランス文学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』（吉川一義氏と共編）、2010年、京都大学学術出版会
2. Noriko Taguchi et Kazuyoshi Yoshikawa (éds.), *Comment naît une œuvre littéraire? – Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques*, Champion, 2011, pp.353
3. Noriko Taguchi (éd.), *Comment la fiction fait histoire : Emprunts, échanges, croisements*, Champion, à paraître en 2015, pp. 370

【論文】

1. 「生成論の射程」、『文学作品が生まれるとき — 生成のフランス文学』（田口紀子・吉川一義編）、京都大学学術出版会、2010、p. 1-16.
2. « L'avatar du « moi » narrateur chez Prosper Mérimée » in *Comment naît une œuvre littéraire? –*

Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques, K. Yoshikawa et N. Taguchi (éds.), Paris, Champion, 2011, pp.129-141.

3. « Le « moi » fictif de l'autobiographie : le cas de Benjamin Constant », in S. Kuwase, M. Masuda, J.-C. Sampieri (dir.), *Les Destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*. Éditions Universitaires de Dijon, 2012, p.161-169.
4. 第7章「批評」1～3（分担執筆）、『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』、小倉孝誠編著、世界思想社、2014年10月、149頁～161頁。
5. « De la contingence historique à la nécessité romanesque : le cas des romans historiques français des années 1820 », in *Comment la fiction fait histoire : Emprunts, échanges, croisements*, N.Taguchi (éd.), Paris, Champion, à paraître en 2015, pp. 125-142.

II. 自己評価

2010年以降は科学研究費(基盤研究B、平成21-24年)を受けた「フランス文学における歴史記述の総合的研究」のテーマを軸に研究を行った。具体的には1820年代フランスでの歴史小説の流行とそのジャンルの特徴を、ロマン主義歴史学の隆盛との関連、特に歴史家と歴史小説の「語り手」の相同性に注目して分析し、その後19世紀中葉に発展を見る三人称写実主義小説の同時代史としての性格につながることを検証した。その成果の一端は同テーマで開催した国際シンポジウムの論集として、2015年にフランスで出版される予定である。

今後は「小説」が「演劇」「歴史」という隣接ジャンルから影響をうけてロマン主義以降に創出した三人称の語り手が、19世紀半ば以降の写実主義小説において、現実世界と切り結ぶ新たな関係と、その詩学的意味を明らかにする事を目指す。

増田 真 (フランス語学フランス文学教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『ルソーを学ぶ人のために』（共著、桑瀬章二郎編）、世界思想社、2010、xvi+328+xii p. (第3章と第9章を担当)
2. Shojiro Kuwase, Makoto Masuda et Jean-Christophe Sampieri, *Les Destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*, Éditions universitaires de Dijon, 2012, 267p. (共著)

【論文】

1. 「18世紀フランスの言語論における「異文化」」、石川文康編『多元的世界観の共存とその条件』、国際高等研究所、2010年、p. 81-103
2. 「ルソーにおけるリズム論と夢想の詩学」、田口紀子・吉川一義編『文学作品が生まれるとき 生成のフランス文学』、京都大学学術出版会、2010、p. 235-263
3. « L'altérité culturelle dans les idées sur le langage en France au XVIIIe siècle » dans Luc Fraisse (dir.), *Séries et variations. Etudes littéraires offertes à Sylvain Menant*. Presses Universitaires de Paris-Sorbonne, 2010, p. 215-226.
4. « L'écrivain et son destin — Rousseau face à ses lecteurs dans *les Confessions* — » *Revue d'Etudes*

Francophones (Université Nationale de Séoul, Centre de Recherches sur la Francophonie), n°20, 2010, p. 280-309.

5. « La présence paradoxale du langage dans l'*Émile* de Rousseau — Structure et élaboration de l'œuvre — », dans K. Yoshikawa et N. Taguchi (dir.), *Comment naît une œuvre littéraire ? Brouillons, contextes, évolutions thématiques*, Champion, 2011, p. 39-53.
6. 「啓蒙と神秘思想 —ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエール『幸福な国民またはフェリシー人の政体』における宗教—」 富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会、2011、pp. 138-165.
7. « Argumentation philosophique et mise en scène autobiographique chez Rousseau. La rhétorique de l'intimité dans la « Profession de foi du vicaire savoyard », dans Shojiro Kuwase, Makoto Masuda et Jean-Christophe Sampieri, *Les Destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*, Éditions universitaires de Dijon, 2012, pp. 65-77.
8. « Institutions et persuasion dans la pensée politique de Rousseau », *Revue d'Études Franco-Coréennes*, vol. 63, Société d'Études Franco-Coréennes, février 2013, pp. 269-291.
9. « Forces et langage dans le livre II de l'*Émile* », *Recueil d'études sur l'Encyclopédie et les Lumières* (『『百科全書』・啓蒙研究論集』) n°2, mars 2013, pp. 205-222.
10. 「言語と他者 —ディドロと18世紀フランスの言語論—」『思想』第1076号、2013年第12号、pp. 269-285.
11. 「リズムと夢想 —ルソーにおける音楽論と文学的創造—」、永見文雄、三浦信孝、川出良枝編『ルソーと近代 ルソーの回帰・ルソーへの回帰』風行社、2014、pp. 54-67。(上記2の短縮版、ほぼ同内容)
12. « Nature humaine et autorité du discours dans la « Profession de foi du vicaire savoyard » », dans Blaise Bachofen, Bruno Bernardi, André Charrak et Florent Guénard (dir.), *Philosophie de Rousseau*, Classiques Garnier, 2014, pp. 471-484.

II. 自己評価

この4年間も、ルソーを中心として18世紀フランスの思想と文学の研究を続けてきた。中心的なテーマはルソーにおける言語論と政治思想の関係であるが、それに関連して、『エミール』における言語の問題やルソーにおけるリズム論の重要性に関する論文を発表した。そのテーマについては科学研究費補助金研究（基盤研究C）（「18世紀フランス思想における言語論の研究—ルソーを中心に—」）としても進めており、その枠内でディドロの言語論に関する論文も発表した。

2012年はルソー生誕300周年に当たり、世界各地で多様な行事が開催され、私も国内外で4件の研究発表を行った。

そのほか、「フランス文学における歴史記述の総合的研究」（京大仏文研究室）や「恐怖の研究—啓蒙と革命II」（京大人文研）といった共同研究に参加した。

今後はルソーに関する研究をまとめるとともに、その周辺の18世紀の思想と文学を対象としつつ、新たなテーマにも取り組みたい。

永盛 克也 (フランス語学フランス文学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』、田口紀子・吉川一義編、京都大学学術出版会、2010年

【論文】

1. « Racine et Sénèque. L'échec d'un idéal stoïcien dans la tragédie racinienne », *XVIIe siècle*, n° 248, 2010, p. 411-421.
2. « John E. Jackson, *L'Ambiguïté tragique. Essai sur une forme du tragique au théâtre* », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 2010, n° 4, p. 1015-1016.
3. « Les étapes de la composition d'une tragédie racinienne », in *Comment naît une œuvre littéraire? Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques*, éd. Yoshikawa et Taguchi, Honoré Champion, 2011, p. 25-38.
4. « L'écriture du moi dans le discours moraliste au XVIIe siècle », in *Les Destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*, éd. Kuwase, Masuda et Sempieri, Editions Universitaires de Dijon, 2012, p. 29-36.
5. « Histoire et fiction dans la tragédie du XVIIe siècle », in *Comment la fiction fait histoire – Emprunts, échanges, croisements –*, éd. Noriko Taguchi, Champion, 2015, p. 23-37. (出版予定)

II. 自己評価

フランス古典悲劇について研究を進める中で、以下のような問題を扱い、論文として発表した。フランス古典悲劇における創作原理としての詩学、フランス古典悲劇とストア主義の関係、フランス古典悲劇におけるフィクションと歴史的事実の混交の問題（特にアリストテレス詩学の要請する「真実らしさ」と観客が好む「ロマネスク」的要素の折衷の問題）、等である。それぞれの問題について、先行研究を十分に参照し、論点を整理した上で、具体的な作品の分析に立脚して自論を説得的に展開することができたと考えている。今後は、フランス古典悲劇における他のジャンル（特に叙事詩と小説）の影響に注目し、文学的伝統と間テクスト性について研究を進めていく予定である。

天野 恵 (イタリア語学イタリア文学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『イタリアの詩歌』、三修社、2010年、192頁 (pp.32-119 を担当)
2. 『岩波世界人名大辞典』、岩波書店、2013年、3610頁 (15-16世紀のイタリア人文学関係者の42項目を担当)

II. 自己評価

文学語としての色彩の極めて強い言語であるイタリア語の基本的性格やその具体的な様態が形成される過程において、16世紀の文人ピエトロ・ベンボによる『俗語論』の及ぼした影響は決定的であった。私が進めているのは、この著作を詳細に分析するための基礎資料として、手稿から初版、そして決定版に至る四半世紀の加筆・訂正の跡をフォントの色分けによって分かり易く示すテキストの整備である。

文学研究のみならずイタリア語史研究のためにも重要な作業であるが、非常に基礎的な研究であるために短時日では公表に値する成果に結び付きにくい。教育・研究機関に籍を置く者としては、とりあえず公刊可能な成果をまとめることも求められるわけで、反省すべき点はこうした方面の仕事に手が回らなかったことであり、今後はすでに明らかになった興味深い事実の発表にも力を注ぎたい。

村瀬 有司 (イタリア語学イタリア文学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『デイリーコンサイス 伊和・和伊辞典』、三省堂、2013年（共著）

【論文】

1. 「『エルサレム解放』第19歌の狼の比喻に関する一考察」、『大阪大学世界言語研究センター論集』、第7号、2013年3月、35-53.
2. 「トルクァート・タッソのインプレーサ論における像の問題」、『京都大学文学部紀要』、2015年刊行予定

II. 自己評価

2010年以降はトルクァート・タッソの創作理論を引き続いて検証する一方、タッソの代表作である叙事詩『エルサレム解放』の修辞技法について研究を進めた。前者については、従来からの研究テーマである像（イメージ）の問題を中心にタッソの創作理論を分析し、特にインプレーサ論における「似ている似姿」の問題を検証することで一定の成果を得ることができた。後者については、『エルサレム解放』の狼の比喻の分析を通じてタッソの形式面の特色を明らかにする一方、新たに8行詩節の形式と会話文の関係についてデータの収集を開始した。このテーマに関しては、今後ボイアルド、アリオスト、タッソの作品を比較しつつ数量的な分析を行う予定である。また研究活動と並行して、伊和辞典（共著）の執筆に少なからぬ時間と労力を費やした。伊和辞典は数がすくなくこれまで寡占状態が続いていたので、新たな辞書の刊行は一定の社会的貢献として評価できるものと思われる。

〔思想文化学専攻〕

出口 康夫（哲学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『応用哲学を学ぶ人のために』（共編著）、世界思想社、2011年
2. 『これが応用哲学だ！』（共編著）、大隅書店、2012年
3. 『心と社会を科学する』（共著）、東京大学出版会、2012年
4. 『未来の大学教員を育てる—京大文学部プレFDの挑戦』（共編著）、勁草書房、2013年
5. 『デカルトをめぐる論戦』（共編著）、京都大学学術出版会、2013年
6. 『科学と技術をよく考える』（共著）、名古屋大学出版会、2013年
7. Nothingness in Asian Philosophy（共著）、Routledge、2014年

【論文】

1. 「未来のファカルティをどう育てるか—京都大学文学研究科プレFDプロジェクトの試みを通じて—」（共著）、『京都大学高等教育研究』、vol.16、2010年、pp.91-111.
2. “Activity Realism and Parasitism of Science”、Proceedings of 20th Annual Meeting of Korean Society for Philosophy of Science, and East Asian Philosophy of Science Workshop、2011年、pp.367-380.
3. 「カントとゼーグナー：カント的「構成」の誕生（上）」、『哲学論叢』、vol.38、2011年、pp.22-34.
4. 「カントとゼーグナー：カント的「構成」の誕生（下）」、『哲学論叢』、vol.39、2012年、pp.1-12.
5. 「空の思想のロゴス：西谷啓治『空と即』再訪」、『理想』、vol. 689、2012年、pp.144-160.
6. “A Mountain by any Other Name: A Response to Koji Tanaka” pp. 335-43.
7. “Two Plus One Equals One: A Response to Brook Ziporyn”（共著）、Philosophy East and West、63-3、2013年、pp.353-58.
8. “The Contradictions Are True-And It’s Not Out of This World!: A Response to Takashi Yagisawa”、（共著）、Philosophy East and West、63-3、2013年、pp.370-72.
9. “Does a Table Have Buddha-Nature? A Moment of Yes and No. Answer! But not in Words or Signs! A Response to Mark Siderits”（共著）、Philosophy East and West、63-3、2013年、pp.387-98.
10. “Those Concepts Proliferate Everywhere: A Response to Constance Kassor”（共著）、Philosophy East and West、63-3, July, 411-16, 2013.
11. How We Think Madhyamikas Thinks: A Response to Tom Tillemans”（共著）、2013 (H.25), Philosophy East and West, 63-3, July, pp.426-35, 2013.
12. ビッグデータは科学を変えたか？,2014(H26),『現代思想』（青土社）vol.42-9,特集「ポスト・ビッグデータと統計学の時代」,pp.80-85.
13. Is Pseudo Jizāng a Dialetheist? Contradictions in Sānlùn School,第四回日中哲学フォーラム「日中の哲学者がともに考える—哲学の原理的あり方と現代社会における役割」会議記録,中国社会科学院哲学研究所,日本哲学会,pp.69-83, 2014.

II. 自己評価

科学的事実論や統計学の哲学を扱った科学哲学の研究(著書 1,3,5,6、論文 2,12)、カント数学論の研究(論文 3,4)、応用哲学についての研究(著書 1,2)、分析アジア哲学に関する研究(著書 7、論文 5,6,7,8,9,10,11,13)を中心として業績を挙げた。特に分析アジア哲学の業績は国際的な専門雑誌の特集号、英語共著として公表されており、国際的な注目を集めつつある。今後も上記の主要テーマの研究を進める一方、それらを統合する研究を推進したい。また引き続き、研究成果を英語論文・著作として発表することに務める。

中畑 正志 (西洋古代哲学史専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『魂の変容——心的基礎概念の歴史的構成』岩波書店、2011年、334頁
2. 『西洋哲学史 I』(共著)講談社、2011年、451頁
3. 『イスラーム哲学とキリスト教中世 I 理論哲学』(共著)岩波書店、2011年、342頁
4. 『哲学の挑戦』(共著)春風社、2012年、486頁
5. 『カテゴリー論、命題論』(訳、解説ほか)(新アリストテレス全集 第1巻)、岩波書店、2013年、461頁
6. 『魂について、自然学小論集』(訳、解説ほか)(新アリストテレス全集 第7巻)、岩波書店、2014年、556頁
7. 『プラトンを学ぶ人のために』(共著)世界思想社、2014年、295頁
8. 『新プラトン主義を学ぶ人のために』(共著)世界思想社、2014年、404頁

【論文】

1. 「アリストテレスの言い分——倫理的な知のあり方をめぐって」、『古代哲学研究』第42号、2010年、1-30頁、
2. 「「哲学」をめぐる争い——ピロソピアーとは何であったのか」、『日本の哲学』第11号、2010年、36-58頁
3. 「アリストテレスは「場所の論理」に何か関係があるのか?(西田哲学--その論理基盤を問う)」『アルケー』19号、2011年、31-46頁、
4. 「像と類似性——小池澄夫の仕事をめぐる覚書」『古代哲学研究』44号、2012年、66-82頁、
5. 「応答 荻原の批判に答えて」『古代哲学研究』44号、2012年、60-65頁
6. 「Μηδέν άγανから離れて: 自己知の原型と行方」『西洋古典学研究』号、2012年、100-108頁、
7. 「見ていることを感覚する——共通の感覚、内的感覚、そして意識」『哲学』64号、2013年、78-102頁
8. ‘Aristotle and Descartes on Perceiving that We See.’ *The Journal of Greco-Roman Studies*, 54, 2014.

II. 自己評価

この間の研究は、相互に連携する二つの課題に中心的に取り組んだ。一つは心的な諸概念の歴

史の解明であり、対象、感情、想像、志向性などの諸概念についての私自身の考察を集約するとともに、意識や自己意識についても、デカルトおよびカドワースの貢献についての通説の修正を含む新たな知見を提出した。もう一つは、心的概念を含めた多くの基礎概念の出発点となっているアリストテレス哲学の研究である。これについては、新『アリストテレス全集』の編集において中心的役割を担い、また「カテゴリー論」「魂について」に関してテキストの見直しにもとづく翻訳によってアリストテレスの思想を平明な形で提供するほか、註や解説を通じて、明確な解釈を提示した。前者の仕事は和辻哲郎文化賞を受賞し「<心>に関心を寄せるすべての人々にとって、新しい古典となる書」と評され、後者はいくつかの新聞に取りあげられるなど、一定の評価を得ることができた。今後は存在論の基礎概念や思考の枠組の形成史を解明する予定である。

川添 信介（西洋中世哲学史専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. (監訳・翻訳) 『中世の哲学 ケンブリッジ・コンパニオン』 (A・S・マクグレイド編)、京都大学学術出版会、2012、601頁
2. (補訳／解説) 『トマス・アキナス 神学大全 I、II』 (山田晶訳)、中央公論新社、2014、411+440頁

【論文】

1. 「トマス・アキナスの自然法はどこまで普遍的か」 『宗教研究』第85巻第4輯、2012、pp.122-123

II. 自己評価

2009年度から開始したトマス・アキナスの自然法論とそれに関連した中世スコラ倫理学に関する研究を着実に推進した。その成果の一部は論文として発表するとともに、平成26年度からは科研費基盤研究(B)「盛期・後期スコラ哲学の「実践的な知」と現代徳倫理学」の採択によって、より拡大された研究として成果をあげつつある。また、この科研による研究には新進・中堅の中世哲学史研究者の参加を求めることで、スコラ倫理学の持つ現代的意義を明らかとするための指針を与えた。2つの訳書『中世の哲学』と『トマス・アキナス 神学大全』の刊行も、哲学界に対して西洋中世哲学の価値を明らかなものとする成果を生んでいる。今後は上記の科研の研究を遂行し、中世スコラ倫理学における「徳」概念の意義をいっそう明確なものとすることを目指すことになる。

周藤 多紀（西洋中世哲学史専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. (共著) 『西洋哲学史 II』 講談社、2011年、448頁。
2. (単著) *Boethius on Mind, Grammar and Logic: A Study of Boethius' Commentaries on Peri Hermeneias*. E. J. Brill, 2012, pp. 296.

【論文】

1. 「二種類の嘘——アウグスティヌスによる嘘の定義」『アルケー（関西哲学年報）』第19号（2011）pp.111-122.
2. 「ボエティウスのプラトニズム——アリストテレス注解の視点から」『中世思想研究』第54号（2012）pp. 120-130.
3. 「ウスター倫理学注解とその背景——十三世紀西欧の『ニコマコス倫理学』 注解書」『山口大学哲学研究』第20巻（2013） pp.1-25.
4. 「『ウスター倫理学注解』における幸福概念」『西日本哲学会年報』第21号（2013）, pp.57-72.

II. 自己評価

これまでの研究によって少なからず誤解されていた、ボエティウスの言語哲学の基本構造を解明し、研究成果を英語で出版した。出版された英文単著は、欧米の西洋古代哲学・中世哲学研究者によって引用・批評を受けた。

続いて、十三世紀の『ニコマコス倫理学』注解のカタログを作成して出版した。未公開の『ニコマコス倫理学』注解の一つであり、これまで議論の俎上にあがっていなかった『ウスター倫理学注解』（ms. Worcester Cathedral Library Q.13）の校定版を作成した。今後は、写本でしか読むことができず、ほとんど研究されてこなかったオックスフォード大学で書かれた『ニコマコス倫理学』注解書、とくにヨハネス・ティティンザールの『倫理学注解』に焦点をあて、校訂版を作成して内容を明らかにすることを目指している。

福谷 茂（西洋近世哲学史専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『カントを学ぶ人のために』、世界思想社、2012年、pp.411(共著)

【論文】

1. 「ライブニッツの創造論(一)」、『近世哲学研究』第14号、2010年、15-35頁
2. 「形而上学としての人間学—カントにおける別の一つの形而上学への途—」、『哲学論集』第40号、2011年、pp.47-61
3. 「因果・時間・空間-カント第2類推について-」、『哲学論叢』第38号、2011年、pp.1-10

4. 「歴史・時間・事実-哲学史研究のための予備的考察-」、『近世哲学研究』第15号、2012年、pp.24-45
5. 「田邊元とカントー絶対弁証法から『種の論理』への論理ー」、『求真』第18号、2012年、pp.1-13
6. 「ヘノロジカル・カント」、『日本カント研究13 カントと形而上学』、2012年、pp.2-20
7. 「ライプニッツの創造論(二)」、『近世哲学研究』第17号、2013年、pp.34-55
8. 「カントとハイデガー-近世哲学におけるヘノロジーの系譜-」、『Heidegger-Forum』第8巻、2014年、pp.141-147
9. 「カント『遺稿』におけるスピノザ-『カントにおけるスピノザ問題』への寄与として-」、『思想』第1080号、2014年、pp.169-179
10. 「カントの誤謬論 一」、『哲学研究』第598号、2014年、pp.1-17

II. 自己評価

この数年間の研究は大きく二つのテーマに分けられる。一つはカント研究であるが、特に「ヘノロジー」という観点を導入することによってカント哲学の新しい局面を明らかにすることに従事した。それに伴い、「ヘノロジー」概念そのものをヨーロッパにおける提唱者たちの業績を吸収しつつも、そこでは圏外に置かれているカント及び近世哲学研究という私の目的に照らして活用可能なものとして開発するという課題にも着手している。この関係の仕事にはスピノザおよびハイデガーの研究者たちのあいだに反響があり、研究会ならびに学会で講演をするとともに論文として発表した。今後国際学会での同テーマの講演を予定している。いまひとつのテーマは日本哲学史研究であり、田邊元に関して論文2編(1編は2009年発表)を発表した。田邊元にとって決定的な影響を及ぼしたのはカントだがこの点を跡付けた業績は少なく、最近の田邊研究においてしばしば参照されているものとなっている。今後の予定としては研究の進んでいない高橋里美を取り上げる予定であり、これはヘノロジー研究と日本哲学史研究の合流点となるはずである。

上原 麻有子 (日本哲学史専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. « Kuki Shūzō. Une réflexion sur la rencontre avec l'autre », *Philosophes japonais contemporains*, Jacynthe Tremblay (dir.), Les Presses de l'Université de Montréal - Collection : Sociétés et Cultures de l'Asie, 2010, pp.356-367.
2. “The Philosophy of Translation : From Nishida Kitarō to Ogyū Sorai”, *Frontiers of Japanese Philosophy 7 – Classical Japanese Philosophy*, edited by James W. Heisig, Rein Raud, Nanzan Institute for Religion & Culture, 2010, pp. 305-319.
3. « Interpréter et traduire : l'invention d'une langue de la philosophie dans le Japon moderne », *La traduction : philosophie et tradition*, Christian Berner & Tatiana Milliaressi (éds), Villeneuve d'Ascq, Presses Universitaires du Septentrion (France), 2011, 310p.
4. (共著)「翻訳から見る昭和の哲学—京都学派のエクリチュール」(担当箇所)『アジア・ディア

スポラと植民地近代—歴史・文学・思想を架橋する』(緒形康編)、勉誠出版、2013年、(139 - 168) 323 頁。

【論文】

1. 「翻訳と解釈」『明星大学研究紀要』[日本文化学部・言語文化学科] 第 18 号、明星大学青梅校、2010 年、pp. 235-242.
2. 「西田幾多郎の身体論に基づく一つの考察—作り作られる身体としての顔—」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科] 第 19 号、明星大学日野校、2011 年、pp.113-127.
3. 「西田幾多郎の身体論から女性の顔についての考察へ」『西田哲学会年報』第 10 号、西田哲学会事務局発行、2013 年、118-134 頁
4. 「ランボーと西田—感覚の触れ合うところ」(巻頭エッセイ)『日本の哲学 第 15 号 特集フランス哲学と日本の哲学』、日本哲学史フォーラム編、昭和堂、2014 年、3-15 頁
5. 「田辺元の象徴と哲学—ヴァレリーの詩学を超えて」『日本の哲学 第 15 号 特集フランス哲学と日本の哲学』、日本哲学史フォーラム編、昭和堂、2014 年、81-96-頁

II. 自己評価

日本哲学を研究と教育の専門分野としているが、中心テーマとして翻訳の問題に焦点を当てた考察を積み重ねてきた。それが、日本語・英語・フランス語の三か国語で、少しずつではあるが、順調に発表され、形になってきたように思う。科研費基盤 C (2011 年度より 3 年、2014 年度は 1 年延期) および科研費基盤 B (2014 年度より 3 年) の支援を受け、日本哲学を翻訳学の観点から検討するというテーマについて、今、国内・海外の共同研究者らと共に考察を深め、多角的に取り組む態勢も整った。一冊の英仏語論文集を編集中であるが、2015 年初めに出版される予定である。その他、執筆やシンポジウム等の計画進んでいるため、より具体的な成果を来年早々から出してゆきたい。

水谷 雅彦 (倫理学専修教授)

I. 研究業績

【論文】

1. 「『多様性』ということ」、『世界思想』37 号、世界思想社、2010 年 4 月 5-8.
2. 「書評『集団—人類社会の進化』」、『アジア・アフリカ地域研究』第 10-1 号、京都大学アジア・アフリカ地域研究科、2010 年 71-74.
3. 「無知の哲学:応用哲学の出発点としての」、戸田山和久、出口康夫編、世界思想社『応用哲学を学ぶ人のために』、2011 年 5 月 110-122.
4. 'Ethics of Privacy', in: Chadwick, R., *Encyclopedia of Applied Ethics*, Second Edition, Vol.3, Elsevier, 2012.2., 609-615.
5. 「無知と寛容と信頼と」、戸田山和久、美濃正、出口康夫編『これが応用哲学だ』、大隅書店、2012 年 5 月 160-167.

II. 自己評価

2010 年度以降は、遂行中の研究の総括の段階に入っているために個々の論文発表などの数は少ないが、来年度中にも「コミュニケーションと倫理学」に関する単著の出版を予定している。それ以外は、台湾、シンガポール、スウェーデンなどにおける国際的研究集会や私が主催した第二回東アジア哲学会での報告と集中的な討論ができたことは収穫であった。来年度以降もこの国際共同研究は継続され、なんらかの形で論文集の発行が予定されている。

児玉 聡（倫理学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. *Biomedical Ethics in Asia: A Casebook for Multicultural Learners*, McGraw-Hill Education (Asia), 2010.06. 139 pages,
2. 『功利と直観－英米倫理思想史入門』、勁草書房、2010 年(四六判・340 ページ)
3. 『功利主義入門－はじめての倫理学』、ちくま新書、2012 年 (新書判・224 ページ)
4. 『マンガで学ぶ生命倫理』、化学同人、2013 年(A5 版・148 ページ)

【論文】

1. 「ハート・デブリ論争再考」、『社会と倫理』、24、2010 年、181-91 頁
2. 「喫煙の自由とその限界」、宇野重規・井上彰・山崎望編、『実践する政治哲学』、ナカニシヤ出版、2012 年、5-34 頁
3. 「臨床倫理において必要な倫理知識」(特集 ICU, CCU における臨床倫理入門)、『ICU と CCU』、36(9)、2012 年、pp.637-642
4. 「功利主義と公衆衛生」、『法哲学年報 2011』、有斐閣、2012 年、7-22 頁
5. “Tsunami-tendenko and morality in disasters”, *Journal of Medical Ethics*, (Online First, March 2013, doi:10.1136/medethics-2012-100813).
6. 「功利主義批判としての「善に対する正の優先」の検討」、『社会科学研究』、64(2)、2013 年、49-72 頁
7. 「生命倫理学(技術者倫理シリーズ)」、『技術士』、26(8): 2014 年、16-19 頁

II. 自己評価

ここ数年の間に、専門分野の英米の倫理学および生命倫理学において、専門書と入門書を上梓したことは高く評価できると考える。また、国際誌にも論文が掲載されたことも同様である。

2012 年 10 月に本職に着任後、教育業務と事務的作業に慣れるのに時間がかかり、研究については十分に進んでいないのが実状であるが、他方で本学の国際展開に伴い、台湾やシンガポール、スウェーデン等で報告をするなど、国際共同研究の下地ができつつあるのは今後の研究の発展につながるものと思われる。また、学内競争資金の獲得を通じて、学内でも生命倫理学研究者のネットワークを築きつつあり、これが今後の研究および教育の土台になると考えられる。

氣多 雅子 (宗教学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『仏教とは何か―宗教哲学からの問いかけ―』（共編著）、昭和堂、2010年、252頁
2. 『宗教学事典』（共編著）、丸善株式会社、2010年、659頁
3. 『哲学書概説シリーズ X 西田幾多郎『善の研究』』（単著）、晃洋書房、2011年、136頁

【論文】

1. 「「表明すること」と「秘匿すること」」、『「おのずから」と「みずから」のあい―公共する世界を日本思想にさぐる―』、東京大学出版会、2010年、pp.159-177.
2. 「仏教を思想として追究するということ―和辻哲郎の原始仏教研究を中心として―」、『思想としての仏教 実存思想論集 XXVI』、理想社、2011年、pp.57-78.
3. 「西田における一性への志向―『善の研究』の宗教哲学的意義」、『『善の研究』の百年―世界へ／世界から』、京都大学学術出版会、2011年、pp.347-368.
4. 「西谷啓治の国家論―『世界観と国家観』と「近代の超克」私論を中心―」、『理想』689号、2012年、pp.18-37.
5. 「自然災害と自然の社会化」、『宗教研究』373号、2012年、pp.85-107.
6. 「自覚と無―西田幾多郎の絶対無の自覚をめぐる―」、『Heidegger-Forum』vol.6、2012年、pp.38-51.
7. 「無のダイナミズム」、『西田哲学会年報』第10号、2013年、pp.69-84.
8. 「内が外となり 外が内となる」（第32回夏期哲学講座講演会）、『点から線へ』第63号、石川県 西田幾多郎記念哲学館、2014年、pp.2-37.
9. Nishidas 'Reine Erfahrung' und die Wahrheit, *Kitaro Nishida in der Philosophie des 20. Jahrhunderts*, Verlag Karl Alber Freiburg/München, 2014, pp.25-44.
6. 「宗教哲学は何を語りうるか―宗教と経済をめぐる―」、『世界の宗教といかに向き合うか』、聖公会出版、2014年、pp.284-300.

II. 自己評価

この期間の中心となる主題は、西田幾多郎の哲学思想の解明である。それに関連して、仏教思想の現代世界における可能性の追究と、西田を継承する京都学派の思想およびその周辺の哲学思想の考察が、課題となっている。これらの研究の蓄積が、一応順調になされていると考えている。今後は、西田哲学の全体像を明らかにする方向で、これらの研究をまとめてゆきたいと思う。また、Martin Heidegger の *Phänomenologie des religiösen Lebens*(Gesamtausgabe Bd.60)の翻訳が最後の段階に至っているので、これを完成させたいと考えている。

杉村 靖彦 (宗教学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. Johann Michel, David Scottson et Yasuhiko Sugimura(éd.), *Etudes Ricoeuriennes/Ricoeurian Studies*, Vol.3-2, University of Pittsburgh Press, 2012,178p. (共編者となった学術誌)
2. Michel Dalissier, Shin Nagai, Yasuhiko Sugimura(éd.), *Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps*, J.Vrin, 2013, 471p. (共編著)

【論文】

1. Yasuhiko Sugimura, «Témoin agissant du néant absolu— la signification de Tanabe dans le contexte de la philosophie du témoignage— », Jacynthe Tremblay(éd.), *Philosophes japonais contemporains*, Montréal, Presses de l'Université de Montréal, 2010, p.47-66.
2. Yasuhiko Sugimura, «L'auto-attestation du moi nabertien. Vers une herméneutique du témoignage », Stéphane Robilliard et Frédéric Worms (éd.), *Jean Nabert, l'affirmation éthique*, Cerf, 2010, p.131-146.
3. Yasuhiko Sugimura, «Paul Ricoeur et l'école de Kyoto. Philosophier autrement», *Etudes Théologiques et Religieuses*, Tome 86, 2011, p.355-359.
4. 杉村靖彦「死者と象徴—晩年の田辺哲学から」、『思想』1053号(特集:田辺元の思想—没後50年を超えて)、岩波書店、2012年、36-56頁。
5. Yasuhiko Sugimura, « Témoins de la Vie, entre le philosophique et le religieux. Relire Les Deux Sources du point de vue de l' « après-désastre » », *Annales bergsoniennes VI. Bergson, le Japon, la catastrophe*, PUF, 2013, p.195-210.

II. 自己評価

現代フランス哲学と京都学派の哲学を往還し、双方を交差させつつ宗教哲学のあり方を探究するという研究スタイルを確立させ、多方面にわたってより具体的・個別的なテーマに即しつつ展開することができた。また、それまで地道に取り組んできた国際的な研究協働体制の整備についても、この4年間で、フランス哲学研究と日本哲学研究の両面において一気に進展させることができ、活動の幅を広げることができた。今後は、目下取り組んでいる自らの著作の完成を急ぎたい。

芦名 定道 (キリスト教学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 共編著(星川啓慈との)『脳科学は宗教を解明できるか?』春秋社、2012年、296頁。(主に第1章「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」(19-62頁)を担当。)
2. 共著(井上順孝編)『21世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学との接点』平凡社、2014年、8月、215頁。(「神経科学と宗教研究ネットワークの行方」(161-202頁)を担当。)

【論文】

1. 「キリスト教学の可能性—伝統とポストモダンとの間で」、『日本の神学』49、2010年、252-256頁。
2. 「京都学派とキリスト教—現状と展望」『福音と世界』2010.10、2010年、30-35頁。
3. 「キリスト教と近代社会の諸問題」『キリスト教と近代社会』2011年、3-23頁。
4. 「日本の宗教哲学とその諸問題—波多野、有賀、北森」『アジア・キリスト教・多元性』9号、2011年、89-111頁。
5. 「日本的霊性とキリスト教—キリスト教土着化論との関連で」『北陸宗教文化』第24号、2011年、1-18頁。
6. 「現代思想と〈神〉の問い—ティリッヒからジジェクまで」『理想』No.688、2012年、40-52頁。
7. 「思想史研究の諸問題—近代日本のキリスト教思想研究から」『アジア・キリスト教・多元性』第10号、2012年、1-18頁。
8. 「宗教的実在と象徴—波多野とティリッヒ」『近代/ポスト近代とキリスト教』2012年、3-21頁。
9. 「波多野宗教哲学における死の問い」『キリスト学研究室紀要』創刊号、2013年、1-17頁。
10. 「日本キリスト教思想史と方法論的諸問題」『アジア・キリスト教・多元性』第11号、2013年、1-15頁。
11. 「キリスト教にとっての仏教の意味—近代日本・アジアの文脈から」『近代仏教』第20号、2013年、7-19頁。
12. 「科学技術の神学にむけて—現代キリスト教思想の文脈より」『宗教研究』第87巻、377-2、2013年、31-53頁。
13. 「現代キリスト教思想における自然神学の意義」『哲学研究』第596号、2013年、1-23頁。
14. 「アガペーとエロース—ニーグレン・波多野・ティリッヒ」『基督教学研究』第27号、2013年、23-41頁。
15. 「キリスト教史における無教会の意義」市川裕編『世界の宗教といかに向き合うのか』、2014年、聖公会出版、3-18頁。
16. 「脳神経科学からキリスト教思想へ」『キリスト教学研究室紀要』第2号、2014年、1-14頁。
17. 「東アジアのキリスト教とナショナリズム—内村鑑三の非戦論との関連で」『アジア・キリスト教・多元性』第12号、2014年、75-91頁。
18. 「東アジアのキリスト教研究とその課題」『日本の神学』53、2014年、172-177頁。

II. 自己評価

2010年から2014年にかけては、著書（共著）と論文を、合わせて20編執筆することなど、きわめて生産的な研究を進めることができた。特に、日本学術振興会の基盤研究（C）の研究費を獲得することにより、研究面では充実した時期であったと言える。これは、著書・論文の数だけでなく、その内容の水準の高さに表れている。例えば、著書の1と2、論文12、13、14は、脳科学と宗教あるいは科学技術とキリスト教といったテーマに関わる論考であるが、このテーマはまさに現代の宗教思想・キリスト教思想で集中的な議論が行われているものであり、これら

の論考は日本におけるこの議論をリードし方向付けるものである。また、波多野精一の著作の岩波文庫化の作業は、2011年の夏季に集中的に行われたものであるが、日本を代表する宗教哲学者である波多野精一の主要著作について、詳細な注記と解説を付すことができた。これは、これからの日本における宗教哲学研究に、大きく寄与するものである。

今後は、宗教と科学、近代キリスト教宗教哲学、近代日本キリスト教思想の主に三つのテーマについてさらに研究を進め、それぞれのテーマに関してこれまでの研究成果を研究論集として刊行することが、当面の目標となる。

中村 俊春 (美学美術史学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『絵画と私的世界の表象』（シリーズ『変容する親密圏／公共圏』第3巻）（編著），京都大学学術出版会，2012年，384 pp.
2. 展覧会図録『ルーベンス—栄光のアントワープ工房と原点のイタリア』（編著），毎日新聞社，2013年，272 pp.
3. *Essays for the Exhibition Catalogue, Rubens: Inspired by Italy and Established in Antwerp*, (ed.), The Mainichi Newspapers, Tokyo, 2013, 50 pp.
4. 『芸術家と工房の内と外—学習・共同制作・競争の諸相』（編著），平成21年度～平成24年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書，2013年，268 pp.
5. *Images of Familial Intimacy in Eastern and Western Art, The Intimate and the Public in Asian and Global Perspective*, vol. 4, (ed.), Brill, Leiden and Boston, 2014, 352 pp.

【論文】

1. 《ファン・ロイエン花鳥画》の作者再考 『京都美学美術史学』9, 2010年, 205–225頁.
2. 「ルーベンス工房のヴァン・ダイク」 『京都美学美術史学』10, 2011年, 39–83頁.
3. 「絵画学習における模写の役割と工房模写の評価・受容—ネーデルラントの事例を中心に」 『模倣の意味と機能をめぐる研究—写す・抜き出す・変容させる』平成18年度～20年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書（研究代表者根立研介），2011年, 17–35頁.
4. 家族、母子、家庭のイメージ読解のための序論 中村俊春（編）『絵画と史的世界の表象』，京都大学学術出版会，2012年，1–60頁.
5. 「旧ジョセフ・ロビンソン所蔵のヴァン・ダイク作《改悛のマグダラのマリア》」 『京都美学美術史学』11, 2012年, 191–216頁.
6. 「対抗宗教改革期の裸体表現批判とルーベンス—芸術的審判のあり方をめぐって」 『西洋美術研究』16, 2012年, 85–110頁.

7. 「ヴァン・ダイクのジレンマー工房助手としての仕事と独自性提示の試み」『芸術家と工房の内と外—学習・共同制作・競争の諸相』平成 21 年度～平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書 (研究代表者中村俊春), 2013 年, 95–117 頁.
8. 「ルーベンスの絵画制作—専門画家たちとの共同制作、および工房の助手ヴァン・ダイクをめぐって」、中村俊春編、展覧会図録『ルーベンス—栄光のアントワープ工房と原点のイタリア』, 毎日新聞社, 2013 年, 218–234 頁.
9. “Rubens’s Painting Practice: Some Considerations on His Collaboration with Specialists and His Relationship with Van Dyck as Workshop Assistant”, Toshiharu Nakamura (ed.), *Essays for the Exhibition Catalogue, Rubens: Inspired by Italy and Established in Antwerp*, The Mainichi Newspapers, Tokyo, 2013, pp. 5–20.
10. “An Introduction to Interpreting Images of Family, Mother and Child, and the Home”, Toshiharu Nakamura (ed.), *Images of Familial Intimacy in Eastern and Western Art*, Brill, Leiden and Boston, 2014, pp. 1–53.
11. “How to Construct Better Narrative Compositions: Rembrandt’s Probable Teaching Methods and Instruction”, Kayo Hirakawa (ed.), *Aspects of Narrative in Art History*, Graduate School of Letters, Kyoto University, Kyoto, 2014, pp. 73–84.

II. 自己評価

GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の研究プロジェクトとして、子供、夫婦、家庭が、さまざまな地域、時代の絵画でどのように表されてきたのかを探る国際共同研究を進め、その成果を、『絵画と私的世界の表象』（京都大学学術出版会）、および *Images of Familial Intimacy in Eastern and Western Art* (Brill) にまとめた。この研究を通じて、今日的な家族観を安易に過去の作品の解釈に適応することの問題点が明らかになった。今後、この視点を生かしつつ、17 世紀オランダ風俗画の新たな解釈に取り組みたい。また、長年にわたるルーベンスと工房をめぐる研究に関しては、その成果を展覧会というかたちで公表する機会を得た。そして、新たな研究の方向として、工房による制作が一般的となる一方で、巨匠の自筆作品を重視する傾向が強まってくるという、非常に興味深い状況が出現する点に着目して、「制作する手の痕跡」に対する価値観の変遷の考察に着手した。

根立 研介 (美学美術史学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『ほとけを造った人びと—止利仏師から運慶・快慶まで—』（単著）、吉川弘文館、2013 年、259 頁
2. 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』（水野敬三郎ほか 8 人との共編著）、第 9 巻、中央公論美術出版、2013 年、本篇解説冊全 264 頁・図版冊全 263 頁

3. 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』（水野敬三郎ほか8人との共編著）、第10巻、中央公論美術出版、2014年、本篇解説冊全206頁・図版冊全220頁

【論文】

1. 「靈驗仏と納入仏を通じた聖性の移植をめぐって」、『美術フォーラム21』、22号、2010年、44-50頁
2. 「承和期の乾漆併用木彫像とその後の展開」、『仁明朝史の研究—承和転換期とその周辺』（思文閣出版）、2011年、239～261頁
3. 「仏像を写すということ—変容する模倣概念」、『平成19～22年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 研究代表者 根立研介 研究成果報告書 模倣の意味と機能—写す・抜き出す・変容させる』、2011年、1～15頁
4. 「興福寺初期再興造仏事業と慶派仏師」、『京都美学美術史学』、10号、2011年、85-104頁
5. 「室町時代七条仏所の正系仏所の交代をめぐって」、『美術史歴参 百橋明穂先生退職記念 検定論文集』（中央公論美術出版）、2013年、1～18頁
6. 「院政期の仏師工房をめぐる小考」、『平成21～24年度科学研究費助成金 基盤研究(B) 研究代表者 中村俊春 研究成果報告書 芸術家と興亡の内と外—学習・共同制作・競争の諸相—』2013年、167～184頁
7. 「東大寺鎌倉再興造仏再考—南大門金剛力士像の造像と再興造営理念との関係を中心に—」、『京都美学美術史学』、12号、2013年

II. 自己評価

この5カ年間の業績の内容としては、日本の仏師にかかわるもの（「著書」1、「論文」4、5、6）が多くなっている。また今日の日本彫刻史研究でその重要性が再認識されている仏像の靈驗性に関わる研究（「論文」1、5）など行っている。なお、論文ではないが、日本彫刻史の基本資料に関するデータ公表を目指す『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』（「著書」2、3）の出版に編纂者の一人として携わっており、第二期8巻の刊行に着手することができた。前回の評価の際に提出した業績に比べると、量的には多少減少しているところがあるが、論文の掲載数は、専門の日本美術史の分野では、数が多い方と思われる。なお、「論文1」については、米国・ニューヨークのアジア・ソサエティーから注目され、これを発展させた論文を2016年春開催の鎌倉時代の彫刻展のカタログに掲載したいという申し入れがあった。今後は、仏師研究をさらに発展させるとともに、肖像研究などの研究も進展させたい。

吉岡 洋（美学美術史学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「メディア芸術とは何か？」（京都哲學會『哲學研究』Vol.589、2010年4月10日、p.1-p.24）
2. “Art is about the Future; Otherwise, Nothing.” in *Coded Cultures. New Creative Practices out of Diversity*, ed. by Georg Russegger, Springer Verlag/Wien, 2011, p.100-p.115.

3. 「メディアと親密性」(京都美学美術史学研究会『京都美学美術史学』Vol.11、2012年、p.105-p.131)
4. “After “Cool Japan”: A Study on Cultural Nationalism”, *Culture and Dialogue*, Vol.3 Issue No.2(2013), Cambridge Scholars Publishing, 2013, p.3-p.11
5. “Art after Fukushima: How can Aesthetics face Nuclear Crisis?” in *ENTER*, No.14+15 IV, Kosice/Slovakia, ed. by Richard Kitta & Michal Murin June.

II. 自己評価

現代美術とメディアアートに関わる活動が中心であり、著書や学術論文といったオーソドックスな研究業績の形式に落とし込むことが困難である。作品制作、アーティストとのコラボレーション、展覧会等の企画運営、ウェブ上の活動など、この報告のフォーマットに載らないような活動も加味するなら、非常に高い自己評価を与えることができる。とりわけ、2011年以降3年間にわたって関わってきた「文化庁メディア芸術コンベンション」の企画・運営は、日本のメディア芸術にとってきわめて重要な寄与であると自認する。今後もこうした活動形態を続けてゆくことが日本のメディア文化にとって重要であると考えている。

平川 佳世 (美学美術史学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. Kayo Hirakawa (ed.), *Aspects of Narrative in Art History: Proceedings of the International Workshop for Young Researchers, held at the Graduate School of Letters, Kyoto University, Kyoto 2-3 December 2013*, Graduate School of Letters, Kyoto University, Kyoto, 2014, 202 pp.

【論文】

1. 「マールテン・ファン・ヘームスケルク作《ヘレネーの略奪》にみる型の踏襲と刷新」平成19年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書(研究代表者根立研介), 2011年, 37-58頁.
2. 「家族の肖像—クエンティン・マセイスの《聖女アンナ祭壇画》にみる理想の家族像」蜷川順子編『初期ネーデルラント美術にみる個と宇宙』1, ありな書房, 2011年, 129-162頁.
3. 「幻の名画を求めて—16,17世紀におけるデューラー素描の絵画化」明治学院大学言語文化研究所『言語文化』28, 2011年, 45-71頁.
4. 「スプラングルのイタリア滞在—銅板油彩画の観点から」『京都美学美術史学』10, 2011年, 133-162頁.
5. 「聖なるもの、家族、政治—クラナハ作「聖親族祭壇画」をめぐって」中村俊春編『絵画にみる私的世界の表象』(「変容する親密圏/公共圏」第3巻), 京都大学学術出版会, 2012年, 61-88頁.

6. 「デューラー工房試論—1510年代初頭までを中心に」『芸術家と工房の内と外—学習・共同制作・競争の諸相』平成21年～平成24年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書(研究代表者中村俊春), 2013年, 1—30頁.
7. 「ハンス・フォン・アーヘンの「四大元素」連作—希少性を演出する絵画」『京都美学美術史学』12, 2013年, 27—62頁.
8. “Narrative and Material: Paintings on Rare Metal, Stone and Fabric in the Late Sixteenth and Early Seventeenth Centuries”, Kayo Hirakawa (ed.), *Aspects of Narrative in Art History, Graduate School of Letters, Kyoto University, Kyoto*, 2014, pp. 33—46.
9. “Faith, Family and Politics in Lucas Cranach the Elder’s Holy Kinship Altarpiece”, Toshiharu Nakamura (ed.), *Images of Familial Intimacy in Eastern and Western Art*, Brill, Leyden and Boston, 2014, pp. 54—82.

II. 自己評価

2010年度から2014年度は、まず、『京都大学 GCOE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」』内の国際共同研究「東西の美術における家庭、女性、子供の表象」のメンバーとして、15、16世紀の北方ヨーロッパで制作された「聖親族祭壇画」について、女性の再婚、師弟教育、家族関係の擬態による政治的連帯の表象等の観点から多角的に考察した。それに加え、16世紀後半から17世紀にかけてヨーロッパで流行した銅板油彩画、石板油彩画、絹本水彩画等の特殊素材絵画について、その発生と流行のメカニズム、当時の芸術観や芸術収集実践とのかかわり等を明らかにすべく、代表的事例のケース・スタディとデータ・ベースの蓄積を精力的に行った。今後は、独自の「北方マニエリスム論」として蓄積した論考を数年内にとりまとめ、刊行する予定である。

〔歴史文化学専攻〕

横田 冬彦 (日本史学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『異文化交流史の再検討』(編著)、2011年5月、平凡社
2. 『新発見・日本の歴史 江戸1 徳川家康の国家構想』(監修、編著)、2014年1月、朝日新聞社

【論文】

1. 「長崎丸山遊郭の『遊女屋宿泊人帳』覚書」、『京都橘大学女性歴史文化研究所紀要』20、2012年3月、pp. 65-91
2. 「近世の身分制」、『岩波講座日本歴史 10 近世1』、2014年1月、岩波書店、pp. 277-312
3. 「『遊客名簿』と統計」、『「慰安婦問題」を／から考える』、2014年12月、岩波書店、pp. 157-164

II. 自己評価

日本近世社会史に関して、身分制や女性史の分野での成果をいくつか発表した。『異文化交流史の再検討』に掲載した論文「混血児追放令と異人遊郭の成立—「鎖国」における<人種主義>再考—」も、社会史的な視点から「鎖国論」の通説を見直そうとしたものである。なお、いま最も関心を持っている日本近世書物文化史については、『シリーズ・本の文化史』全6巻（平凡社）の編集・刊行準備に追われ、十分な仕事ができなかった。これは2015年から刊行される。

吉川 真司（日本史学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『天皇の歴史02 聖武天皇と仏都平城京』講談社、2011年1月、382頁
2. 『シリーズ日本古代史3 飛鳥の都』、岩波書店、2011年4月、234頁
3. 『東大寺続要録』、国書刊行会、2013年5月、394頁（東大寺続要録研究会の一員として編纂・校訂を行なった）
4. 『新版 郷土枚方の歴史』（共著）、枚方市教育委員会、2014年3月、360頁（このうち pp.51-76 を執筆）

【論文】

1. 「雪国の地方官衙」、木簡学会編『木簡から古代がみえる』、岩波書店、2010年6月、pp.115-122
2. 「土塔と行基集団」、堺市編『堺の誇り 土塔と行基』、堺市、2010年9月、pp.27-63
3. 「九世紀の調庸制」、古代学協会編『仁明朝史の研究』、思文閣出版、2011年2月、pp.31-53
4. 「『源氏物語』の時代」、『「日本古代史的多視角性研究」国際学術研究会論文集』、北京大学・明治大学、2011年9月、pp.131-138
5. 「国分寺と東大寺」、須田勉・佐藤信編『国分寺の創建 思想・制度編』、吉川弘文館、2011年12月、pp.74-96
6. 「日本古代的端午節」、中国民俗学会他編『彰顯与重塑』、浙江古籍出版社、2012年5月、pp.8-13
7. 「日本の律令体制とユーラシア」、『「日本古代史研究的現在与未来」国際学術研究会論文集』、北京大学・清華大学、2012年10月、pp.122-129
8. 「百濟王氏について」、枚方市文化財研究調査会編『禁野本町遺跡IV』、枚方市文化財研究調査会、2013年3月、pp.214-222
9. 「小治田寺・大后寺の基礎的考察」、『国立歴史民俗博物館研究報告』179、2013年11月、pp.315-338
10. 「天平文化論」、大津透他編『岩波講座日本歴史3 古代3』、岩波書店、2014年9月、pp.213-250

II. 自己評価

日本古代史の総体的把握を長期的目標とし、その一環として、七世紀史および八～九世紀史の

政治史的叙述を刊行した。国際関係史・文化史については、天平文化および国風文化に関する論文を発表したが、二度の中国滞在時の遺跡踏査・資料収集を基礎として、さらに構想を広げつつある。寺院史・地域史・荘園史については、現地調査に立脚しながら、官大寺と行基寺院を中心として検討を進めた。史料研究では、『東大寺続要録』『為房卿記』の校訂を行ない（前者は刊行済、後者は校正中）、京都大学総合博物館などに所蔵される前近代朝廷文書の調査に携わった。総じて得られた成果は貧しく、とうてい満足できるものではないが、今後もこの方向で研究を継続・活性化させ、律令体制史論と行基寺院論に関する研究書を早期に刊行し、またいくつかの講座・論文集を編集する予定である。

上島 享（日本史学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『史料纂集 福智院家文書第三』（末柄豊・前川祐一郎・安田次郎との共編）、八木書店、2013年、全253頁。
2. 編著『週刊日本の歴史17 院政期を彩った人々』、朝日新聞出版、2013年、全38頁。

【論文】

1. 「仏教の日本化」、『新アジア仏教史11 日本I 日本仏教の礎』、佼成出版社、2010年、204-245頁。
2. 「日本中世社会の形成・展開と修正会・修二会」、『芸能史研究』192号、2011年、21-31頁。
3. 「勸進と聖」、『立教大学日本学研究所年報』10・11合併号、2013年、86-97頁。
4. 「鎌倉時代の仏教」、『岩波講座 日本歴史 第6巻中世1』、岩波書店、2013年、235-272頁。
5. 「金峯山信仰史再考」、『説話文学研究』49号、2014年、55-68頁。

II. 自己評価

4年間での研究業績は共編の史料集1冊、単著論文5本、その他 編著1冊であり、それらの質・量は日本史学の分野では標準的なものと判断する。これらのなかでは、「鎌倉時代の仏教」において、あらたな中世仏教理解を目指して、斬新な問題提起ができたことは重要な成果と考える。現在、著書の準備を進めており、その刊行を短期的な目標のひとつとして精進したい。

谷川 穰（日本史学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『岩倉具視関係史料』上・下巻、思文閣出版、2013年、1108p（共編）
2. 『吉田清成関係文書』第5巻、2013年、586p（共編）

【論文】

1. 「明治維新と仏教」、『新アジア仏教史 14 近代国家と仏教』、佼成出版社、2011 年、pp.14-55
2. 「大正・昭和初期の仏教と教育—木津無庵の師範学校巡回を中心に—」、『日本仏教総合研究』第 9 号、2011 年、pp.33-53
3. 「杉浦重剛宛書簡—肥前国高来郡南串山村庄屋馬場家文書より—」、『史林』第 94 巻第 4 号、2011 年、pp.89-115 (共著)
4. “No separation, No clashes: An Aspect of Buddhism and Education in the Meiji Period”, *The Eastern Buddhist*, vol.42 no.1, The Eastern Buddhist Society, Kyoto, 2011, pp.55-74
5. 「明治期「洛外」の朝廷由緒と「古都」—洛北岩倉の土器職人・榎木丸太夫の日記から—」、高木博志編『近代日本の歴史都市』、思文閣出版、2013 年、pp.143-168
6. 「内村鑑三—「天職」の地理学—」、趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『講座東アジアの知識人 2 近代国家の形成』、有志舎、2013 年、pp.120-137
7. 「教育・教化政策と宗教」、『岩波講座日本歴史 15 近現代 1』、岩波書店、2014 年、pp.269-306
8. “The Age of Teaching: Buddhism, the Proselytization of Citizens, the Cultivation of Monks, and the Education of Laypeople during the Formative Period of Modern Japan”, Hayashi Makoto, Ōtani Eiichi, and Paul L. Swanson (eds.), *Modern Buddhism in Japan*, Nanzan Institute for Religion and Culture, Nagoya, 2014, pp.85-111

II. 自己評価

近代日本形成期の教育と宗教の関係史を主題として、単著刊行後に二つの方向で対象を広げて研究を進めた。一つは、仏教の社会的位置を学校教育との関わりから追究する作業を、より広い時期設定（幕末期と 1930 年代）で行ったこと。もう一つは、政治家や国粋主義者、キリスト者、さらに地域の名望家にも焦点をあて、教育と宗教の重なり合う局面をより多角的に考察したこと。特に編集・翻刻に携わった岩倉具視に関する書簡集は、長らく共有される貴重な基礎史料集であり、学術的価値も高いと考えられる。今後はこれらの成果も踏まえ、近代日本における「教化」の史的構造を検討しつつ、基礎となる教育・宗教史関係の史料研究とその成果共有にも努めたい。いずれも、眼前の流行や「お題目」に踊らされることなく、長期的展望をもって取り組みたい。

杉山 正明（東洋史学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『遊牧民から見た世界史』（増補版）、2011 年 7 月 1 日、日本経済新聞出版社
2. 『ユーラシアの東西を眺める——歴史学と環境学の間』（編著）、2012 年 3 月、総合地球環境学研究所

II. 自己評価

2011年からの3年間は、本学文学研究科と国際学术交流協定をむすんでいる北京大学歴史学系での学術講演を中心に、中国の学術研究のレベル・アップのために、それなりに努めたつもり。可もなし不可もなしといった程度か。

吉本 道雅（東洋史学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『韓半島から眺めた女真・契丹』（共著。第一著者；愛新覚羅烏拉熙春）、京都大学学術出版会、2011年9月、280頁。
2. 『新出契丹史料の研究』（共著。第一著者；愛新覚羅烏拉熙春）、松香堂、2012年12月、256頁。
3. 『平成22年度～平成24年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書 内蒙古東部・遼寧西部における出土資料の調査に基づく鮮卑・契丹史の研究』、京都大学文学研究科、295頁、2013年3月。

【論文】

1. 「魏書序記考証」、『史林』93-3、2010年5月、58-86頁。
2. 「契丹八部考」、『契丹의 歴史と文化』、檀国大学校北方文化研究所、2010年10月、1-25頁。→再録；『北方文化研究』2-1、2011年10月、15-34頁。
3. 「遼史世表疏証」、『京都大学文学部研究紀要』50、2011年3月、31-92頁。
4. 「契丹紀年考」、『遼金史国際学術研討会』、吉林大学、2011年8月、1-9頁。
5. 「遼史地理志東京遼陽府条小考—10～14世紀遼東歴史地理的認識—」、『遼金歴史与考古国際学術研討会』、遼寧省博物館、2011年9月、1-9頁。→再録；『遼金歴史與考古 国際学術研討会論文集』上、遼寧教育出版社、2012年5月、222-230頁。
6. 「契丹國志疏証」、『京都大学文学部研究紀要』51、2012年3月、1-69頁。
7. 「清華簡繫年考」、『京都大学文学部研究紀要』52、2013年3月、1-94頁。
8. 「讀“滿族文學源流及其發展”札記—以《紅羅女》的成立年代為中心—」、『近世東亞與滿洲族文化』、高麗大学校民族文化研究院滿洲学中心、2013年5月、1-4頁。
9. 「國語成書考」、『京都大学文学部研究紀要』53、2014年3月、1-43頁。

II. 自己評価

平成22～24年度は、科研費研究題目「内蒙古東部・遼寧西部における出土資料の調査に基づく鮮卑・契丹史の研究」に基づき、東胡系諸民族に関する文獻・考古資料の基礎的研究に加え、内蒙古東部・遼寧西部の現地調査を進め、2011年8月・9月に中国の学会で講演したほか、とくに韓国の研究者との交流につとめ、2010年7月、韓国中央博物館で資料調査を行い、2010年10月・2013年5月に学会で講演した。これらにつき2013年3月に報告書を作成した。2011年12月、『浙江大学藏戰国楚簡』『清華大学藏戰国竹簡〔貳〕』が公刊されたことを踏まえ、平成25～27年度は、科研費研究題目「出土文獻に基づく左傳學の再構築」に基づき、出土文獻を活用

しつつ『左傳』を中心とする戦国時代の歴史記述につき研究を進めている。これに関連して2014年11-12月、「『繫年』および『史記』十二諸侯年表に見える周王朝の東遷」の課題で、韓国檀国大学の沈載勳教授を招聘し、共同研究を行った。中国語圏に偏することなく、韓国ないし英語圏との研究交流を進めつつある。

中砂 明德（東洋史学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『中国近世の福建人』、名古屋大学出版会、2012年、総592頁

【論文】

1. 「イエズス会の極東関係史料―「大発見の時代」とその後」、大澤顕浩編『東アジア書誌学への招待』第二巻、東方書店、2011年、195-229頁
2. 「マカオ・メキシコから見た華夷変態」、『京都大学文学部紀要』52号、2013年、95-194頁

II. 自己評価

これまでの研究をまとめて著書とした。第一部のうち書き下ろしの第二章「明末の閩人」は当時の福建人士大夫が置かれていた政治的環境を取り上げ、それが日本との関係にかなり規定されたものだったことを明らかにしたことに意味がある。『資治通鑑』関連のテキストを扱った第二部については、従来の史学史と一線を画して、歴史教科書の受容史を描いたものとしてきわめてユニークな価値を持つものと信じるが、その点が評価されていないのはアピールの方法に問題があったということだろう。

論文2編は現在進めている研究の一環から生まれたもので、イエズス会史料のアジア史研究への利用の可能性を探る解題編と実践編である。現在は16～17世紀のフィリピンと中国の関係を示すスペイン語史料群の可能性を再検討中で、将来的にはポルトガル語・オランダ語史料とあわせた「史料地図」を描き出してみたい。

高嶋 航（東洋史学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年3月、312頁。
2. 梁啓超『新民説』（訳注）、平凡社、2014年3月、528頁。

【論文】

1. 「1920年代の中国における女性の断髪：議論・ファッション・革命」石川禎浩編『中国社会主義文化の研究』京都大学人文科学研究所、2010年5月、27-60頁。
2. 「1920年代中国女性剪髪：輿論、时尚、革命」（鞠霞訳）『日本当代中国研究』2011年、135-159頁。

3. 「近代中国徴婚広告史（1902-1943）」森時彦主編、袁広泉訳『二十世紀的中国社会』社会科学文献出版社、2012年3月、56-105頁。
4. 「「東亜病夫」とスポーツ：コロニアル・マスキュリニティの視点から」石川禎浩、狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年1月、309-342頁。
5. 「菊と星と五輪：1920年代における日本陸海軍のスポーツ熱」『京都大学文学部研究紀要』第52号、2013年3月、195-286頁。
6. 「1920年代中国女性剪髪：輿論、时尚、革命」石川禎浩主編、袁広泉訳『二十世紀中国的社会与文化』北京：社会科学文献出版社、2013年3月、28-67頁。
7. 「上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史（1890-1925）」森時彦編『長江流域社会の歴史景観』京都大学人文科学研究所、2013年9月、303-346頁。
8. 「1920年代中国女性剪髪：輿論、时尚、革命」（鞠霞訳）日本人間文化研究機構編『当代日本中国研究』（第1輯 歴史・社会）北京：社会科学文献出版社、2013年9月、61-94頁。
9. 「戦時下の日本陸海軍とスポーツ」『京都大学文学部研究紀要』第53号、2014年3月、47-141頁。

II. 自己評価

最大の成果は著書『帝国日本とスポーツ』である。これにより新しい領域を開拓したと自負しており、体育学界のシンポジウムにも呼んでいただき、体育史の研究者からも評価をいただいた。数年来取り組んできた梁啓超著『新民説』の翻訳が完成し、平凡社から刊行されたのも大きな成果だと確信する。このほか、近年の重点課題である軍隊とスポーツに関して、研究を蓄積してきた。なかでも論文「1920年代の中国における女性の断髪：議論・ファッション・革命」は中国語版で3度も転載してもらい、学界でもそれなりの評価を得たと思う。

井谷 鋼造（西南アジア史学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「オスマーン朝のハーカーンたち」『西南アジア研究』74、2011年、1-27頁
2. 「アーディリーヤ妃絞殺—ルーム・セルジューク朝とアイユーブ朝交渉史上の一事件—」『歴史と地理』651、世界史の研究230、2012年、01-15頁

II. 自己評価

科研費・基盤研究(c)により、2012-14年度に現地調査を行ない、アラビア文字碑刻銘文資料の収集を続けてきた。これらの研究成果はまだ公開していないが、2014年度から順次、研究論文の形で発表していく予定である。西暦12～17世紀の西南アジア地域のアラビア文字による刻銘文資料については、トルコ共和国所在のものについては、ほぼ全体を把握できるところまで研究が進んでおり、イランについても現地調査を進めている。こうした現在の国境を跨いだ、現地調査に基づく刻銘文資料研究は他に類を見ない研究であると、評価できる。

久保 一之 (西南アジア史学専修准教授)

I. 研究業績

【論文】

1. 「ミール・アリーシールと「ウイグルのバフシ」」『西南アジア研究』第77号、2012年、39～73頁
2. 「ミール・アリーシールの家系について——ティムール朝における近臣・乳兄弟・譜代の隸臣・アミール——」『京都大学文学部研究紀要』第53号、2014年、141～233頁

II. 自己評価

ティムール朝末期の最重要人物の一人、ミール・アリーシール（筆名ナヴァーイー、1441～1501）の出身家系について、久しく未解決であった問題に一応の決着をつけることができた。その内容が論文(1)と(2)であり、いずれも考察の起点をモンゴル時代、特にチンギス=ハン期においたことで、打開策を見出せた。2014年7月5日の羽田記念館定例講演会において述べたが、ティムール朝末期の人物の出自を探求する上で、モンゴル時代に起源をもつ制度・慣習がカギを握ること自体が目玉に値する。この研究成果がポスト=モンゴル時代史研究という観点からも十分な存在感を持つと確信している。今後はティムール朝期の中央アジア・西アジアに見られる様々な変化を文化史的な観点から、さらに探求する予定である。

服部 良久 (西洋史学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 服部良久・蔵持重裕編、『紛争史の現在—日本とヨーロッパ—』、高志書院、2010年、272頁。
2. 服部良久・南川高志・小山哲・金澤周作編著『人文学への接近法—西洋史を学ぶ—』京都大学学術出版会、2010年、181頁。
3. 服部良久編著『中・近世ヨーロッパにおけるコミュニケーションと紛争・秩序』（科研費「基盤研究(A)」成果報告書）、2011年3月、247頁。
4. Yoshihisa Hattori(ed.), *Political Order and Forms of Communication in Medieval and Early Modern Europe*, viella, Rome 2014, 249 pages.

【論文】

1. 「フリードリヒ1世・バルバロッサの宮廷とコミュニケーション」『京都大学文学部研究紀要』50号、2011年、201-249頁。
2. 「ヨーロッパ中・近世史におけるアルプス地域—山岳地方における社会・国家・コミュニケーション—」『京都大学文学部研究紀要』51号、2012年、71-106頁。
3. 「中世ヨーロッパにおける政治的コミュニケーションと秩序—境界地域から—」『西洋史学』251号、2013年、31-43頁。

II. 自己評価

中世ヨーロッパの政治・社会の秩序を、「紛争とコミュニケーション」という視点から、人間の相互行為が生み出すプロセスとしての秩序に重点を置いて明らかにする研究を続けている。そのために個人研究のみならず、2009～2013年度の5年間にわたって国内外の20人を超える研究者を組織して科研費（基盤研究(A)）により共同研究を行い、数度に及ぶ国際シンポジウムや研究集会、講演会を日欧で開催し、成果を海外で論文集として刊行することができた。このテーマにかかわる個人研究では、中世盛期ドイツの政治的コミュニケーション研究と並行して、アルプス地方の村落間紛争と国家・社会に関する研究をも進めた。2014年3月にイタリアにて、このテーマに関するシンポジウムを共同開催した。以上のように、個人、共同研究の両レベルにおいて、海外の研究者と交流し、その成果を国際的に発信し、評価を受けることができたことに満足している。このテーマに関する個人研究と国際共同研究は、2014年度に新規の科研費を得られたので継続する予定である。

南川 高志（西洋史学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『人文学への接近法——西洋史を学ぶ——』（共編著）、2010年、京都大学学術出版会
2. (監訳) ピーター・サルウェイ編 南川高志監訳（南川高志・佐野光宜・西村昌洋・南雲泰輔訳）『ローマ帝国時代のブリテン島』（オックスフォード・ブリテン諸島の歴史 第1巻）、慶應義塾大学出版会、2011年、全336+53ページ
3. (共著) 『世界史B 世界史教授資料 研究編』（世界史教授資料研究編編集部編）、山川出版社、2013年、全486ページ
4. (単著) 『新・ローマ帝国衰亡史』岩波書店、2013年、全219ページ
5. (共著) 『新世界史』（岸本美緒氏、羽田正氏、久保文明氏他4氏と共著）、山川出版社、2014年、全448ページ
6. (共著) 『世界史B 新世界史教授資料 授業実践編』（岸本美緒氏、羽田正氏、久保文明氏他3氏と共著）、山川出版社、2014年、全452ページ

【論文】

1. 「『背教者』ユリアヌス帝登位の背景——紀元4世紀中葉のローマ帝国に関する一考察——」『西洋古代史研究』第10号、2010年、1-21ページ
2. 「ローマ史から見た呪詛板の位置づけ——ブリテン島出土の呪詛板を素材として——」『フェニキア・カルタゴから見た古代の東地中海』（泉拓良代表 科学研究費基盤研究(A)研究成果報告書）、2013年、229-236ページ
3. 「アウグスタ・ラウリカ——スイスのローマ都市の衰退について——」『西洋古代史研究』第14号、2014年、23-32ページ

II. 自己評価

2010年9月末で2年間にわたる京都大学本部の理事補の兼務を終え、文学研究科教授として

の活動に全面的に復帰して、ローマ帝国終焉期の研究に力を入れた。そして、その成果の一部として、2013年5月に岩波新書『新・ローマ帝国衰亡史』を刊行したが、幸い多くの読者を得、学術雑誌の書評だけでなく、『朝日新聞』夕刊や『日本経済新聞』でも特集として紹介されるなど、各所で取り上げられ、研究成果を学界の外にも発信できたことを喜んでいる。2013年度末でローマ帝国終焉期に関する科学研究費基盤研究(C)を終了したが、古代ギリシア・ローマ世界における「衰退」の問題をさらに範囲を広げて考察するため、2014年度からは、採択された基盤研究(B)の代表者として研究班を組織し、共同研究を主導している。4年の研究期間中に、国内だけでなく海外でも研究集会を開くなど、積極的に成果の発信に努めるつもりである。

小山 哲 (西洋史学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. (共編著) 『人文学への接近法——西洋史を学ぶ』 京都大学学術出版会、2010年、181頁
2. (共編著) 『大学で学ぶ西洋史 [近現代]』 ミネルヴァ書房、2011年、403頁
3. 『ワルシャワ連盟協約 (一五七三年)』 東洋書店、2013年、89頁

【論文】

1. 「「貴族の共和国」とウクライナ——植民地的共和主義をめぐる覚書」、『ヨーロッパ東部地域の共有遺産研究 I ガリツィア』 (東京外国語大学・EUインスティテュート・イン・ジャパン・国際文化研究所 (クラクフ、ポーランド))、2011年、87-96頁
2. ““A battle between the Duchy and the Kingdom”— Remarks on the Orzechowski vs. Rotundus controversy on the Polish-Lithuanian union in 1564-66”, in: Sekiguchi Tokimasa (ed.), *From Krakow to Vilnius. Report of the 2nd International Itinerant Seminar “The Common Heritage of Eastern Borderlands of Europe” (2010)*, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo 2013, pp. 55-68.
3. 「国境を越えて歴史認識を議論するために——「ポーランド・ドイツ 記憶の場」プロジェクトをめぐって」 (韓国語)、『日本空間』 (国民大学日本学研究所、ソウル)、14巻、2013年、59-73頁

II. 自己評価

2012年度より「西洋史学」の史学史的再検討をテーマとする共同研究を行っており、その研究活動の一環として、第63回日本西洋史学会大会(2013年5月、京都大学)のシンポジウム「東アジアの「西洋史学」——国境を越えた対話をめざして」を企画し、2014年12月には韓国の西洋史研究者を京都大学に招いてワークショップを開催した。2013年5月のシンポジウムの成果の一部は、『思想』第1091号(2015年3月)に掲載される予定である。韓国の西洋史研究者との交流は今後も続けていきたいと考えている。国際学会での成果報告としては、2012年9月にクラクフで開催された「第2回在外ポーランド史研究者会議」のパネル・ディスカッション「公共空間における歴史家」にパネラーとして参加した。他方で、本来の専門である近世のポーランド・リトアニア史の研究の成果は、著書1点、論文2点にとどまった。口頭発表としては、2014年9月にスウェーデンのルントで開催された国際ワークショップ「複合国家のダイナミズ

ム」に参加し、17世紀のリトアニア貴族の日記にみるポーランド・リトアニア合同観にかんする報告を行なった。現在、タデウシュ・コンチューシコにかんする一般読者向けの評伝を準備中であるが、今後は、ルント・ワークショップの成果も組み込みながら、16・17世紀の政治思想・政治文化史の研究をまとめる作業を進めたい。

金澤 周作（西洋史学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『人文学への接近法——西洋史を学ぶ』（共編著）、京都大学学術出版会、2010年6月、181頁
2. 『英国福祉ボランティアの起源——資本・コミュニティ・国家』（共編著）、ミネルヴァ書房、2012年5月、235頁
3. 『海のイギリス史——闘争と共生の世界史』（編著）、昭和堂、2013年7月、376頁

【論文】

1. 「19世紀」近藤和彦編『イギリス史研究入門』、山川出版社、2010年9月、128-153頁
2. 「チャリティはイギリス近代の個性か？——『チャリティとイギリス近代』評から考える」、『西洋史論叢』第32号、2010年12月、11-20頁
3. 「イギリス——「フィランソロピーの帝国」の歴史」、『大原社会問題研究所雑誌』626号、2010年12月、11-19頁
4. 「第一次世界大戦期のイギリスにおける「戦争チャリティ」——詐欺問題から見る銃後の協力」『歴史学研究』887号、2011年12月、10-22頁
5. 「海の社会史試論——1744年 カリブ海におけるある拿捕事例から」平成20～23年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書、研究代表者 田中きく代『18・19世紀北大西洋海域における文化空間の解体と再生——「境界域」の視点から』、2012年3月、13-28頁
6. 「英国コーンウォールにおける海難の近代史——ブレイ翁の『回想録』（1832年）を読む」田中きく代・中井義明・朝治啓三・高橋秀寿編『境界からみる西洋世界——文化的ボーダーランドとマージナリティ』、ミネルヴァ書房、2012年3月、37-61頁
7. 「現代チャリティ法制の一起源——慈善信託法（1853年）の長い制定過程にみるイギリスの自由と統治」岡村・高田・金澤編『英国福祉ボランティアの起源』、2012年5月、21-45頁
8. 「善意の動員——イギリスにおける戦争チャリティ」山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『現代の起点 第一次世界大戦 2 総力戦』、岩波書店、2014年5月、133-159頁

II. 自己評価

イギリス近代史に関するチャリティや海難の個別的なテーマでの実証研究は、これまでと変わらず少しずつ成果を出してきているが、ここ数年で特筆すべきは、旗振り役（の一人）をつとめてきた共同研究の成果をいくつか世に問うことができたことである。書籍の形に仕上げるまでの経験から、あるべき共同研究、学術出版とは何かについて貴重な知見を得た。今後活かしていきたい。個人の研究としては、科研費を得て「国際人道支援」の歴史的起源をイギリスの事例

から追究している。こうした側面からのアプローチは先行例が多くないので、学界にも貢献できると考えている。なお、この研究の一部は論文にまとめており、近く刊行される予定である。

上原 真人 (考古学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『古代寺院の資産と経営—寺院資財帳の考古学—』すいれん舎、2014年11月刊、総頁299頁

【論文】

1. 「撰関・院政期の京都における丹波系軒瓦の動向」『佛教藝術』308号、毎日新聞社、2010年1月刊、79～115頁
2. 「明石にもいた清盛鼻貞——出土瓦からのアプローチ——」『坪井清足先生卒寿記念献呈論文集』同書刊行会、2010年11月刊、1164～1178頁
3. 「神雄寺の彩釉山水陶器と灌仏会」『京都府埋蔵文化財論集』6、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、2010年12月刊、255～268頁
4. 「古代の文字瓦」『堺の宝 土塔の文字瓦』第二回史跡土塔講演会記録集、堺市・堺市教育委員会、2011年11月刊、18～42頁
5. 「国分寺と山林寺院」『国分寺の創建(思想・制度編)』(須田勉・佐藤信編)吉川弘文館、2011年12月刊、118～143頁
6. 「青谷上寺地遺跡出土の木製農工具の特色」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』8、木製農工具・漁具、鳥取県埋蔵文化財センター、2012年3月刊、186～202頁
7. 「1 白銅三鈷杵(国指定重要文化財)」『史跡 慧日寺跡—中心伽藍第I期復元整備事業報告書—』磐梯町教育委員会、2012年3月刊、27～33頁
8. 「掘り出された木の文化—古代エジプトと日本列島の木鋏における<他人の空似>—」『環境と健康』第25巻第2号(特集・日本人と木の文化)、(公財)体質研究会、2012年7月刊、205～214頁
9. 「山寺考古学の現在」『山岳寺院の諸相』磐梯山慧日寺資料館企画展資料集、2012年11月刊、1～11頁
10. 「<撓柄たわめえ斧>の提唱」『技術と交流の考古学』(岡内三眞編)同成社、2013年1月刊、278～285頁
11. 「近世における<六勝寺跡>の認識——<古瓦譜>の世界——」『京都岡崎の文化的景観調査報告書』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、2013年3月刊、62～70頁
12. 『事典 墓の考古学』土生田純之編、吉川弘文館、2013年6月刊 ([古代の墓]「墓誌の特色」「蔵骨器と舍利容器」「寺院と墓地」の各項目) 176～182頁、201～205頁、214～215頁
13. 「明石の古代2」『明石の古代II』発掘された明石の歴史展実行委員会編、明石市発行、2014年11月刊、1～10頁
14. 「古代の終焉と播磨の瓦生産」『明石の古代II』発掘された明石の歴史展実行委員会編、明石市発行、2014年11月刊、53～108頁

II. 自己評価

専門とする瓦研究、木器研究、古代寺院研究の各分野で、要望にも対応し、自分なりの新たな成果を生み出した。とくに『古代寺院の資産と経営』は古代寺院研究の新しい分野を開拓した著書で、発売1ヶ月も経たずに好評のようだ。

吉井 秀夫 (考古学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『日帝強占期新羅古墳発掘調査関連資料集』、国立慶州文化財研究所・慶州市、2011年、270頁
2. 『写真資料の分析を通してみた植民地朝鮮における考古学的調査の再検討』（平成22年度～平成25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）、2014年、106頁

【論文】

1. 「百済墓制研究の新潮流」、『季刊考古学』、第113号、2010年、pp.66-69
2. 「原三国時代・三国時代墳墓に用いられた「棺」の地域性とその変遷」（韓国語）、『慶北大学校考古人類学科30周年記念考古学論叢』、2011年、pp.559-570
3. 「京都大学考古学研究室所蔵金冠塚関連資料とその性格」（韓国語）、『新羅古墳精密測量及び分布調査研究報告書』、2011年、pp.110-125
4. 「朝鮮半島との交渉」、『講座日本の考古学』7（古墳時代（上））、2011年、pp.615-637
5. 「百済の冠と日本の冠」（韓国語）、『百済の冠』（国立公州博物館研究叢書第24冊）、2011年、pp.70-77
6. 「日本列島の中の百済文化」（韓国語）、『アジアの古代文化交流』（中央文化財研究院学術叢書4）、2012年、pp.43-60
7. 「朝鮮半島諸国と古墳文化」、『内外の交流と時代の潮流』（古墳時代の考古学7）、2012年、pp.73-84
8. 「百済陵墓の構造・性格と日本陵墓の比較」、『百済の陵墓と周辺国陵墓の比較研究』、2013年、pp.163-191
9. 「朝鮮古蹟調査事業と「日本」考古学」、『考古学研究』第60巻第3号、2013年、pp.17-27
10. 「瓦を通してみた古代韓国と日本の海上交通」（韓国語）、『海洋文化研究』第10輯、2014年、pp.51-83
11. “Structure and characteristics of Baekje tombs in comparison with tombs of Japan”, *Tombs: Baekje Historic Areas Studies Series*, vol. 3. 2014. pp. 208-227

II. 自己評価

2010年から2014年にかけては、①朝鮮三国時代の墳墓研究、②朝鮮植民地時代における考古学的調査研究史、③古代日朝関係の考古学的研究、の3つのテーマについて研究を進め、その成果を発表した。テーマ①については、朝鮮半島各地における墓制（論文1・2・8・11）や出土遺物（冠など）（論文5）の比較研究をひき続き進めた。テーマ②については、科学研究費補助

金を得て朝鮮古蹟調査事業に関わる写真資料の分析を進めた(著書2)。また、考古学研究室に残る慶州・金冠塚の報告書作成に関する資料を整理して公開し(著書1)、その歴史的意義について考察した(論文3)。さらに、この間の研究成果を総括した(論文9)。テーマ③については、墳墓(論文4)・土器(論文6)・瓦(論文10)を手がかりとして、古代日朝関係の特質と変化を議論した。今後は、これまでの研究を総括することができるように努力したい。

〔行動文化学専攻〕

櫻井 芳雄 (心理学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『脳と機械をつないでみたらー BMI から見えてきた』岩波書店、2013、224 頁。

【論文】

1. 「ニューラルネットワーク最新情報(3): 脳科学からの概説ー神経回路の実態と特性」『知能と情報』22、2010、36-42.
2. 「究極のブレインーマシン・インタフェースと脳の可塑的变化」Brain and Nerve、62、2010、1059-1065.
3. 「ブレインーマシン・インタフェースからみた脳神経系の可塑性」『神経心理学』26、2010、34-40.
4. 「脳の情報表現を担うセル・アセンブリ: 局所的セル・アセンブリの検出」『生物物理』2010、50、084-087.
5. Multisensory information facilitates reaction speed by enlarging activity difference between superior colliculus hemispheres in rats. PLoS ONE、6(9)、2011、1-13.
6. 「神経活動から心を読む: ブレインーマシン・インタフェース」BRAIN MEDICAL、23、2011、7-13.
7. 「ブレインーマシン・インタフェースの神経科学」『分子精神医学』12、2012、23-29.
8. 「Arduino マイコンを用いたリアルタイムの行動実験制御とデータロギング」『生理心理学と精神生理学』31、2013、203-212.
9. Oscillatory interaction between amygdala and hippocampus coordinates behavioral modulation based on reward expectation. Frontiers in Behavioral Neuroscience、7(177)、2013、1-12.
10. Diverse synchrony of firing reflects diverse cell-assembly coding in the prefrontal cortex. Journal of Physiology - Paris. 107、2013、459-470.
11. 「順序情報を表現する海馬セル・アセンブリダイナミクス」『心理学評論』56、2013、320-337.
12. 「海馬の可塑性と領野間相互作用」『心理学評論』56、2013、338-354.
13. Conditioned enhancement of firing rates and synchrony of hippocampal neurons and firing rates of motor cortical neurons in rats. European Journal of Neuroscience、37、2013、623-639.
14. Spike coding mechanisms of cerebellar temporal processing in classical conditioning and voluntary movements. The Cerebellum、13、2014、651-658.
15. Brain-machine interfaces can accelerate clarification of the principal mysteries and real plasticity of the brain. Frontiers in Systems Neuroscience、8(104)、2014、1-6.
16. Recall of sequences based on the position of the first cue stimulus in rats. Cognitive Neurodynamics、8、2014、345-351.
17. Volitional enhancement of firing synchrony and oscillation by neuronal operant conditioning: interaction with neurorehabilitation and brain-machine interface. Frontiers in Systems Neuroscience、

- 8(11)、2014、1-11.
18. Novel behavioral tasks to explore cerebellar temporal processing in milliseconds in rats. *Behavioural Brain Research*, 263, 2014, 138-143.
 19. 「意思決定と行動選択の心理学」 *Clinical Neuroscience (臨床神経科学)*、32、2014、16-19.
 20. Effects of emotional context during encoding: An advantage for negative context in immediate recognition and positive context in delayed recognition. *Psychology*, 2014、In press.

II. 自己評価

前回に続き、全体に満足できる業績だと思う。これまでの研究と今後の展望をまとめた著書（単著）も出すことができた。ただ、著書はオリジナルな研究成果を発表する場ではないので、論文が何よりも重要であるが、最も重視している国際誌の論文については、合計 10 本載せることができた。それらジャーナルのほとんどが該当分野で平均以上の Impact Factor を持っており、国際的に評価の高いものばかりである。また、大学院生が第一著者となった論文も多く、人材の育成でも一定の成果が見えてきたように思う。今後は、さらに Impact Factor の高いジャーナルに論文を掲載することをめざしながら、世界に通用する若い研究者を育てていきたいと考えている。

藤田 和生 (心理学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『比較行動学－ヒト観の再構築』放送大学教育振興会, 2011, 255pp.
2. 『心理学概論』ナカニシヤ出版, 2011, 377pp. (分担執筆)
3. *How animals see the world: Comparative behavior, biology, and evolution of vision.* Oxford University Press, 2012, 548pp. (分担執筆)
4. *The Oxford Handbook of Comparative Cognition.* Oxford University Press, 2012, 914pp. (分担執筆)
5. *Foundations of metacognition.* Oxford University Press, 2012, 353pp. (分担執筆)
6. 『新版 心理学事典』平凡社, 2013, 870pp. (項目執筆)
7. 『心の多様性－脳は世界をいかに捉えているか－』大学出版部協会, 2014, 79pp. (分担執筆)
8. *The Oxford compendium of visual illusions.* Oxford University Press, 2015, in press. (分担執筆)
9. 『動物たちは何を考えている？－動物心理学の挑戦－』技術評論社 知りたいサイエンスシリーズ、印刷中 (責任編集・著)

【論文】

1. Tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*) show understanding of human attentional states when requesting food held by a human. *Animal Cognition*, 13(1), 2010, 87-92. (共著)
2. 「動物はこころが読めるか」『環境と健康』23(4), 2010, 439-448.
3. Capuchin monkeys (*Cebus apella*) are sensitive to others' reward: An experimental analysis of food-choice for conspecifics. *Animal Cognition*, 13(2), 2010, 249-261. (共著)
4. Delay of gratification in capuchin monkeys (*Cebus apella*) and squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*). *Journal of Comparative Psychology*, 124(2), 2010, 205-210. (共著)
5. Flexibility in the use of requesting gestures in squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*). *American Journal*

- of Primatology*, 72, 2010, 707-714. (共著)
6. Do bantams (*Gallus gallus domesticus*) experience amodal completion? An analysis of visual search performance. *Journal of Comparative Psychology*, 124(3), 2010, 331-335. (共著)
 7. Route selection by pigeons (*Columba livia*) in “traveling salesperson” navigation tasks presented on an LCD screen. *Journal of Comparative Psychology*, 124(4), 2010, 433-446. (共著)
 8. 「比較メタ認知研究の動向」『心理学評論』53(3), 2010, 270-294.
 9. Learning and generalization of tool use by tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*) in tasks involving three factors: reward, tool, and hindrance. *Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes*, 37(1), 2011, 10-19.
 10. Editorial for the special issue. (Special issue “Constituents of happiness”) *Psychologia*, 54, 2011, 175-177.
 11. Reverse-reward learning in squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*): Retesting after 5 years, and assessment on qualitative transfer. *Journal of Comparative Psychology*, 125(1), 2011, 84-90. (共著)
 12. How do keas (*Nestor notabilis*) solve artificial-fruit problems with multiple locks? *Animal Cognition*, 14(1), 2011, 45-58. (共著)
 13. Do birds (pigeons and bantams) know how confident they are of their perceptual decisions? *Animal Cognition*, 14(1), 2011, 83-93. (共著)
 14. Pigeons perceive a reversed Zöllner illusion. *Cognition*, 119(1), 2011, 137-141. (共著)
 15. Capuchin monkeys (*Cebus apella*) modify their own behaviors according to a conspecific’s emotional expressions. *Primates*, 52, 2011, 279-286. (共著)
 16. I acknowledge your help: capuchin monkeys’ sensitivity to others’ labor. *Animal Cognition*, 14, 2011, 715-725. (共著)
 17. 「ヒト以外の動物におけるプランニング能力—霊長類と鳥類を中心に—」『動物心理学研究』61(1), 2011, 69-82. (共著)
 18. Do bantams (*Gallus gallus domesticus*) amodally complete partly occluded lines? An analysis of line classification performance. *Journal of Comparative Psychology*, 125(4), 2011, 411-419. (共著)
 19. Flexible route selection by pigeons (*Columba livia*) on a computerized multi-goal navigation task with and without an “obstacle.” *Journal of Comparative Psychology*, 125(4), 2011, 431-435. (共著)
 20. Arithmetic-like reasoning in wild vervet monkeys: a demonstration of cost-benefit calculation in foraging. *International Journal of Zoology*, Vol. 2011, Article ID 806589. 11pp. (共著)
 21. Chimpanzees (*Pan troglodytes*) show more understanding of human attentional states when they request food in the experimenter’s hand than on the table. *Interaction Studies*, 12(3), 2011, 418-429. (共著)
 22. 「ウマにおける認知研究の現状と展望」『動物心理学研究』61(2), 2011, 141-153. (共著)
 23. Capuchin monkeys (*Cebus apella*) use conspecifics’ emotional expressions to evaluate emotional valence of objects. *Animal Cognition*, 15, 2011, 341-347. (共著)
 24. Infant monkeys’ concept of animacy: the role of eyes and fluffiness. *Primates*, 53, 2012, 113-119. (共著)
 25. Acquisition of a same-different discrimination task by pigeons (*Columba livia*). *Psychological Reports*, 110(2), 2012, 251-262. (共著)
 26. Food-related tolerance in capuchin monkeys (*Cebus apella*) varies with knowledge of the partner’s

- previous food-consumption. *Behaviour*, 149, 2012, 171–185. (共著)
27. Incidental memory in dogs (*Canis familiaris*): adaptive behavioral solution at an unexpected memory test. *Animal Cognition*, 15, 2012, 1055–1063.
 28. Further tests of pigeons' (*Columba livia*) planning behavior using a computerized plus-shaped maze task. *Perceptual and Motor Skills*, 115 (1), 2012, 27-42. (共著)
 29. 「幸福感の国際比較研究－13 カ国のデータ－」『心理学評論』55(1), 2012, 70-89. (共著)
 30. Bantams (*Gallus gallus domesticus*) also perceive a reversed Zöllner illusion. *Animal Cognition*, 16, 2013, 109-115. (共著)
 31. Do pigeons (*Columba livia*) seek information when they have insufficient knowledge? *Animal Cognition*, 16(2), 2013, 211-221. (共著)
 32. 「動物たちのこころ」(エッセイ 情報伝達・解体新書 彼らの流儀はどうなっている?). *Nextcom*, Vol.13, Spring, 2013, 34-35.
 33. Dopamine receptor D4 gene (DRD4) is associated with gazing toward humans in domestic dogs (*Canis familiaris*). *Open Journal of Animal Science*, 3, 2013, 54-58. (共著)
 34. Capuchin monkeys judge third-party reciprocity. *Cognition*, 127, 2013, 140–146. (共著)
 35. Third-party social evaluation of humans by monkeys. *Nature Communications*, 4, 2013, 1561. (共著)
 36. Breed differences in dopamine receptor D4 gene (DRD4) in horses. *Journal of Equine Science*, 24(3), 2013, 31-36. (共著)
 37. 「ウマにおけるオキシトシン受容体遺伝子の多型解析」『DNA 多型』(東洋書店), Vol.21, 2013, 35-38. (共著)
 38. 「イヌ (*Canis familiaris*) におけるヒトの性別の感覚統合的概念」『動物心理学研究』63(2), 2013, 123-130. (共著)
 39. 「感情の進化－新世界ザルの感情機能－」『最新精神医学』19(4), 2014, 295-302.
 40. A reversed Ebbinghaus-Titchener illusion in bantams (*Gallus gallus domesticus*). *Animal Cognition*, 17, 2014, 471-481. (共著)
 41. The evolution of self-control. *Proceedings from the National Academy of Sciences, U.S.A.*, 111(20), 2014, E2140-E2148. (共著)
 42. Differential motion processing between species facing Ternus-Pikler display: non-retinotopic humans versus retinotopic pigeons. *Vision Research*, 103, 2014, 32-40. (共著)
 43. Do dogs follow behavioral cues from an unreliable human? *Animal Cognition*, 2014, in press. (共著)

II. 自己評価

鳥類、齧歯類、霊長類ならびに伴侶動物の知性と感情を多角的に分析し、基礎的視知覚から向社会的行動に至るまでの多様な成果を、査読付き国際誌に着実に公表してきた。成果は2008年度に採択された基盤研究(S)に引き続き、2013年度からは新たに基盤研究(A)のプロジェクトとして、意識や内省過程の進化と発達の解明に取り組んでいる。また2013年度より新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」の計画研究(分担)、2014年度より同「心の時間学」の公募研究にも携わっている。この間、大学院生の指導にも力を注ぎ、2010年度～2013年度に、6名の課程博士を輩出した。今後もわが国の比較認知研究をリードする研究教育活動を継続していきたい。

板倉 昭二 (心理学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『ロボットを通して子どもの心を探る—ディベロップメンタル・サイバネティクスの挑戦』、ミネルヴァ書房、2013年、196頁
2. 『発達科学の最前線』、ミネルヴァ書房、2014年、217頁

【論文】

1. Fluent language with impaired pragmatics in children with Williams syndrome. *Journal of Neurolinguistics*, 23, 2010, 540-552.
2. Language and cognitive shifting: evidence from young monolingual and bilingual children. *Psychological Reports*, 107, 2010, 68-78.
3. Culture shapes efficiency of facial age judgments. *PLoS ONE*, 5(7), 2010, e11679.
4. Young children's folk knowledge of robots. *Asian Culture and History*, 2, 2010, 111-116.
5. 「子どものためのロボティクス—教育・療育支援における新しい方向性の提案」『日本ロボット学会誌』28, 2010, 87-95.
6. Cues that trigger social transmission of disinhibition in young children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 107, 2010, 181-187.
7. 「眼球運動からみたヒトおよびロボットの身体運動認知の発達」『ロボット学会誌』28(4), 2010, 95-101.
8. The link between perception and action in early infancy: From the viewpoint of the direct matching hypothesis. *Japanese Psychological Research*, 52, 2010, 121-131.
9. Do bilingual children exhibit a yes bias to yes-no questions?: Relationship between children's yes bias and verbal ability. *International Journal of Bilingualism*, 16, 2010, 1-9. Japanese children's difficulty with false belief understanding: Is it real or apparent? *Psychologia*, 53, 2010, 36-43.
10. When do children exhibit a yes bias? *Child Development*, 81, 2010, 568-580.
11. Atypical verbal communication pattern according to others' attention in children with Williams syndrome. *Research in Developmental Disabilities*, 31, 2010, 452-457.
12. Bilingualism accentuates children's conversational understanding. *PLoS ONE*, 5(2), 2010, e9004.
13. Children perseverate to a human's actions but not to robot actions. *Developmental Science*, 13, 2010, 62-68.
14. 「基礎研究から発達支援へ：その理論的考察」別冊『発達』ミネルヴァ書房, 31, 2010, 2-9.
15. 「社会性の発達」『赤ちゃん学カフェ』3, 2010, 28-32.
16. 「自己の進化と発達 比較認知発達科学から見た自己」『心理学ワールド』50, 2010, 17-20.
17. Implications of Social Competence among Thirty-Month-Old Toddlers: A Theory of Mind Perspective. *Journal of Epidemiology*, 20, 2010, 447-451.
18. An own-age bias in young adults' facial age judgments. *Psychologia*, 54(3), 2011, 166-174.
19. Do young and old preschoolers exhibit response bias due to different mechanisms? Investigating children's response time. *Journal of Experimental Child Psychology*, 110, 2011, 453-460.
20. Moral contagion attitudes towards potential organ transplants in British and Japanese adults. *Journal of*

- Cognition and Culture*, 11, 2011, 269-286.
21. Learning to count begins in infancy: Evidence from 18-month-olds visual preferences. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, 278, 2011, 2979-2984.
 22. Executive function in young children and chimpanzees (*Pan troglodytes*): Evidence from a non-verbal Dimensional Change Card Sort task. *Journal of Genetic Psychology*, 172, 2011, 252-265.
 23. Transcultural differences in brain activation patterns during theory of mind (ToM) task performance in Japanese and Caucasian participants. *Social Neuroscience*, 6, 2011, 615-626.
 24. Developmental correspondence between action prediction and motor ability in early infancy. *Nature Communications*. 2:341 doi: 10.1038/ncomms1342, 2011.
 25. Can young children learn words from a robot? *Interaction Studies*, 12, 2011, 107-119.
 26. Effect of facial expression of mother on 15—21-month-old-infants using salivary biomarker. *Sensors and Materials*, 23, 2011, 87-94.
 27. Japanese and American children's reasoning about accepting credit for prosocial behavior. *Social Development*, 20, 2011, 171-184.
 28. Emotional responses associated with self-face processing in individuals with autism spectrum disorders: An fMRI study. *Social Neuroscience, iFirst*, 2011, 1-17.
 29. 「表情と無意味音声のクロスモーダル情動認知：モダリティ情報の強度と信頼性の効果の検討」 『認知科学』 18, 2011, 428-440.
 30. 「赤ちゃんから見た世界 - 発達科学の挑戦」 『哲学研究』 591, 2011, 1-21.
 31. 「トマセロにおける自己概念の起源論」 梶田叡一・溝上慎一（編） 『自己の心理学を学ぶ人のために』（世界思想社）, 2011
 32. 「赤ちゃんと社会性」 『保育ナビ』 12月号, 2011, 45-47.
 33. 「乳児期における社会的認知」 『児童心理学の進歩』（金子書房）, 2011, pp.57-76.
 34. 「社会的認知の連続性—初期の社会的刺激に対する反応バイアスから心の理論へ」 『チャイルドサイエンス』 17, 2011, 10-14.
 35. 「発達 Overview」 子安増生他編 『心理学概論』 ナカニシヤ出版, 2011
 36. 「幼児期」 子安増生他編 『心理学概論』 ナカニシヤ出版, 2011
 37. 「関連領域」 子安増生他編 『心理学概論』 ナカニシヤ出版, 2011
 38. 「赤ちゃんの知性」 藤田和生（編） 『比較行動学 - ヒト観の再構築 - 』 放送大学教育振興会, 2011
 39. 「討論 ヒトとは何か」 藤田和生（編） 『比較行動学 - ヒト観の再構築 - 』 放送大学教育振興会, 2011
 40. 「チンパンジーのころ、人間のころ」 日本心理学会編 『心理学ワールド』（新曜社）, 2011, pp27-30.
 41. 「注意と発達」 三浦・原田（編） 『現代の認知心理学 第4巻』 北大路書房, 2011
 42. Differences in Response Bias Among Younger and Older Preschoolers: Investigating Japanese and Hungarian Preschoolers. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 43, 2012, 1325-1338. DOI: 10.1177/0022022112440145
 43. Observed human action, and not mechanical actions, induce searching errors in infants. *Child Development Research*, Article ID 465458, 2012, 5pages, doi:10.1155/2012/465458.

44. How does executive function contribute to source monitoring in young children. *Psychologia*, 55, 2012, 194-207.
45. Infant and adult perceptions of possible and impossible body movements: An eye-tracking study. *Journal of Experimental Child Psychology*, 113, 2012, 401-414. doi.org/10.1016/j.jecp.2012.07.003
46. Social phenotypes of autism spectrum disorders and Williams syndrome: similarities and differences. *Frontiers in PSYCHOLOGY*, 2012, doi: 10.3389/fpsyg.2012.00247. doi: 10.3389/fpsyg.2012.00247
47. Children's responses to yes-no questions. In M. Siegal & L. Surian (Eds.), *Access to language and cognitive development*. Oxford, 2012, pp.83-99.
48. The development of mentalizing in human children. In S. Watanabe (Ed.), *Emotions of animals and humans*. Springer, 2012, pp.207-222.
49. Cultural differences in the development of cognitive shifting: East-West comparison. *Journal of Experimental Child Psychology*, 111, 2012, 156-163. doi:10.1016/j.jecp.2011.09.001
50. Similarities and differences in Chinese and Caucasian adults' use of facial cues for trustworthiness judgments. *PLoS One*, 7(4): e34859 2012.
51. 「文化の継承メカニズム」中尾央・三中信宏（編著）『文化系統学への招待』勁草書房, 2012, (pp119-144)
52. 「赤ちゃんの感情と社会性」小西行郎・遠藤利彦（編）『赤ちゃん学を学ぶ人のために』（世界思想社）, 2012.
53. 「対人認知と社会性：発達初期の社会的シグナルに対する感受性」根ヶ山光一・仲真紀子（編）『発達科学ハンドブック』（新曜社）, 2012.
54. 「オノマトペの示す見た目と触り心地—日本人4歳児におけるオノマトペのクロスモーダルな理解」『電子情報通信学会技術研究報告』112, 2012, 89-94.
55. 「子どもとロボット—ディベロプメンタル・サイバネティクス」板倉昭二・北崎充晃編『ロボットを通して探る子どもの心—ディベロプメンタル・サイバネティクスの挑戦』ミネルヴァ書房, 2013, (pp1-12)
56. 「Developmental Cybernetics—乳幼児におけるエージェントの理解」『日本ロボット学会誌』31, 2013, 8-11.
57. Influence of maternal social communication on ticklishness in infants: a comparison with being stroked. *Infancy*, 18, 2013, E69-E80.
58. Rudimentary Sympathy in Preverbal Infants: Preference for Others in Distress. *PLoS ONE*, 8(6):e65292, 2013.
59. Do infants bind mental states to agent? *Cognition*, 129, 2013, 232-240.
60. The power of human gaze on infant learning. *Cognition*, 128, 2013, 127-133.
61. Infants understand the referential nature of human gaze but not robot gaze. *Journal of Experimental Child Psychology*, 116, 2013, 86-95.
62. Three- and 4-year-old children's response tendencies to various interviewers. *Journal of Experimental Child Psychology*, 116, 2013, 68-77.
63. Intersubjective action-effect binding: Eye contact modulates acquisition of bidirectional association between our and others' actions. *Cognition*, 127, 2013, 383-390.
64. East-West cultural differences in context-sensitivity are evident in early childhood, *Developmental*

Science, 16, 2013, 198-208.

65. 「12 カ月児における方言話者に対する社会的選好」『心理学研究』 85, 2014, 248-256.
66. 「乳児における死の概念理解—選好注視法を用いた死の不可逆性また休止性理解の検討—」『電子情報通信学会技術研究報告』 2014
67. 「赤ちゃんは「社会的存在」である」『赤ちゃんとママ』 48, 2014, 26-27.
68. 「社会的な評価をする赤ちゃん」『赤ちゃんとママ』 49, 2014, 26-27.
69. 「ロボットを通して探る赤ちゃんの心の発達」『ヒューマンインタフェイス学会誌』 10, 2014, 29-34.
70. Can infants use robot gaze for object learning? The effect of verbalization. *Interaction Studies*. (in press).
71. Japanese and American children's moral evaluation of reporting on transgression. *Developmental Psychology*. (in press)
72. Can children with Autism read emotions from the eyes? The Eye Test revisited. *Research in Developmental Disability*. (in press).
73. The effect of labour on ownership decisions in two cultures: developmental evidence from Japan and the UK. *British Journal of Developmental Psychology*. (in press).

【自己評価】

乳幼児における、認知発達一般の研究が順調に実施された。2つの科学研究費基盤 S の研究分担者として、研究を遂行し数多くの論文を刊行した。また、新学術領域「人口共生」では、計画班代表および総括班のメンバーとして、指導的立場で研究を行い、その成果として、予てからの懸案事項であった、ディベロップメンタル・サイバネティクスに関する書籍を出版することができた。評価は高く、この書籍での内容の講演を依頼された。また、2011年には、乳児の身体運動発達と他者の運動行為予測の直接的な関係を実証し、世界的に権威があり、インパクトファクターが10を超える総合誌の *Nature Communications* にその成果が掲載された。現在は、基盤 A の研究代表者を務めており、乳幼児の公平感の発達に関する研究を精力的に行っている。今後は、そうした向社会行動の発達メカニズムを明らかにする研究を進展させたい。

James R. Anderson (心理学専修教授)

I. 研究業績

1. How do African grey parrots (*Psittacus erithacus*) perform on a delay of gratification task? *Animal Cognition*, 13, 2010, 351-358.
2. Flexible feeding on underground storage organs by rainforest-dwelling chimpanzees at Bossou, West Africa. *Journal of Human Evolution*, 58, 2010, 227-233.
3. *Pan* thanatology. *Current Biology*, 20, 2010, R349-R351.
4. Delay of gratification in capuchin monkeys (*Cebus apella*) and squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*). *Journal of Comparative Psychology*, 124, 2010, 205-210.
5. Flexibility in the use of requesting gestures in squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*). *American Journal of Primatology*, 72, 2010, 707-714.

6. Neither infants nor toddlers catch yawns from their mothers. *Biology Letters*, 7, 2010, 440-442.
7. A primatological perspective on death. *American Journal of Primatology*, 73, 2011, 410-414.
8. Reverse-reward learning in squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*): Retesting after 5 years, and assessment on qualitative transfer. *Journal of Comparative Psychology*, 125, 2011, 84-90.
9. Which primates recognize themselves in mirrors? *PLoS Biology*, 9, (3), 2011, e1001023. doi:10.1371/journal.pbio.1001024
10. Do rhesus monkeys recognize themselves in mirrors? *American Journal of Primatology*, 73, 2011, 606-606.
11. A sex difference in effect of prior experience on object-mediated problem-solving in gibbons. *Animal Cognition*, 14, 2011, 599-605.
12. I remember me: Mnemonic self-reference effects in preschool children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 76, (3), 2011, 1-102.
13. Brown (*Eulemur fulvus*) and ring-tailed lemurs (*Lemur catta*) use human head orientation as a cue to gaze direction in a food choice task. *Folia Primatologica*, 82, 2011, 165-176.
14. Socioecological adaptations by chimpanzees, *Pan troglodytes verus*, inhabiting an anthropogenically impacted habitat. *Animal Behaviour*, 83, 2012, 801-810.
15. Capuchin monkeys judge third-party reciprocity. *Cognition*, 127, 2013, 140-146.
16. Third-party social evaluation of humans by monkeys. *Nature Communications*, 4: 1561, 2013, DOI: 10.1038/ncomms2495
17. Kin, daytime associations, or preferred sleeping sites? Factors influencing sleeping site selection in captive chimpanzees (*Pan troglodytes*). *Folia Primatologica*, 84, 2013, 158-169.

II. 自己評価

Since 2010 my research activity has continued to focus on social and nonsocial aspects of cognition in young human children and especially in nonhuman primates. My research on social cognition has looked at the development of contagious yawning in human babies; one empirical study was published along with a review chapter on yawning and the possible role of empathy in contagious yawning in humans and nonhumans. Further work was conducted on nonhuman primates' abilities to understand human communicative cues (various forms of gaze) and to flexibly use a pointing gesture to request a desired object from a human. These papers contribute to the growing literature on nonverbal communication, including cross-species communication, in nonhumans. More recently, we have started to study social evaluation by monkeys who witness third-party interactions; these published studies have already had an impact, stimulating new work in other laboratories. Nonsocial cognition has been studied especially using methods that require some form of self-control, such as delay of gratification, or the "reverse-reward" procedure in which an individual must reach for the less preferred one of two items in order to obtain the more preferred one. We have shown individual differences in these tasks, and plan to incorporate these tasks into studies that will include a more social component. We will ask, for example, whether monkeys' third-party-based social evaluation influences the likelihood of self-control when they are tested by a positively vs. a negatively evaluated person. Other research completed and published since 2010 includes supervised doctoral students' projects on socio-ecological adaptations in wild west African chimpanzees, daytime and nighttime (sleeping) associations in captive chimpanzees, and young human children's development of self-awareness and its

role in memory. These diverse studies are aimed at revealing species' unique and shared psychological (including emotional) processes.

蘆田 宏 (心理学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『脳イメージング入門 ~心理学からのアプローチ~』(荻阪直行編) 2章「fMRI 実験の基礎知識」 培風館 2010 pp.23-43
2. 『知覚心理学』(北岡明佳編) ミネルヴァ書房 2011 5章「運動視」pp.75-94
3. 『心理学概論』(京都大学心理学連合編) ナカニシヤ出版 2011 3章「感覚・知覚 Overview」pp.48-49、「感覚・知覚の統合」pp.69-71、「味覚・嗅覚・触覚・痛み」(蘆田宏・須佐見憲史)pp.65-69

【論文】

1. Miyoshi, K., Minamoto, T., & Ashida, H. Relationships between priming and subsequent recognition memory. SpringerPlus, 3:546, 2014
2. Matsuyoshi D, Kuraguchi K, Tanaka, Uchida S, Ashida, H, and Watanabe K. Individual differences in autistic traits predict the perception of direct gaze for males, but not for females. Molecular Autism, 5:12, 2014
3. Ashida H. & Scott-Samuel N. E. Motion influences the perception of background lightness. i-Perception, 5(1), 2014, 41–49.
4. 藏口佳奈・蘆田宏「顔魅力が再認成績に及ぼす効果—社会的関係性の影響と性差—」 Vision 25(4),2013, 157-166
5. Ashida, H., Kuraguchi, K., & Miyoshi, K. Helmholtz illusion makes you look fit only when you are already fit, but not for everyone. i-Perception 4(5), 2013, 347–351.
6. Stevanov, J., Spehar, B., Ashida, H., & Kitaoka, A. Anomalous motion illusion contributes to visual preference. Frontiers in Psychology, 3:528, 2012.
7. Takemura, H., Ashida, H., Amano, K., Kitaoka, A., & Murakami, I. Neural correlates of induced motion perception in the human brain. Journal of Neuroscience, 32(41), 2012, 14344-14354.
8. Ashida, H., Kuriki, I., Murakami, I., Hisakata, R., & Kitaoka, A. Direction-specific fMRI adaptation reveals the visual cortical network underlying the “Rotating Snakes” illusion. NeuroImage, 61(4), 2012, 1143-1152.

II. 自己評価

2010年以降は担当大学院生の数が増え、研究テーマの幅が広がってきた。また、指導する大学院生による研究成果が次々と目に見える成果となるようになってきた。研究者としてのみならず教育者としても大きく飛躍・成長できた時期であったと思う。また、英国ブリストル大学との協業を中心に、国際的な研究協力体制を強化することができた。自身は以前から国際的な共同研究に重点を置いてきたが、それを指導する大学院生にも波及できるようになってきた。現在は

国立台湾大学との協業の模索など、さらに国際的に研究活動の場を拓けながら、より広い視点での研究に取り組んでいきたい。

田窪 行則（言語学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『日本語の構造－推論と知識管理』 くろしお出版 2010年
2. 『琉球列島の言語と文化－その記録と保存』（編著） くろしお出版 2013年

【論文】

1. 「宮古池間方言の調査について」『日本語学』35号の6. 明治書院.2011. 24-33.
2. Japanese expression of temporal identity: temporal and counterfactual interpretation of tokoro-da. Dikken, M. den and B. McClure (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 18, Center for the Study of Language and Information, Stanford. 2011, 392-409.
3. How many tonal contrasts in Ikema Ryukyuan? (Igarashi, Yosuke(第一著者), Yukinori Takubo, Yuka Hayashi and Tomoyuki Kubo) *Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences*. Hong Kong: Hong Kong Convention and Exhibition Center, 2011, 930-933.
4. 「危機言語ドキュメンテーションの方法としての電子博物館作成の試み－宮古島西原地区を中心として－」『日本語の研究』第7巻4号 日本語学会, 2011, 119-134.
5. 「宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』第16巻1号, (五十嵐陽介(第一著者), 林由華, ペラール・トマ, 久保智之との共著). 2012, 134-148.
6. 「日本語の時間の前後関係としての日本語テンス・アスペクト」『日本語文法』日本語文法学会. 2012, 65-77.
7. Tone neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. Kubozono, H. and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*. (Igarashi, Yosuke (第一著者), Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, Tomoyuki Kubo. (In press) (Mouton).

II. 自己評価

論文7本（このうち一本が学会の2012年度最優秀論文となった）。単著1冊、編著1冊を刊行し、招待講演国際学会の基調講演、Plenary talkを各1件ずつおこなった。このほかにも、第19回国際言語学会でワークショップのオーガナイザーとなった。2013年の国際言語学会で常任運営委員に選ばれた（任期5年）。これは世界で会長、副会長のほかに4人選ばれるもので、各国の代表による互選で選定される。

現在、Mouton社の日本語言語学シリーズのうちのPragmatics and Semanticsの巻の編集を行っており、来年度中には刊行の予定である。また、『琉球諸語と古代日本語』（くろしお出版）を編集途中で、来年度には刊行される。

吉田 和彦 (言語学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. *Indic Across the Millennia: from the Rigveda to Modern Indo-Aryan. Proceedings of the Linguistics Sessions of the 14th World Sanskrit Conference, Kyoto, Japan, September 1-5, 2009* (with Jared Klein). Hempen Verlag: Bremen. 2012. 250pp.
2. 『日本語大事典』 (佐藤武義他と共編著) 朝倉書店. 2014. 2299 頁.

【論文】

1. “Observations on the prehistory of Hittite \dot{i}/a -verbs” *Ex Anatolia Lux: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of H. Craig Melchert on the Occasion of His Sixty-Fifth Birthday*. 2010. 385-393.
2. “1st singular iterated mediopassive endings in Anatolian” *Proceedings of the Twenty-first Annual UCLA Indo-European Conference*. 2010. 231-243.
3. “Hittite $-h\dot{h}ahat(i)$, Lycian $-\dot{\chi}ag\ddot{a}$ and Greek $-\mu\eta\nu$ ” *Acts of the VIth International Congress of Hittitology (Çorum, 25-31 August 2008)*. 2010. 1007-1014.
4. “Proto-Anatolian as a mora-based language” *Transactions of the Philological Society* 109/1. 2011. 92-108.
5. 「比較対応の幻想— ギリシア語 $-\mu\ddot{o}\nu$ 、ヒッタイト語 $-(h)\dot{h}ahat(i)$ 、リュキア語 $-\dot{\chi}ag\ddot{a}$ —」日本言語学会『言語研究』140号. 2011. 1-22.
6. “Notes on Cuneiform Luvian verbs in $*-ye/o-$ ” *The Indo-European Verb. Proceedings of the Arbeitstagung of the Indogermanische Gesellschaft. Los Angeles, September 13-15, 2010*. 2012. 343-351.
7. “The loss of intervocalic laryngeals in Sanskrit and its historical implications” *Indic Across the Millennia: from the Rigveda to Modern Indo-Aryan. Proceedings of the Linguistics Sessions of the 14th World Sanskrit Conference, Kyoto, Japan, September 1-5, 2009*. 2012. 237-246.
8. “Lycian $\dot{\chi}awa-$ ‘sheep’” *Multi Nominis Grammaticus: Studies in Classical and Indo-European Linguistics in Honor of Alan J. Nussbaum on the Occasion of his Sixty-fifth Birthday*. 2013. 357-362.
9. “Return of Wackernagel: The weak affix $-n\ddot{i}-$ in Sanskrit ninth class presents” *Tokyo University Linguistic Papers* 33. 2013. 363-373.
10. 「ヒッタイト語動詞にみられる語幹形成母音 $-e/a-$ 」. 日本オリエント学会『オリエント』56巻1号. 2013. 1-15.
11. “The weak affix $-n\ddot{i}-$ in Sanskrit ninth class presents” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 67. 2013. 65-77.
12. “The Mirage of Apparent Morphological Correspondence: A Case from Indo-European” *Historical Linguistics 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011*. 2013. 153-172.
13. “Hittite $\dot{h}u-it-ti-it-ti$ ” *Proceedings of the Eighth International Congress of Hittitology. Warsaw, 5-9 September*. 2014. 1034-1041.
14. “The thematic vowel $*-e/o-$ in Hittite verbs” *Munus amicitiae: Norbert Oettinger a collegis et amicis dicatum*. 2014. 373-384.

15. “Hittite verbs in *-nuzi*” *Miscellanea Indogermanica. Festschrift für José Luis García Ramón zu seinem 65. Geburtstag*. 2014. 673-692.
16. “Hittite verbs in *-atta*” to appear in *Festschrift for Stephanie Jamison*.
17. “Inferring Linguistic Change from a Permanently Closed Historical Corpus” to appear in *Handbook of Historical Linguistics, Volume 2*.
18. “Hittite *parḫattari* reconsidered” to appear in *Festschrift for Jared S. Klein*.

II. 自己評価

ヒッタイト語ならびにその周辺の古代アナトリア諸言語で書かれた新資料の発見、およびこれらの言語資料に対して施された文献学的成果は、近年の印欧語比較言語学の研究に対して、量と質の両面から以前とは根本的に異なる視点を与えている。2010年以降、実証的な立場から収集した言語資料に対して歴史言語学および理論言語学的分析を施すことによって、それまで理解するのが困難であったアナトリア比較言語学や印欧語比較言語学のいくつかの問題を解明することができた。また国際サンスクリット学会の論文集を編集する過程において、サンスクリットの韻律および動詞形態論に関して、新たな知見を得ることもできた。今後は引き続き、アナトリア諸語を中心にした歴史比較言語学的研究を進めていきたい。

吉田 豊（言語学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『ソグド人の美術と言語』（曾布川寛と共同編集）臨川書店 2011年 334頁
2. 『日本に現存する江南マニ教絵画の研究』臨川書店 2015年（近刊）

【論文】

1. “Découvertes récentes en Chine et au Japon. Peinture manichéennes et documents sogdiens (VIIIe – XIIIe s.)”, in: *Annuaire résumé des conférences et travaux* (Ecole Pratique des Hautes Etudes. Section des sciences historiques et philologiques) 142e année, 2009-2010[2011], pp. 57-59.
2. 「ソグド人と古代チュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, 2011, pp. 1-42. (“Three philological notes on the Sogdo-Turkish relationship”, *Memoirs of the Faculty of Letters Kyoto University*, No. 50, 2011, pp. 1-42.)
3. “Some new readings in the Sogdian version of Karabalgasun Inscription”, in: M. Ölmez et al. (eds.), *From Ötüken to Istanbul. 1290 years of Turkish (720-2010)*, Istanbul, 2011, pp. 77-86.
4. 「仏教ソグド語断片研究（II）」『西南アジア研究』no. 75, 2011, pp. 1-10.
5. 「附論 西安出土北周「史君墓誌」ソグド語部分訳注」森安孝夫（編）『ソグドからウイグルへ』東京 汲古書店 2011年12月15日 pp. 93-111.
6. 「旅順博物館所蔵のソグド語資料」旅順博物館・龍谷大学共編『中央アジア出土の仏教写本』京都 2012, pp. 39-53.
7. 「有関和田出土8—9世紀于闐語世俗文書の札記（三）上・中・下」（田衛衛訳、西村陽子校）『敦煌学輯刊』no. 75, 2012/1, pp. 143-158; no. 76, 2012/2, pp. 165-176; no. 77, 2012/3, pp.

148-161.

8. 「マニの降誕図について」『大和文華』124号, 2012, pp. 1-10.
9. “New Turco-Sogdian documents and their socio-linguistic backgrounds”, in: Academia Turfanica (ed.), *The history behind the languages. Essays of Turfan forum on old languages of the Silk Road*, Shanghai 2012, 48-60.
10. “On the taxation system of pre-Islamic Khotan”, in: V. Hansen (ed.), *The Silk Road. Key papers*, vol. II, Leiden/Boston 2012, pp. 621-644.
11. “When did Sogdians begin to write vertically?”, in: *Tokyo University Linguistic Papers 31, Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto*, 2013, pp. 375-394.
12. “Heroes of the Shahnama in a Turfan Sogdian text. A Sogdian fragment found in the Lushun Otani Collection”, in: P. Lurje (ed.), *Sogdians, their precursors, contemporaries and heirs. Volume in the memory of Boris Il'ich Marshak (1933-2006)*, Transactions of the State Hermitage Museum LXII, St. Petersburg 2013, pp. 201-218.
13. 「バクトリア語文書研究の近況と課題」『内陸アジア言語の研究』XXVIII, 2013, pp. 39-65.
14. “Buddhist texts produced by the Sogdians in China”. In: M. Maggi et al. (eds.), *Buddhism among the Iranian peoples of Central Asia*, Vienna, 2013, pp. 155-179.
15. “What has happened to Suḍāšn’s legs? Comparison of Sogdian, Uighur and Mongolian versions of the Vessantara Jātaka”, in: E. S. Tokhtasev and P. Lurje (eds.), *Commentationes Iranicae. Vladimiro f. Aaron Livschits nonagenario donum natalicum*, St. Petersburg 2013, pp. 398-414.
16. 「中国江南製作のマニ教絵画によるトルファン出土史料の再解釈」奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集刊行会編『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』東京：佼正出版社 2014, pp. 1056-1065.
17. 「敦煌秘笈中のマニ教中世ペルシア語文書について」『杏雨』17, 2014, pp. 1-8 (pp. 324-317).
18. 「中世イラン語と中古漢語——「沙に消えた中国語」をめぐって——」東方学研究論集刊行会編『高田時雄教授退職記念 東方学研究論集』京都：臨川書店 2014, pp. 294-302.
19. 馬小鶴(訳)「霞浦摩尼教文書『四寂讚』及其安息語原本」, 『国際漢学研究通説』(Newsletter for International China Studies) No. 9, 2014, pp. 103-121.

II. 自己評価

近年は記念論文集や一般向けの解説などの執筆依頼が多くなり、それに応えるのが精一杯で、査読付の学会誌への投稿などはできていない。大いに反省すべき点である。その一方で、共編書の『ソグド人の美術と言語』は、2014年2月イラン共和国の「The World Book Award」を受賞した。イラン文化を海外に広めたことが評価されたということであった。また、2014年7月14日には、中央アジア学分野で英国学士院の Corresponding Fellow に選出された。これも一連の業績が海外で評価されたものとして非常に誇りに思っている。定年まで5年となりやり残した研究を完成させるとともに、その成果を国内外の学会で発表していきたい。教育面では、博士課程で指導する学生のうち3人が学振研究員に採用された。今春まで指導していた二人の学生は、同PDに採用され博士論文を執筆中である。ただ採用されなかった学生がいたことは残念であった。今後も院生の指導に努め、研究者として自立できるようにサポートして行きたい。

千田 俊太郎 (言語学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『佳子のソウル留学から... 中級韓国語教材』 同学社. 2012 年, 107 頁 (松尾勇・金善美・千田俊太郎共著)
2. 『じゃんけんぽん... 入門初級韓国語教材』 同学社. 2013 年, 87 頁 (松尾勇・金善美・千田俊太郎共著)

【論文】

1. 「단어 인정 기준과 의미에 대하여」 정성여 이정민편 『한국어 연구의 새 지평』 태학사, 2010 年, pp. 31-68. (「語の認定基準と意味について」鄭聖汝・イ・ジョンミン編『韓国語研究の新地平』太學社、朝鮮語)
2. 「東シンプー諸語サブグループピングに向けて」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集 3』総合地球環境学研究所, 2012 年, pp. 153-182.
3. 「基底の音節構造: 朝鮮語の媒介母音」『ありあけ熊本大学言語学論集』11, 2012 年, pp. 1-46.
4. 「ドム語第二ドム方言」『ありあけ 熊本大学言語学論集』12, 2013 年, pp. 1-30.

II. 自己評価

大きく分ければパプア諸語と朝鮮語の二つについて、研究を進めてきた。パプア諸語については、これまでドム語の第一方言の記述に中心的に取り組んできた。この何年かの中に、ドム語の他方言や、系統的に近い他の東シンプー諸語についても基礎的な調査をすることができた。そこで、この地域の言語・方言の系統論を自らの課題に含め、特にトーンに注目して論じる試みも行った。2010 年以降については、公刊された業績は朝鮮語についてのものの方が多い。これは語学教育に携った時期であることと関連し、二つの著書(共著)は語学教材である。朝鮮語については主に形態論を扱って、先行研究における語の認定基準の批判、挿入母音の分析についての新提案を行った。

ドム語や他の東シンプー諸語については、未整理の資料が多く残ってしまったため、今後は言語資料の提出にも積極的に取り組んでゆきたい。

Catt, Adam Alvah (言語学専修講師)

I. 研究業績

【論文】

1. On Pāli *avajja-* and *vajja-*. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 60:2 (2012), pp. 204–207.
2. The Particle **h₂(é)u* in Vedic and Beyond: A New Proposal on its Function and Etymology. In Stephanie Jamison, Craig Melchert, and Brent Vine (eds.). *Proceedings of the 23rd Annual UCLA Indo-European Conference*. 2012. Bremen: Hempen. Pp. 47–59.
3. A “Lost” *i*-stem: Pāli *piṭṭhi-* ‘back’. In Norbert Oettinger and Thomas Steer (eds.). *Das Nomen im Indogermanischen: Morphologie, Substantiv versus Adjektiv, Kollektivum. Akten der Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft, vom 14. bis 16. September 2011 in Erlangen*. 2014. Wiesbaden:

Reichert. Pp. 24–31.

4. The Derivational Histories of Avestan *aēsma*- ‘firewood’ and Vedic *idhmá*- ‘id.’ In Stephanie Jamison, Craig Melchert, and Brent Vine (eds.). *Proceedings of the 25th Annual UCLA Indo-European Conference*. 2014. Bremen: Hempen. Pp. 39–48.

II. 自己評価

講師として本学に着任したのは2014年10月1日であり、上記の論文1、2、3、4はいずれも学生の時分に著したものである。論文1を除いて、上記の論文は海外の学会で発表し、プロシーディングズに掲載されているものである。論文2は、修士論文で扱ったテーマを展開したもので、ヴェーダ語の小辞をめぐり問題を解明することを目標としている。今までの研究は主にインド・イラン語を対象としているが、今後はトカラ語などの言語へ研究対象を広めていきたいと考えている。また、自分の研究だけでなく、授業と学生指導にも力を注ぎたいと考えている。

伊藤 公雄 (社会学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 伊藤公雄・井上俊（編）『社会学ベーシックス』全10巻別巻1、世界思想社、2008～2011年、各250頁。
2. 天野正子・伊藤公雄他（編）(2009～2011)『新編日本のフェミニズム』全12巻、岩波書店、2009～2011年、各350頁。
3. 伊藤公雄・春木育美・金香男（編）『現代韓国の家族政策』行路社、2010年、247頁。
4. 伊藤公雄（編）『コミュニケーション社会学入門』世界思想社、2010年、238頁。
5. 伊藤公雄（編集長）『社会学事典』日本社会学会社会学事典刊行委員会編、丸善、2010年、945頁
6. “The Formation and Growth of Men’s Movement” in Fujita-Fanselow, F. (ed.), *Transforming Japan, The Feminist Press at the City University of New York*.2010、pp.108-115.
7. “Social Movement Media, 1920s-1970s (Japan)” in J.H.Downing (ed.) *Encyclopedia of Social Movement Media*, Sage,2010、pp.470-473.
8. 伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子 『改訂版 女性学・男性学—— ジェンダー論入門』、有斐閣、2011年、320頁
9. 『ジェンダー社会科学の可能性 3 壁を超える』(「男性学・男性性研究からみた戦後日本社会とジェンダー」担当)、辻村みよ子・大沢真理編『ジェンダー社会科学の可能性 3 壁を超える』、岩波書店、2011年、pp.91-117.
10. 「男性主導社会からの脱出へ」岩波書店編集部『これからどうする—未来社会の作り方』岩波書店、2013年、653頁
11. 「イタリア・ファシズムにおける身体文化」、日本スポーツ社会学会編『21世紀のスポーツ社会学』創文企画、2013年、272頁
12. “Emerging Culture Wars: Backlash Against 'Gender Freedom'” in *Gender and Welfare States in Eastern*

Asia Confucianism or Gender Equality, Macmillan. 2014, 216 頁

13. 伊藤公雄・富士谷あつ子編『フランスに学ぶ男女共同の子育て少子化抑制政策』、明石書店、2014 年

【論文】

1. 「CEDAW(国連女性差別撤廃委員会)最終勧告と『男女共同参画基本計画(第3次)』をめぐって」日本学術会議『学問の動向』2010. vol.15.no.9. pp.39-41.
2. 「(メタ)複製技術時代の／とDIY文化」、京都精華大学全学研究センター『ポピュラーカルチャー研究』、Vol.4.No.1.2010、pp.8-20.
3. 「『男女共同参画』政策の過去・現在・未来」、ジェンダー法学会『ジェンダーと法』、No.8. 2011、pp.5-17.
4. 「日本の展望—学術からの提言 2010 男女共同参画の視点から」日本学術会議『学問の動向』2011 年 6 月号、2011、pp.68-71.
5. 「大学型高等教育におけるジェンダー平等がもたらすもの」IDA 大学協会『IDE 現代の高等教育』No.534, 2011 年 10 月号、2011、pp.42-46.
6. 「G・ヴィーコと知の技法」世界思想社、『世界思想』2013 年春号、pp.27-31.
7. 「震災復興・デモクラシー・ジェンダー」日本学術会議『学問の動向』2013、pp.36-8.
8. 「男性にとってのジェンダー平等—男性学・男性性研究の視点から」青山学院大学国際交流共同研究センター『Peace and Culture』第6巻、2014、pp.3-16.
9. 「アントニオ・グラムシ 人と思想」『哲学研究』第597号、2014、pp.23-47.

II. 自己評価

ジェンダー研究、ジェンダー政策研究を深化させ、研究の一方で日本政府および地方自治体などの政策決定にも深く参与してきた。また、社会学関連の事典やシリーズものの編集を通じて社会学のこれまでの成果をまとめ、学会のみならず日本社会において社会学を共有の学術的財産とすることに大きく貢献した。今後とも、ジェンダー研究を進めるとともに、社会学の研究・教育に深く関与していきたい。

松田 素二 (社会学専修教授)

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『ケニアを知るための55章』(津田みわと共編著) 明石書店、2012年、376ページ。(共).
2. 『コリアンディアスポラと東アジア社会』(鄭根植と共編著) 京都大学学術出版会、2013年、316ページ。(共).
3. 『アフリカ社会を学ぶ人のために』(編著) 世界思想社、2014年 320ページ。(共).

【論文】

1. Local Community and Environmental Conservation: Think Globally, Act Locally Reconsidered, S.Tanabe ed. 'Communities of Becoming' in Mainland South East Asia, 2010, 119-133.

2. 「苦難の自分史を翻訳する術—あるコンゴ難民のライフ・ヒストリーを事例にして」、真島一郎編『20世紀〈アフリカ〉の個体形成—南北アメリカ・カリブ・アフリカからの問い』平凡社: 2011年、418-444.
3. Motoji Matsuda (ed.) *The Roles of Local Knowledge in Globalized Context*, Department of Sociology, Kyoto University, 2011, 1-10.
4. (with A.Furukawa) Potentiality of Indigenous Knowledge at the Times of Globalization: From Experiences of Local Communities in Kenya, Nepal, Thai and Japan, in *The Roles of Local Knowledge in Globalized Context*, Department of Sociology, Kyoto University, 2011, 7-17.
5. Towards Understanding Africa: From Multi-Perspectives in *The Roles of Local Knowledge in Globalized Context*, Department of Sociology, Kyoto University: 2011, 89-100.
6. 「海外フィールドワーク」、鏡味治也, 森山工, 橋本和也, 関根康正編『フィールドワーカーズハンドブック』世界思想社:2011年、87-103.
7. 「理不尽な集合暴力は誰がどのように裁くことができるか—ケニア選挙後暴動の事例から」、『フォーラム現代社会学』10号, 関西社会学会:2011年、37-49.
8. 「市場経済に潜り込む生業世界」、『生業と生産の社会的布置—グローバリゼーションの民族誌のために』松井健, 野林厚志, 名和克郎共編, 岩田書院:2012年、365-400 .
9. Beyond Romanticization of Community-based Knowledge and Institutions, presented to Kyoto International Seminar 2012, Nov.24 Kyoto University, 2012,75-81.
10. 「暴動を予防する身体—ナイロビにおける 2007-2008 選挙後暴力の事例から—」、菅原和孝編『身体化の人類学』世界思想社: 2013年、397-419.
11. 「現代世界における人類学的実践の困難と可能性」、『文化人類学』78巻1号: 2013年、1-25.
12. 「現代世界の解釈ツールとしての桜井式ライフストーリー法—滋賀県・湖西, 湖東の調査から」、山田富秋, 好井裕明編『語りが拓く地平: ライフストーリーの新展開』, せりか書房: 2013年、171-194.
13. Japanese Society of Cultural Anthropology Award Lecture: The Difficulties and Potentials of Anthropological Practice in a Globalized World, *Japanese Review of Cultural Anthropology* vol. 14:2014, 1-29.

II. 自己評価

2010年以降の研究テーマは、アフリカ社会がつくりあげてきた在来の自前の紛争解決メカニズムとその思想について、アフリカ人の研究者やNGO活動家、さらには政府関係者とともにフォーラムを組織して研究を積み重ねてきた。そのなかで、こうした在来自前のメカニズムと思考方法を「アフリカ潜在力」としてモデル化して理論的に整理する作業を進めてきた。またこのモデルを実際に応用してケニアにおける紛争解決の現場のフィールドワークを継続するなかでモデルを実践的に修正しながら有効性を高めることに成功しつつある。こうした研究成果のさきに、アフリカ地域に限らない、従来の紛争解決・和解研究とは異なる新しい人類学・社会学的な紛争解決・和解研究の枠組を展望する可能性を検討していきたい。

落合 恵美子 (社会学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 《亚洲社会的家庭和两性关系——中日韩新泰（五国六地）实证和比较研究》（共編著）世界知识出版社、2010年、340頁。
2. 『アジア女性と親密性の労働』（共編著）京都大学学術出版会、2012年、329頁。
3. 『親密圏と公共圏の再編成—アジア近代からの問い』（編著）京都大学学術出版会、2013年、356頁。
4. *Asian Women and Intimate Work* (co-editorship), Leiden: Brill, 2013, 318pp.
5. *Transformation of the Intimate and the Public in Asian Modernity* (co-editorship), Leiden: Brill, 2014, 314pp.

【論文】

1. “Quitter l’Occident, rejoindre l’Orient : les « deux décennies perdues » dans l’évolution de la famille au Japon,” *Ebisu : Études japonaises*, 44, 2010, pp.185-204.
2. “Unsustainable Societies: The Failure of Familialism in East Asia’s Compressed Modernity,” *Historical Social Research*, 36 (March), 2011, pp.219-245.
3. “Love and Life in Southwestern Japan : the Story of a One-Hundred-Year-Old Lady,” *Journal of Comparative Family Studies*, 42-3, 2011, pp.399-409.
4. “From Foreign Trainees to Unauthorized Workers: Vietnamese Migrant Workers in Japan,” co-authorship with Danièle Belanger, Kayoko Ueno, and Khuat Thu Hong, *Asian and Pacific Migration Journal*, 20-1, 2011, pp.31-53.
5. “Paradox of marriage in East Asia” (in Vietnamese), *Journal of Family and Gender Studies*, 21-4, 2011, pp.84-91.
6. 「個人化と家族主義—東アジアとヨーロッパ、そして日本」ウルリッヒ・ベック・鈴木宗徳・伊藤美登里編『リスク化する日本社会—ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店、2011年、103-125頁
7. 「親密性の労働とアジア女性の構築」『アジア女性と親密性の労働』（落合恵美子・赤枝香奈子共編）京都大学出版会 2012年、1-34頁
8. 「東アジアの低出生率と家族主義——半圧縮近代としての日本」『哲学研究』593号、1-32頁、京都哲学会 2012年
9. “The Struggle against Familialism: Reconfiguring the Care Diamond in Japan,” (co-authorship with Aya Abe, Takafumi Uzuhashi, Yuko Tamiya and Masato Shikata) in Shahra Razavi and Silke Staab eds., *Global Variations in the Political and Social Economy of Care: Worlds Apart*, New York and London : Routledge, 2012.
10. 「アジア近代における親密圏と公共圏の再編成—「圧縮された近代」と「家族主義」」落合編『親密圏と公共圏の再編成—アジア近代からの問い』京都大学学術出版会 2013年 1-38頁
11. 「ケアダイヤモンドと福祉レジーム—東アジア・東南アジア6社会の比較研究」落合編『親

密圏と公共圏の再編成—アジア近代からの問い』 京都大学学術出版会 2013 年 177-200 頁

12. “The Logics of Family and Gender Changes in Early 21st-Century East Asia,” Cho Joo-Hyun ed., *East Asian Gender in Transition*, Daegu : Keimyung University Press, pp. 117-165.
13. “Paradigm Shifts in Japanese Family Sociology,” *International Journal of Japanese Sociology* 22, 2013, 104-127.
14. “Introduction: Intimate Work and the Construction of Asian Women,” Ochiai Emiko and Aoyama Kaoru eds., *Asian Women and Intimate Work*, Leiden: Brill, 2013, pp.1-34.
15. “Prime Ministers’ Discourse in Japan’s Reforms since the 1980s: Traditionalization of Modernity rather than Confucianism,” (co-authorship with Kenichi Johshita) in Sirin Sung and Gillian Pascall eds., *Gender and Welfare State in East Asia: Confucianism or Equality?*, Palgrave, 2014, pp.152-180.
16. 「亜州女性と親密性労働」李卓・胡膨主編『亜州社会発展と女性参与』中国社会科学出版社 2014 年 17-33 頁
17. “Leaving the West, rejoining the East?: Gender and family in Japan’s semi-compressed modernity,” *International Sociology* 29, 2014, 209-228.
18. 「アジア比較研究の 3 つのチャレンジ：ケアレジーム研究の発達を通して」『福祉社会学研究』11、2014 年
19. 「近代世界の転換と家族変動の論理：アジアとヨーロッパ」『社会学評論』64-4, 2014 年, pp.533-551.
20. “Reconstruction of Intimate and Public Spheres in Asian Modernity,” Ochiai Emiko and Hosoya Leo Aoi eds., *Transformation of the Intimate and the Public in Asian Modernity*, Leiden: Brill, 2014, pp.1-36.
21. “Care Diamonds and Welfare Regimes in East and Southeast Asian Societies: Bridging Family and Welfare Sociology,” Ochiai Emiko and Hosoya Leo Aoi eds., *Transformation of the Intimate and the Public in Asian Modernity*, Leiden: Brill, 2014, pp.166-189.

II. 自己評価

現在の世界においてマクロな公的領域とミクロな私的領域との両面で起きている変化を親密圏と公共圏の同時的再編成ととらえるという枠組みを打ち出し、家族研究、福祉国家研究、国際移動研究などに分かれていた研究を学際的かつ有機的に統合することをめざしてきたが、ようやくその成果が形を現してきた。少子高齢化、ケア負担の増大、家族やジェンダーの変容、社会保障制度の危機など現代世界の喫緊の課題に、アジアの視点から接近する妥当な方法確立しつつあると言えよう。この枠組みに基づいて実施した京都大学文学研究科 GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の成果出版シリーズ *The Intimate and the Public in Global and Asian Perspectives* (Brill 社)、「変容する親密圏／公共圏」(京大出版会)も刊行中である。共編著 *Asian Women and Intimate Work* はアメリカ図書館協会、大学・研究図書館協会の Choice 誌が選定する Outstanding Academic Titles 2014 に選ばれた。

田中 紀行 (社会学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『モダニティの変容と公共圏』（吉田純と共編）京都大学学術出版会、2014年、vi+281 ページ

【論文】

1. 「ヴェーバー受容と現代社会学」『社会学雑誌』第27・28号 神戸大学社会学研究会、2011年、pp.12-27
2. 「モダニティの変容と公共圏論の展開」（吉田純と共著）田中紀行・吉田純編『モダニティの変容と公共圏』京都大学学術出版会、2014年、pp. 1-27

【自己評価】

2008年度から参加していたグローバルCOEプログラムが2012年度をもって終了し、研究代表者として組織してきた共同研究「モダニティ論からみた公共圏の理論的検討」の成果を共編著として刊行することができた。また以前から個人研究として取り組んできたヴェーバー社会学の受容と現代化に関する研究については、ようやく論文にまとめることができたが、雑誌の特集への寄稿という事情もあって概括的なものにとどまらざるをえなかった。今後は論文で指摘したヴェーバー社会学の体系的受容の3種類の各々について個別的な研究を進めていきたいと考えている。

太郎丸 博 (社会学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 太郎丸博編、2014、『東アジアの労働市場と社会階層』京都大学出版会。
2. H. Tarohmaru (ed.) 2015, *Social Stratification and Labor Markets in East Asia*, Brill.

【論文】

1. 太郎丸 博, 2010, 「数理社会学・リベラル・公共社会学: プロ社会学者は社会のために何が言えるのか?」『フォーラム現代社会学』9: 52-59.
2. 太郎丸 博, 2011, 「A. ラパポート/A.M. チャマー『囚人のジレンマ』」『井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス別巻: 社会学的思考』世界思想社, pp.177-186.
3. Tarohmaru, H, 2011, "Income Inequality between Standard and Nonstandard Employment in Japan, Korea and Taiwan," Y. Sato and J. Imai (eds.) *Japan's New Inequality: Intersection of Employment Reforms and Welfare Arrangements*, Melbourne, Trans Pacific Press, pp.54-70.
4. 柄澤健史・太郎丸博, 2011, 「若年不安定就労層に見る地域格差」佐藤嘉倫・尾嶋史章編『現代の階層社会 1: 格差と多様性』東京大学出版会, pp.81-96.
5. 太郎丸博, 2011, 「若年非正規雇用と結婚」佐藤嘉倫・尾嶋史章編『現代の階層社会 1: 格差

と多様性』東京大学出版会, pp.131-142.

6. 平尾一朗・太郎丸博, 2011, 「世代間移動レジームにおける非正規雇用の位置」『理論と方法』26(2): 355-370.
7. 太郎丸 博, 2011, 「自立困難な若者の研究動向」宮本みち子・小杉礼子編『二極化する若者と自立支援』明石書店, pp.78-95.
8. 太郎丸 博, 2013.2, 「正規／非正規雇用の賃金格差要因：日・韓・台の比較から」落合恵美子編『親密圏と公共圏の再編成：アジア近代からの問い』京大出版会, pp. 155-175.
9. 安井大輔・ミロシュ・デブナール・太郎丸 博, 2013.10, 「グローバル・シティと賃金の不平等—産業・職業・地域」『社会学評論』64(2): 152-168.
10. 永瀬圭・太郎丸博, 2014.3, 「性役割意識のコーホート分析——若者は保守化しているか——」『ソシオロジ』58(3): 19-33.
11. 太郎丸博, 2014.3, 「日本の社会学はどんな文献を参照しているのか：引用作法の下位分野間比較 1990-2009」『京都大学文学部研究紀要』53: 235-255.

II. 自己評価

この期間は、著書よりも査読付きの雑誌論文を学生と共著で書くことに重点を置いてきた。これによって研究と教育の両立を図ってきたが、一定の成果があったと考える。これまでの経験によって、学生との共著論文執筆のメリットと限界が見えてきたので、今後の教育・研究のやり方を改善していく手がかかりとしたい。研究内容は、社会階層論、非正規雇用研究を中心としながら、東アジアの国際比較に着手することができた。これによって、日本社会の構造をより包括的に理解することが可能になった。また、2014年11月に社会調査協会から優秀研究活動賞をいただいた。

小林 致広（地理学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『中南米における文化遺産の資源化とツーリスモ』（編著）、神戸市外国語大学外国学研究所、2011年、132頁

【論文】

1. 「文化ツーリスモと文化遺産の観光資源化—クンブレ・タヒンとボラドールの無形文化遺産登録」神戸市外国語大学外国学研究 78、2011年、3-32頁
2. 「メキシコ戦住民運動の再接合は可能か」京都ラテンアメリカ研究所紀要 No.11、2011年、37-55頁
3. 「ナシオン・プレペチャの試み—メキシコ・ミチョアカン州における先住民地域自治の模索と挫折」『政治的アイデンティティの人類学』太田好信編、昭和堂、2012年、248-278頁
4. 「サパティスタ運動の新サイクル—2012年12月21日、『沈黙の行進』の告げるもの」ソマリサ 142号、2013年、2-8頁

5. 「サパティスタ運動の新しいサイクルータタ・フアン・チャベス・アロンソ講座に参加して」先住民族の10年 News 第199号、2013年、2-5頁
6. 「メシーカ征服活動と石彫モニュメントー旧大司教館の石とティソックの石」京都大學文學部研究紀要第52号、2013年、287-321頁
7. 「フンボルト将来の絵文書に関する文献学的考察」京都大學文學部研究紀要第52号、2014年、257-291頁
8. 「メキシコ・ゲレロ州海岸山岳地域の共同体警察による代替的司法の挑戦（前編）」京都ラテンアメリカ研究所紀要 No.14、2014年、1-13頁

II. 自己評価

2010年以降の研究は大きく分けて3つの分野からなる。一つめの分野は、他者イメージと暴力、伝統文化としての文化遺産利用などに関する研究で、前勤務校の神戸市外国語大学の共同研究班「中南米におけるエスニシティ研究班」の共同研究者と『中南米における文化遺産の資源化とツーリズム』（神戸市外国語大学外国学研究所）としてまとめた研究成果はこの分野のものである。二つめの分野は、1990年代半ばからのメキシコ先住民族運動、とりわけ先住民自治を題材とする一連の研究である。2010-13年の科研「メキシコとグアテマラの先住民族運動の比較研究」における4年間の現地調査に基づき、ミチョアカン州とゲレロ州の地域自治運動の経過と実態に関する論文をまとめ、プエブラ州とチアパス州の事例の簡潔な報告を行った。三つめの分野は、先スペイン期のメソアメリカの考古学資料や絵文書資料の資料学的な分析である。現時点では、2番目と3番目の分野の研究は未完成の状態である。今後に関しては、短期的には科研による現地調査の成果を盛り込んだチアパス州とプエブラ州における先住民領域の自律的空間編成に関する比較研究を進め、中期的にはスペイン人到来前のメシーカの領域編成についての包括的なエスノヒストリー研究をまとめていきたい。

石川 義孝（地理学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『地図でみる日本の外国人』（編著）、ナカニシヤ出版、2011年、80頁。
2. 『地域と人口からみる日本の姿』（共編著）、古今書院、2011年、134頁。
3. *Traditional wisdom and modern knowledge for the earth's future: Lectures given at the Plenary Sessions of the International Geographical Union Kyoto Regional Conference, 2013.* (共編著), Tokyo: Springer, 2014, 212p.

【論文】

1. “Role of matchmaking agencies for international marriage in contemporary Japan.” *Geographical Review of Japan Series B* 83 (1), 2010, pp.1-14.
2. “Feminization of immigration in Japan: Marital and job opportunities.” (共著) W.-S. Yang and M. C.-

- W. Lu (eds.) *Asian cross-border marriage migration: Demographic patterns and social issues*, Amsterdam: Amsterdam University Press, 2010, pp.49-86.
3. 「加賀市3温泉への外国人観光客」、京都大学文学部地理学教室編『加賀市—実習旅行報告書—』2010年、pp.89-92.
 4. “Characteristics of Japan-born Japanese in the United States: Students, non-students, and recent brides of non-Japan-born American citizens.” (共著) *Jimbun-chiri (Japanese Journal of Human Geography)* 63(3), 2011, pp.483-506.
 5. “Recent in-migration to peripheral regions of Japan in the context of incipient national population decline.” F. Coulmas and R. Lützel (eds.) *Imploding populations in Japan and Germany*, Leiden and Boston: Brill, 2011, pp.420-442.
 6. “Impact of the economic crisis on human mobility in Japan: A preliminary note.” *Belgian Journal of Geography* 2011 (3-4), 2011, pp.129-147.
 7. 「都市地理学を横目でながめつつ」、阿部和俊編『日本の都市地理学50年』古今書院、2011年、pp.242-251.
 8. 「外国人流入は地方圏を救うか?」、『統計』2011年1月号、2011年、pp.2-6.
 9. 「諏訪市の外国人と外国人施策」、京都大学文学部地理学教室編『諏訪市—実習旅行報告書—』2011年、pp.113-117.
 10. “Displaced human mobility due to March 11 disaster.” *The 2011 East Japan Earthquake Bulletin of the Tohoku Geographical Association*, 2012, <http://tohokugeo.jp/disaster/articles/e-contents29.pdf>
 11. “Current conditions and geographical background factors of international marriages: A case study of Japan’s Tokai Region.” (共著) *Geographical Review of Japan* 85(2), 2012, pp.57-73.
 12. 「外国人の国内人口移動」、『統計』2012年4月号、2012年、pp.10-15.
 13. 「国際結婚仲介人のみた佐世保の戦争花嫁」、京都大学文学部地理学教室編『佐世保市—2012年度実習旅行報告書—』2012年、pp.111-114.
 14. 「国勢調査のデータを日本在住の外国人の研究に利用する」、『エストレーラ』2013年2月号、2013年、pp.30-33.
 15. 「美濃加茂市の多文化共生施策」、京都大学文学部地理学教室編『美濃加茂市—2013年度実習旅行報告書—』2013年、pp.65-69.
 16. 「2005～2010年における新規流入移動と国内移動からみた外国人の目的地選択」、(共著)『京都大学文学部研究紀要』53、2014年、pp.293-318.
 17. 「栗原市の誕生と同市の岩手・宮城内陸地震および東日本大震災への対応」、西原純編『平成の合併政策終了後の合併・非合併市町村の現状・行政課題の解明と合併政策の総括』（平成22年度～25年度科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書）、2014年、pp.15-29.

18. 「日本の国際人口移動—人口減少問題の解決策となりうるか?—」、『人口問題研究』70(3)、2014年、pp.244-263.
19. 「島根県の定住支援策」、京都大学文学部地理学教室編『松江市—2014年度 実習旅行報告書—』2014年、pp.89-94.

II. 自己評価

2009年から日本の総人口の減少が始まったが、そのインパクトやそれに対する処方箋が筆者の関心であり、いくつかの重要な具体的な課題に多面的な検討を加えてきた。その結果、現代日本を対象とした人口地理学的研究に重要な貢献をしてきた、と自負している。この数年は、公的統計を重視した研究を行ってきたが、今後は地方自治体や在留外国人の意向を踏まえた、国内の望ましい人口地理をめざす研究を進めようと考えている。なお、2013年8月4~9日に、国立京都国際会館を主な会場として、国際地理学連合の京都国際地理学会議が開かれ、筆者が組織委員長をおおせつかったが、幸い会議は成功裡に終了した。この会議は、2013年度に日本国内で開催された優れた国際会議として、日本政府観光局（JNTO）による国際会議開催貢献賞を受賞した。

杉浦 和子（地理学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『人文地理学事典』（編集委員）丸善出版、2013年、761頁。

【論文】

1. 「国立故宫博物院蔵『山西辺垣図』および『山西三関辺垣図』と京都大学蔵『山西辺垣布陣図』との比較」（共著）京都大学文学部研究紀要 第50号 2011年3月、pp.1-29.
2. 「国立故宫博物院蔵《山西邊垣圖》、《山西三關邊垣圖》與京都大學所藏《山西鎮邊垣布陣圖》的比較研究」（共著）清華中文學報、第六期、2011年12月、pp.137-164.
3. 「国立故宫博物院ならびに京都大学所蔵の「山西辺垣図群」の描図パターンの比較と分類」（共著）京都大学文学部研究紀要 第51号 2012年3月、pp.1-32.
4. 「グローバル／ローカルモデル」人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版、2013年9月、pp.204-205.
5. 「距離」人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版、2013年9月、pp.90-91.
6. 「経済的視点からの復興」中央防災会議『1948 福井地震報告書』中央防災会議、2011年3月、pp.110-120.
7. 「移動距離の違いからみた人口移動の時間的・空間的パターンの分析：福井市を事例として」福井大学地域環境研究教育センター研究紀要『日本海地域の自然と環境』21号、2014年11月、pp.79-97.
8. 「京都大学蔵『北京内城図（八旗方位図）』（仮称）に示される満州・蒙古・漢軍の関連施設とその時代背景」（共著）京都大学文学部研究紀要 第54号、2015年（印刷中）.

II. 自己評価

空間分析と古地図研究と空間分析の2つのテーマを中心に、調査・研究を継続した。空間分析の研究では、移動行動の特質が行動空間の広狭だけでなく、行動の時間周期とも深く関わることを実証し、人間行動と空間と時間の関係性の解明に貢献した。古地図研究では、山西辺垣布陣図に関する調査を継続し、台湾国立故宫博物院に所蔵される山西辺垣図群の所在を突き止め、編年と分類を行った。台湾(2011年)、京都(2012年)、モスクワ(2014年)における招待講演は、山西地図群の研究に対する注目度の高さを示す。また、山西故宫博物院との調査が新たな北京城図の調査に展開し、第一報を刊行した。他に、編集委員として参画した『人文地理学事典』は、人文地理学の地平と現況を示す項目を体系化した読む事典として、諸紙・学会誌等で高く評価されている。国際誌への論文投稿が不十分な点が反省される。今後は、空間分析と古地図研究、地理学史の研究を発展させ、著書や図録(展示を含む)の刊行を目指す。

米家 泰作(地理学専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. *Proceedings of the 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto 2009* 2010. Kyoto University Press. (共編著)

【論文】

1. 「近代林学と焼畑—焼畑像の否定的構築をめぐって—」 佐藤洋一郎監修, 原田信男・鞍田崇編『焼畑の環境学—いま焼畑とは』 思文閣出版 2011年 168-190頁
2. 扶余神宮と史蹟—植民地朝鮮における「内鮮一体」の景観— 『歴史の理論と教育』135+136合併号 2011年 45-61頁
3. 「「近代」概念の空間的含意をめぐって—モダン・ヒストリカル・ジオグラフィの視座と展望」 『歴史地理学』54(1) 2012年 68-83頁
4. Historical geography in Japan since 1980, *Japanese Journal of Human Geography*, 65(1) 2013 pp.1-28. (共著)
5. 「焼畑による山地植生の利用と開発—17~18世紀の紀伊山地を例として—」 宮本真二・野中健一編『自然と人間の環境史』 海青社 2014年 213-236頁
6. 「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究—鮮満旅行記にみるツーリズム空間—」 『京都大学文学部研究紀要』53 2014年 319-364
7. 「近代林学と国土の植生管理—本多静六の「日本森林植物帯論」をめぐって—」 『空間・社会・地理思想』17 2014年 41-56頁

II. 自己評価

当該期間の研究は、主として、①近代日本における森林の歴史地理と林学の批判的検討、および②日本の植民地主義における地理的知の歴史地理、という2つの方向で進展し、それぞれ年に1本程度の論文を公表している。これらの問題領域は、日本の歴史地理学においては、十分に注意されていなかった問題であり、英語圏の歴史地理学の議論に呼応する形で、先駆的な研究を開

拓していると自負する所である。ただし研究の公表がほとんど日本語に限定されており、国外への発信に乏しいことは否めない。今後数年間は、引き続き上記の2領域の研究を継続する予定であるが、国際的な研究の発信を課題としたい。

〔現代文化学専攻〕

伊藤 和行 (科学哲学科学史専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『ガリレオ-望遠鏡が発見した宇宙』, 中央公論新社, 2013, 212 頁.

【論文】

1. “Galileo's Principle of Descending Motion along Inclined Planes”, *Historia Scientiarum*, 21, 2011, 93-102.
2. 「18 世紀前半における力学の発展と流体力学の誕生」, 『京都大学数理解析研究所講究録』, 1749, 2011, 1-15.
3. 「18 世紀前半の力学における「座標」概念」, 『科学哲学科学史研究』, 6, 2012, 91-102.
4. 「Turesdell と 18 世紀力学史」. 『科学哲学科学史研究』, 7, 2013, 49-65.

II. 自己評価

本期間の前半では、前期間に引き続き 18 世紀力学史の研究を行い、エネルギーを中心とした保存則誕生の視点から考察を進めたが、その過程で 17 世紀力学とくにガリレオの力学理論の影響の重要性が明らかになった。その点を踏まえ、保存則の側面から晩年のガリレオが力学において直面していた課題を考察した。またその研究過程においてガリレオの手稿の中に未完成のまま残されている彼の考察を検討し、彼の理論の形成過程を解明することの重要性を認識した。現在は、天文観測に関する手紙や観測ノート、著作の草稿などの検討を通じて、ガリレオの天文学に関わる理論が形成されていった過程の解明に取り掛かっている。この領域の重要な手稿の解説、また著作の翻訳、両者を含む研究書の刊行を目指し、現在研究を進めている。

伊勢田 哲治 (科学哲学科学史専修准教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 一ノ瀬正樹・新島典子編『ヒトと動物の死生学 犬や猫との共生、そして動物倫理』（共著、「動物実験の倫理 -- 権利・福祉・供養-- 」107-130 ページ 担当）東京大学大学院人文社会科学系研究科グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」、2011 年 3 月 20 日、167 ページ
2. 戸田山和久・出口康夫編『応用哲学を学ぶ人のために』（共著、「疑似科学問題」2-16ページ

担当) 世界思想社、2011年5月、362ページ

3. 楠見孝・子安増生・道田泰司編『批判的思考力を育む 学士力と社会人基礎力の基盤形成』(共著、「育成事例(3) 科学技術と社会をつなぐ哲学的思考法」169-177 ページ 担当) 有斐閣、2011年9月、246 ページ
4. 菊池誠ほか『もうダメされないための「科学」講義』(共著、第二章 「科学の拡大と科学哲学の使い道」担当) 光文社新書、2011年9月、254 ページ
5. 香川知晶・榎則章編『シリーズ生命倫理学2 生命倫理の基本概念』(共著、第14章「動物」担当、223-239 ページ) 丸善、2012年1月、251 ページ。
6. 戸田山和久・美濃正・出口康夫編『これが応用哲学だ!』(共著、「異文化コミュニケーションとしての応用哲学」担当、46-54 ページ) 大隅書店、2012年5月、312 ページ。
7. 黒田光太郎・戸田山和久・伊勢田哲治編『誇り高い技術者になろう 第二版』(共編著、「1-1 多様なニーズに配慮する企業と技術者: Lixil の取り組み」、4-17 ページおよび「2-3 プロフェッションとしての技術業」、66-84 ページ担当) 名古屋大学出版会、2012年7月、269 ページ。
8. 『倫理的に考える』勁草書房、2012年12月、352 ページ。
9. 中村征樹編『ポスト3・11の科学と政治』(共著、キーワード「欠如モデル」担当) ナカニシヤ出版、2013年2月、308 ページ。
10. 伊勢田哲治・戸田山和久・調麻佐志・村上祐子編『科学技術をよく考える クリティカルシンキング練習帳』(はじめに、ユニット1 背景説明、課題文、ユニット3 課題文、ユニット9 背景説明、課題文、スキル1、4-1、6-2、9-2、10-2、知識1、9-2、コラム1、3~10、あとがき 担当) 名古屋大学出版会、2013年4月、289 ページ
11. 須藤靖・伊勢田哲治『科学を語るとはどういうことか 科学者、哲学者にモノ申す』河出書房新社、2013年6月、301 ページ
12. 野矢茂樹編著『子どもの難問 哲学者の先生、教えてください』(共著、52-54 ページ、97-99 ページ担当) 中央公論新社、2013年1月、198 ページ

【論文】

1. 「認識論的問題としてのモード2 科学と科学コミュニケーション」 『科学哲学』43-2 2010年12月、1-17 ページ
2. "When is diversity within a field desirable? --a social-epistemological analysis of current American sociology--" 『哲學研究』591号、2011年4月10日、pp.1-18
3. 「動物の権利はなぜ説得力を持つのか ---倫理的帰属者文脈主義の試み---」 『倫理学研究』第41号、2011年4月30日、3-12 ページ
4. 「科学技術社会論とクリティカルシンキング教育の多い融合は可能か」 Nagoya Journal of Philosophy vol.9, 2011年4月30日、59-82 ページ
5. 「疑似科学をめぐる科学者の倫理」 『社会と倫理』25号 2011年12月、101-119 ページ。
6. "How to teach research integrity without the notion: attempts in Japan" in T. Mayer and N. Steneck eds. Promoting Research Integrity in a Global Environment. World Scientific Pub. Co. January 2012, pp. 251-243.
7. 「認識論の社会化と非認識的価値」 『哲學』64号、2013年4月、9-24 ページ。

8. 「ウィッグ史観は許容不可能か」 Nagoya Journal of Philosophy vol. 10, 2013年11月、4-24ページ
9. 「リスクとそのコミュニケーションについて哲学者が言えること」『日本安全学教育研究会誌』vol.7、2014年8月、45-48ページ。

II. 自己評価

この5年間は応用哲学、動物倫理、科学技術倫理、クリティカルシンキングと非常に多方面にわたって研究活動を行ってきた。とりわけ力を入れてきたのは、科学技術社会論とクリティカルシンキングの融合というテーマであり、これについては『科学技術をよく考える』という書籍をまとめる形で一定の成果を世に問うことができた。また、自らの過去の倫理学の研究を再構成し一旦総括するという意味で論文集『倫理的に考える』を出版したことも次のステップに進む上で重要であったと考える。この2年ほどは、19世紀の科学哲学を一つの研究テーマとして雑誌連載を行うほか、関連する研究発表を精力的に行っている。こうした哲学的研究を現代の科学哲学と接合することで、今後、より立体的に科学哲学の諸問題にアプローチできると考える。

海田 大輔（科学哲学科学史専修講師）

I. 研究業績

【論文】

1. “Are Dispositions Distinct from Their Bases and Causally Impotent?”『京都エラスムス計画2010年度派遣成果論文』2010年
2. 書評：Bryan G. Norton, *Searching for Sustainability: Interdisciplinary Essays in the Philosophy of Conservation Biology*（共著）『京都エラスムス計画2010年度派遣成果論文』2010年

II. 自己評価

この期間においては主に、(1)傾向性の内在的フィークの問題、(2)トロープの個別化の問題に取り組んだ。(1)では、古典物理学の事例にもとづいて内在的フィークの存在を擁護する議論を展開し、その一部を海外の学会等で発表した。これらについて、近日中に包括の上、英文論文にて発表する予定である。また今後は、ここで得られた成果を、脳神経倫理学や社会心理学における概念的問題に応用することを目指している。(2)では、トロープの個別化を時空点の位置によって行うという立場の問題点を検討し、この立場がどこまで維持可能であるかを探究してきた。これについても、近日中に包括し、論文にて発表したいと考えている。

林 晋（情報・史料学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「「数理哲学」としての種の論理—田辺哲学テキスト生成研究の試み（一）」、『日本哲学史

研究』第7号,2010年9月.

2. 「田辺元の『数理哲学』」、『思想』2012年1月号
3. 「情報の宝庫 -二つの田辺文庫-」、『思想』2012年1月号
4. 「澤口昭幸・中沢新一の多様体哲学について —田辺哲学テキスト生成研究の試み(二)—」、『日本哲学史研究』第9号、2012年10月
- 5.

II. 自己評価

当該期間に行った研究は、1. モダニティの歴史社会学的研究、特に情報産業と数学の歴史に関連して、2. この1の研究に基づく現代日本社会、特に情報産業への提言、3. 京都学派の哲学の史料学的アプローチによる解明、4. 歴史資料研究用ツール SMART-GS の開発、の四つである。この内、もっとも力をいれたのは1、2であるが([その他]の6,7)、これについては、まだ発表をしていない。その一部が、東大出版会から出版される山口栄一編「沈みゆく船・日本を救え(仮題)」に論稿が、[その他]の6の基調講演を纏めたものが社会情報学会会誌に掲載されることが決まっている。一方、当該期間中、もっとも学界・社会から評価を受けたのは、3の京都学派研究と、その研究のための必要性もあって開発している4の史料研究用ツール SMART-GS であり、これらは、たびたび全国紙や書籍などで紹介された。

杉本 淑彦 (二十世紀学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『大学で学ぶ西洋史 [近現代] 』(共編著)、ミネルヴァ書房、2012年、403頁
2. 『新詳 世界史B』(高等学校地理歴史科用教科書、共著)、帝国書院、2013年、320頁

【論文】

1. 「被曝変異譚への欲望——「ウルトラの世界」と放射線」、福間良明・山口誠・吉村和真編『複数の「ヒロシマ」——記憶の戦後史とメディアの力学』青弓社、2012年、227~255頁
2. 「文化財とナショナリズム」『世界史のしおり』帝国書院、63号、2014年9月、1~2頁

II. 自己評価

フランス国民のアラブ=イスラーム観の変遷を検証し、成果の一部(ナポレオンのエジプト遠征に関する記憶)を、国際シンポジウムにおいて発表した。

この第一の研究は、戦争の記憶という、より大きな第二の研究とつながっており、日本人のアジア・太平洋戦争の記憶について、被曝問題に関連づけながら検証し、その成果を公刊した。

第一の研究については、エドワード・サイードに代表される従来のオリエンタリズム批評とは異なるオリエンタリズム論を展開しようとしている点が、将来の歴史学研究に貢献するところ大だと考えている。

第二の研究については、2011年の福島第一原発事故に関わって、広島・長崎の被曝に関する記憶と、原子力の平和利用に関する国民意識との関連性を論じたことが、今日的意義のあることだと考えている。

研究によって得られたこうした知見を社会に還元するために、高等学校と大学用の教科書の執筆に取り組んだことも重要な活動であり、ひきつづいて社会還元を努めるために、『教養としてのフランス近

現代史』(2015年3月刊行予定)の編集と執筆、および、高等学校用教科書の改訂に現在取り組んでいる。

永井 和 (現代史学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 倉富勇三郎日記研究会編『倉富勇三郎日記』第1巻、国書刊行会、2010年、920p
2. 倉富勇三郎日記研究会編『倉富勇三郎日記』第2巻、国書刊行会、2012年、1276p

【論文】

1. 「波多野敬直宮内大臣辞職顛末——一九二〇年の皇族会議」『立命館文学』624、2012年、pp.493-511
2. 永井和、川寄陽「SMART-GSを利用した倉富勇三郎日記の翻刻と倉富家所蔵史料について」『二十世紀研究』13号、2012年、pp.1-41
3. 永井和「プレFD研修プログラム・コーディネーターの二年半」田口真奈・出口康夫・京都大学高等教育研究開発推進センター編『未来の大学教員を育てる 京大文学部プレFDの挑戦』勁草書房、2013年、pp.227-238

II. 自己評価

平成20年度から始めた倉富勇三郎日記の翻刻事業を継続し、2012年に第2巻を刊行し、第3巻は2014年末に刊行の予定である。本日記は学術的にみてきわめて高い価値があり、世界的にも注目されている。これまでごく限られた研究者にしか利用できなかったこの貴重な史料を翻刻・刊行することは、一大文化事業といってよく、余人をもってしては不可能と自負している。

永原 陽子 (現代史学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. (編著)『生まれる歴史、つくられる歴史—アジア・アフリカ史研究の最前線から』(刀水書房、2011年)、227+ix p.

【論文】

1. 「『植民地責任』に国際社会と日本はどう向き合うか」『女たちの21世紀』62号(2010年6月) pp.23-26
2. 「植民地体制の国際化と『植民地責任』—南部アフリカを手がかりに—」『歴史学研究』872号(2010年10月増刊号) pp.2-10
3. 「戦争責任と『植民地責任』」『第10回日韓・韓日歴史家会議報告書』(日韓文化交流基金、2011年) pp.25-35
4. 「20世紀初頭西南アフリカにおける二つの植民地主義—『ブルーブック論争』から

- 一」井野瀬久美恵・北川勝彦（編）『アフリカと帝国—コロニアリズム研究の新思考にむけて』（晃洋書房、2011年）、pp.252-274
5. 「『韓国併合』と同時代の世界、そして現代—アフリカからの視点」国立歴史民俗博物館（編）『「韓国併合」100年を問う—2010年国際シンポジウム』（岩波書店、2011年）pp.242-252
 6. 「현대사 속의 ‘식민지 책임’-아프리카 식민지를 중심으로」（『現代史のなかの『植民地責任』』 도시환 외 『한일협정 50 년사의 재조명Ⅱ-한일협정체제와 ‘식민지’ 책임의 재조명-』（동북아역사재단、2012년）, pp.211-230
 7. 「植民地研究の現在—アフリカ史の場合」『歴史評論』752号（2013年）pp.54-63
 8. 「ポストコロニアル・アフリカのウラン鉱山—ナミビアとフクシマの間—」『神奈川大学評論』76号（2013年）pp.54-63
 9. 「世界史のなかの植民地責任と『慰安婦』問題」西野瑠美子ほか（編）『「慰安婦」バッシングを越えて—「河野談話」と日本の責任』（大月書店、2013年）pp.215-234.
 10. 「『戦後日本』の『戦後責任』論を考える—植民地ジェノサイドをめぐる論争を手がかりに」『歴史学研究』921号（2014年8月）pp.1-10
 11. 「식민지제노사이드와 세계사 나가하라 요코」（『植民地 ジェノサイド と世界史』）『식민지라는 물음』（소명출판、2014년）,pp.527-561

II. 自己評価

この間おこなってきた研究はおもに、①「植民地責任論」にかかわるもの、②南部アフリカ史の実証研究（とりわけ第一次世界大戦期）、の二つの領域のものである。①にかんしては、2010年度以前から進めてきた研究がおりしも「韓国併合100周年」に呼応した東アジアの植民地史への関心の高まりにかみ合ったものとなり、東アジア研究とアフリカ研究とをつなげた植民地史の比較研究や世界史規模の植民地研究を推進することに寄与できた。②にかんしては、第一次世界大戦期前後の時期を中心に植民地兵や移民労働、女性労働、戦争と環境の関係など、従来未開拓であった分野での研究を進めることができた。

2013年度から京都大学大学院文学研究科に赴任したのに伴い、①②を踏まえた現代史像の提示という課題に取り組んでおり、今後これにかんする論文執筆等にいっそう力を傾けたい。

小野澤 透（現代史学専修准教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 肥後本芳男、山澄亨、小野沢透編『アメリカ史のフロンティアⅡ 現代アメリカの政治文化と世界——20世紀初頭から現代まで』（昭和堂、2010年）、「概観」、pp.110-111、第7章「アイゼンハワー政権とNATO——拡大抑止をめぐる」、pp.160-187.
2. 小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編著『大学で学ぶ西洋史 [近現代]』（ミネルヴァ書房、2011年）、第11章第1部、pp.306-313、「歴史への扉25」、pp.313-315.
3. 中野隆生・中嶋毅共編『文献解説 西洋近現代史3、現代の欧米世界』（南窓社、2011年）、第3章、pp.39-48、第5章、pp.67-77.

4. 和田光弘編著『大学で学ぶアメリカ史』（ミネルヴァ書房，2014年），第11章「冷戦とアメリカ外交」，pp.231-258.
5. 「アメリカと中東：歴史的な視点から」，日本国際問題研究所編『グローバル戦略課題としての中東：2030年の見通しと対応』，2014年，pp.133-144.

II. 自己評価

著書1は，米国の核抑止態勢の成立を拡大抑止の側面に注目して検討したが，米国の対欧州政策と未公開単著（後述）で扱う米国の中東組織化構想の分析の結節点に当たる。一方，当該時期には概説書の分担執筆が重なった。共著2～4において，両大戦間期から冷戦の終焉に至るまでの時期の，アメリカ内政・外交史および西欧世界の歴史に関する概説をひとつおりに執筆することとなった。共著5は将来の展望も含めた米・中東関係の学術的検討だが，冷戦期以降の米・中東関係の概説という側面も有している。

当該時期の多くは，未公開単著（『幻の同盟：冷戦初期アメリカの中東政策』，2015年刊行予定）の執筆にほとんどの時間を費やした。同書は，先行研究で検討されてこなかった1950年代の米国の中東組織化構想，および中東を巡る米英関係を，政治・軍事・経済的側面から包括的に検討する。全編書き下ろしで原稿用紙2千枚を超える大著となる予定であり，同書に盛り込むために主たる研究フィールドである米・中東関係に関する学術的なアウトプットを控えた側面が強い。